



秘密のトンネル

～捨てられた王女～

智



ふいに、窓から一輪のフリージアが姿を現した。

静かな住宅地。辺りにはあやめ以外には誰も居ない。敷地いっぱい建てられた、小さな一戸建ての1階の窓から、黄色いフリージアの蕾が頭を出している。

(何かしら・・・)

まっすぐ歩いていくと、花にぶつかってしまいそうだったので、あやめは斜めに歩いてそれを避ける。通り過ぎざまに、ちらっと横目でフリージアを見ると蕾は、ぽん、と手品のように軽やかに開いた。

「気持ち悪くない？ほんとに、ポンって開いたんだよ。」

夕食後、あやめは自分の部屋で、電話に向かって今日の出来事をぶちまけていた。

「確かにねえ。手品用の花だったんじゃない？そういうの、よくテレビでやってるじゃん。」

電話の向こうで、里美が笑っている。

「でも、本物っぽかったんだよねえ・・・それとね、フリージアって、一つの茎に幾つも花が咲くものなんだけど、それには一つしかついてなかったの。ママに聞いたもん、間違いないよ。」

あやめの母は、100坪ほどの小さな畑でハーブを育て、オリジナルブレンドのハーブティを作って生計を立てている。ハーブ園には様々な種類の花も植えてあり、フリージアもその中に含まれていた。母親の、一番好きな花だ。

「そっか。でも、新種だったりするんじゃない？」

「そういうもんかなあ。春の花だけど、夏に咲いてるしね・・・」

受話器を握る手が、汗ばんでいる。

「まあ、そんなに気にする事ないって！」

里美が豪快に笑う声が、聞こえてくる。気持ちの良い笑い声。

(やっぱり、さっちゃんと話すと、元気になるな)

「ありがとね、さっちゃん」

「うんうん。元気になったならよし！じゃ、明日ね！」

電話を切って、椅子に寄りかかると、机の脇にある窓から、冷たい夜風が入ってくるのが分かった。

(気持ち良い・・・)

あやめは、机の上の本棚から、英和辞典を取り出した。ノートを開く。

夏休みに入ってから毎日、テニス部の練習には出ているが、おかげで宿題はちっとも進まない。連日、夕食後にノートを開く。英文を見たとなんに、昼間の疲れがどっと出る。眠い・・・の繰り返し。

(今日も、ちょっとだけ・・・)

腕を枕に、机にうつ伏せになると、体が重く溶けていく。薄れていく意識の中で、あやめは黄色い花を見た。

黄色い、フリージア。

イメージに悪寒を感じて、あやめは飛び起きた。眠気は一気に吹き飛んだが、嫌な気持ちは残ったままだった。

(なんだろう・・・)

その時だった。

「こんな所に隠れてやがったか。」

急に、低い男の声がした。窓の向こうに、白い男の顔が浮かんでいた。あやめは、驚きすぎて、声も出ない。

「随分、探したぜ。フリージア。」

(フリージア?)

あやめが見ていると、男はそのまますうっと部屋に入ってきた。

「だ、誰？」

ようやく声が出た。

「おっと、静かにしてな。」

男はパチンと指を鳴らした。

「ママ！」

あやめは叫んだが、声が出ない。体も動かない。男は鋭い瞳で、あやめの部屋をなめるように見回している。背が高く、思ったよりも若い。顔が小さく、金色の短い髪の毛を七三にきっちり分けて寝かしつけて、まるでハリウッドの、スパイ映画から抜け出てきたみたいだ。

「お前、アレ、持ってるんだろ？」

男は手荒く、机の上を物色していく。

「どこにやった？」

アレって、何のこと言ってるんだろう。恐怖が涙に形を変えて、あやめの頬を伝い落ちる。怖い・・・

「ちっ。時間がねえ。後で吐かせるか。」

男は顔を歪めてあやめを睨みつけ、首を鳴らした。そしてもう一度、指をパチン、と鳴らした。あやめは意識を失い、ぐったりと床に倒れこんだ。

「フリージアが、コゴミにさらわれた。」

その一言で、一同は騒然とした。花咲き乱れる庭園の真ん中にあるあずまや風の建物の中で円卓を囲んでいた8名の大臣達は、青くなったり赤くなったりしながら、口々に叫んだ。

「どういうことだ？」

「どうしてコゴミがフリージアのことを知っているんだ！」

「だから、すぐ捕まえてしまえば良かったんだ！」

彼らは次第に、一人の男の名前を口に始める。

「ミサキはどこだ？」

コゴミはあやめを抱えて、細いトンネルのような通路を走っていた。誰が作ったのか知らないが、とても単調な道だ。ただただ、まっすぐに進む。所々に、フリージアの花をかたどったと思われる青白いランプがある。

(もうちょっとだ・・・)

コゴミは、汗一つかかずに、全速力で走り続ける。前方に見えていた小さな白い点が、次第に大きくなっていく。もうちょっとで、出口。このトンネルを抜けたら、クーニャンが待っているはずだった。

(何事もないといいんだが・・・)

フリージアが生きていると知ったのは、丁度10日前だった。コゴミはいつものように、王家の屋敷の中庭で花を摘んでいた。

(おっ・・・)

ミサキが早足で廊下を通るのが見えた。声をかけようと、コゴミは立ち上がったが、すぐにまたしゃがみこんだ。

「待たせたな。」

大王イエイオンだった。伴の者も連れずに、一人廊下にたたずんでいる。いくら屋敷の中とはいえ、珍しい。コゴミは悪戯心から、音を立てないように、そっと2人に近い窓の下に近寄った。

「信じて、良いのか？」

イエイオンの荘厳な声が聞こえてくる。

「はい。間違いございません。」

ミサキは、いつになく神妙な声を出している。

(なんの話だ・・・?)

「そうか・・・掟とはいえ、確かにお前の母親には酷な任務であったのだろう。優しい女だったからな。無理もない。」

イエイオンは、深くため息をついた。

「お前にも・・・済まない事をした。」

「勿体無い事を・・・それに、私が申した事なのです。」

「お前が？」

「はい。あの日、私は胸騒ぎがして、母の姿を探しました・・・」

産まれたばかりの小さな命を見つめて、女達は途方に暮れた。イキシア妃の腹が、通常の妊婦と比べて大きめに見えることは、数ヶ月前から気付いていた。けれども、そんなはずはない、とアリウムが否定し続けてきた2人の赤ん坊が目の前に居る。

「お生まれになりました・・・」

喜びに包まれるはずのこの瞬間が、なぜか涙に覆いつくされる。イキシアは、涙をいっぱいたたえた瞳で、双子を見つめる。

「どちらに、なさいますか？」

アリウムは、声をひそめて聞いた。ここから先は、誰にも気付かれてはならない。

「フリージア・・・」

イキシアはかすれるように呟くと、片方の赤ん坊をその腕に抱きかかえた。

「フリージア、ごめんなさいね。」

「イキシア様？」

「この子の・・・名前です。お前も、とっくに気付いていたでしょう・・・私にも分かっておりました。この子を、こうして抱いてられるのは、今だけです・・・せめて名前を、と・・・」

イキシアは、赤ん坊を抱きしめ、声を殺して泣きに泣いた。

「イキシア様・・・そろそろ・・・」

部屋の外が騒々しくなって来た。もうすぐ大王イエイオンが来るだろう。もう、時間がない。アリウムは、イキシアから赤ん坊を引き剥がすようにして抱き取った。

「お預かりいたします。」

イキシアは、膝を着いて一礼した。

「フリージア！」

イキシアは身を翻し、妃の部屋の隠し扉から外へ抜け出した。目指すは、王家の屋敷の裏手にある、小さな崖。2メートルほどの崖を滑り降りると、小さな正方形の地面がある。そして、崖下の直角に曲がった2枚の壁には、一つずつ扉がついている。

(左の扉・・・)

アリウムは、昔母に聞いた言葉を思い出しながら、扉を探る。

(扉の中央に、フリージアの紋章・・・そのすぐ下・・・あった、この穴だ)

懐から小さな鍵を取り出し、扉にはめ込む。扉は音もなく、すうっと開いた。中は青白く光っている。

(この中に、この子を・・・)

置いて鍵を閉めたら、どうなるだろう？アリウムは、腕の中の小さな命を見つめた。フリージアは、真っ赤な顔をして、静かに眠っていた。まだ、産湯も使わされていない、可哀想な子供。

(出来ない！)

アリウムは、天を仰いだ。すると、小さな瞳と目が合った。

「母さん、何してるの？」

「ミサキ！どうしてここに？」

5歳になる、アリウムの一人息子。最愛の息子のミサキだった。

「僕、なんだか心配になって、母さん探してたの。母さん、何持ってるの？」

ミサキは、小さな体でスルスルと器用に崖を降りてきて、アリウムに抱きついた。

「わあ！赤ちゃん？・・・あ、お妃さまの赤ちゃんだね！もうすぐ生まれるって、母さん言ってたもんね！」

「・・・」

「でも、どうしてここに居るの？あれ・・・扉が開いてる・・・」

ぐずぐずしている暇はない・・・アリウムは思い切って扉の中に一歩入り、小さいフリージアを地面に置いた。扉を閉め、鍵を抜く。

それからアリウムは、しゃがんでミサキの頭を抱き寄せた。

「お前、このことは誰にも言ったらいけないよ。」

「お母さん・・・？」

アリウムは、きつくミサキを抱きしめた。まだ小さなミサキ。あんまりきつく抱きしめたら、壊れてしまいそうなほどだ。しかし、扉の向こうに置き去りにした赤ん坊は、それよりももっと儚い体つきをしていた。

「赤ちゃん、どうして、あそこにしまったの？」

ミサキが不思議そうに、アリウムを見た。

「あんなところに置いといたら、死んじゃうよ。」

この子に、どう説明したら分かってもらえるだろうか？アリウムは、赤ん坊の体温を思い出しながら思案した。ミサキは、扉に耳をつけて、中を窺っている。

「あ！母さん、泣いてるよ！赤ちゃん泣いてるよ！」

ミサキまで、泣きそうな顔で言う。

(誤魔化しはきかない・・・)

アリウムは、決心した。ここで適当な嘘をついても、ミサキは一生このことを忘れはしないだろう。いつか分かってしまう日が、きっと来てしまう。

「ミサキ、良く聞くのよ。母さんは、この子を捨てに来たの。」

「捨てる？」

「イキシア様が赤ちゃんをお産みになったんだけど、赤ちゃんは2人産まれてしまったの。」

「双子？」

「そう、よく知ってるわね。でもね、この国の決まりで、お妃様が双子を産んだ時は、片方はこの扉の向こうに捨てることになっているのよ。」

「どうして？」

これは、分かるかしら・・・？アリウムはちょっとためらってこういった。

「大きくなって、ケンカしないようによ。」

「ケンカ？ケンカくらいいいじゃないか。」

小さなミサキには、王位継承者を中心にして行われるであろう争いは、想像できない。

「ダメなの、王子様やお姫様は、ケンカしたらいけないのよ。」

「ふうん・・・でも、殺してしまうんでしょ？その方が良くないでしょ？」

ミサキは、涙目になって母を見た。

「どうして、母さんが殺しちゃうの？」

ガツンと、頭を殴られたようだった。殺しちゃうの？

殺すのではない、そう言い聞かせて来たが、やっぱり殺すのだ。“置いてくるだけ”というのは自己弁護に過ぎない。

「そうね・・・母さん、赤ちゃんを殺すのね・・・」

張り詰めていたものが、弾け飛ぶのを感じた。10も20も、一気に歳を取ったような疲労感がアリウムを襲った。

「イキシア様がいないっていうなら、母さんがもらったら？僕の妹になるでしょ？嬉しいな。」

ミサキは無邪気に言う。

「だめよ、この国では、育てられないわ。」

「じゃあ、他の国。」

(他の国・・・?)

アリウムは、心が震えるのを感じた。

(他の国ならば、分からない・・・)

扉の向こうで、赤ん坊が呼んでいるようだった。亡くなったアリウムの母は、この扉をこう呼んでいた。

『次の世界への扉』

アリウムは、吸い寄せられるように扉の前に立った。

「ミサキ・・・母さん、『次の世界』へ行ってみようかしら。」

「『次の世界』？」

「そう、『次の世界』。この扉の向こうにあるって、おばあさまが言ってたわ。」

「そこなら、赤ちゃん死なないの？」

「多分・・・」

アリウムは、再び扉を開けた。フリージアの泣き声が大きく響いてくる。慌てて抱き上げ、あやす。ミサキより、もっと小さい、儂い命。

「ごめんね・・・」

アリウムの涙が、フリージアの頬にぼたぼた落ちていく。

「母さん」

ミサキが小さく言った。

「行っておいでよ。」

「え？」

「僕、内緒に出来る。」

ミサキは、ワケ知り顔でムンと胸を張って見せた。

「『次の世界』で、赤ちゃんと待ってて。僕、大きくなったら迎えに行くから。」

アリウムは、フリージアを抱えて扉の中へ消えた。ミサキは、母の失踪について何も語らなかった。母親が居なくなったのに、泣きもせずに暮らすミサキを、父親は健気と思い可愛がり、十五年が過ぎた。

(双子の妹が生きている?)

コゴミは耳を疑った。王女ワトソニアが双子だったという話は、今まで噂にも聞かなかった。

(聞き間違いでは・・・)

もう一度、耳を澄ます。

「しかし、その『次の世界』で生きている証拠はあるのか？」

「実は・・・錠を破って、私は一人で『次の世界』に行ってみたのです。」

「なに？しかし、鍵は・・・」

「私が隠し持っておりました。母が失踪した時に、あの扉の鍵を閉めたのは私でございます。」

「そうであったか・・・」

「私の母は、『次の世界』におりました。小さなハーブ園をこしらえて、フリージア様と一緒に暮らしておりました。

あのハーブ園の造り、そしてワトソニア様と瓜二つのフリージア様の容姿。間違いございません。」

「そうか・・・」

イエイオンは、庭に咲くフリージアの花を眺めながら、しばらく黙っていた。

「それが本当なら、フリージアに一目、会いたいものだ・・・。叶うだろうか？」

深くため息をつき、ミサキを見つめるイエイオンは、一人の寂しい父親のようであった。

「イエイオン様・・・母とフリージア様は、この国に戻る事ができますでしょうか？」

「戻ってもらいたいと思っておる。しかし、まずは2人の意向を聞かぬといかん。ミサキ、聞いてきてもらえるだろうか？」

「では、これから、母に会って参ります。私のことを覚えているかどうかわかりませんが・・・」

ミサキは少しためらうように言った。

「子供の事を忘れる親はおらぬ。良い返事を待っておる。」

イエイオンは、静かに立ち去った。

ミサキは、ほっとため息をついた。母親から受け継いだこげ茶色のきれいな髪が、窓から入ってきた風にそよぐ。
(これで、やっと母さんと暮らせる。)

ミサキは、幼い頃に見た母の面影と『次の世界』でハーブを摘んでいた母の姿を照らし合わせてみる。
(間違いない。)

抑えようとしても、顔に笑みがこぼれてしまう。やっと、やっと母を迎えに行けるのだ。

「おい、ミサキ。」

顔を上げると、コゴミが怖い顔をして立っていた。

「コゴミ、どうしたの？」

「さっきの話は、本当か？」

「なんのこと？」

「ワトソニアが双子だったって話だよ。」

ミサキはたじろいだ。まさか、聞かれていようとは夢にも思わなかった。

「コゴミ、何言ってるんだ？ワトソニアの双子なんて、見たこともないよ。」

動揺しながらも、シラを切る。

「誤魔化すなよ。お前・・・双子が戻ったら、どうなるか分かってるんだろうな？」

「どうなるか？」

コゴミの頭の中には、現在王国で起こっている異常現象があった。

「双子が戻ったら、ワトソニアはどうなる？いや、そもそも双子が生きているから、こんなことになったんじゃないかねえのか？」

ミサキは、返す言葉がなかった。

「クーニャン？」

トンネルを抜けたコゴミは、そっと辺りを窺った。予定通りならば、クーニャンがフリージアを引き取りに来ているはずだ。そうしたら、フリージアを預けて、コゴミはまた『次の世界』へ鍵を探しに行こうと思っていた。

クーニャンの返事はなかった。空にはきれいなレモン色の三日月が浮かんでいる。約束した時間には少し遅れたが、十分も過ぎていないはずだ。

(何かあったのか・・・?)

コゴミは警戒する。あやめは、腕の中でよく眠っている。当分起きる気配はない。

(仕方ない・・・自力で戻るか。)

コゴミが一步前へ踏み出そうとしたとき、彼は後ろから肩を掴まれて止まった。

「コゴミ・・・フリージアを渡してくれ。」

「ミサキか・・・」

「連れて行って、どうするつもりなの？」

「お前に話しても、分かりやしねえよ。」

吐き捨てるように、コゴミは言った。

「フリージアは、まだ何も知らないんだよ。」

「だから、都合が良い。」

そのまま、すっとしゃがみこんで肩を外し、コゴミはミサキと向かい合った。

「そこまでです。」

天から声が降ってきた。声と共に、男が一人ふわりと降りてくる。黒髪のロングヘアーを一つに縛り上げた長身の男。常に微笑んでいて表情を崩さないが、瞳は紅く、冷たく光っている。

「ミヤシロ・・・お前もなのか？」

ミサキの顔が、悲しく歪んだ。

「お前もか、というより、ミサキにも是非、お仲間になってもらいたいものです。」

「目を覚ましてくれ！」

「目は、ぱっちり覚めていますよ。」ミヤシロはにっこり笑った。

「さ、コゴミ、行ってください。」

「すまねえな」

コゴミはパッと、崖の上に舞い上がり姿を消した。

「ミヤシロ、お前たちのやっていることが、どういうことなのか分かっているのか？」

ミサキは、険しい顔でミヤシロに詰め寄った。

「分かっていますよ。」

ミヤシロは、一瞬真顔になりあたりの音に耳を済ますと、ふわりと飛び上がった。崖の上からミサキを見下ろして

「それではまた。」

と笑顔でつぶやくなり、身を翻して去っていった。

王家の庭園で会議をしていた面々は驚愕した。あの、立ち入り禁止の崖下から男が人を抱えて走ってくる。

「なんだ、あれは？」

「コゴミか！？」

「・・・ということは、あれがフリージア様！」

「お、追え！ミサキは何をしておる！」

ばらばらに叫びながら、席を立ち庭園へと駆け込んでいく。

「逃がすな！」

庭園中に乱れ咲いているフリージアをかき分けながら、8人の男達がノロノロとコゴミの後を追う。

「お先に。」

集団を追い越しざまに振り返り、笑顔で挨拶していくミヤシロ。

「ミ、ミヤシロ！お前もか！」

驚いた数名は、腰を抜かして転んでしまった。

(庭園を抜ければ、一安心だな・・・)

そう思った矢先、コゴミは目の前にどっしりした男が立っているのを見た。

「コゴミ、止まれ。」

「イエイオン様！」

さすがのコゴミも、足が止まった。

「フリージアか。」

「はい・・・」

「姿を見るのは、初めてだ・・・生まれた事すら、イキシアは教えてくれなかったからな。」

イエイオンは、優しく、そして悲しい眼差しであやめを見つめた。

「フリージアを、私に任せてはくれぬか。イキシアにも、会わせてやりたい。」

「ワトソニア様は、どうなさるおつもりですか。」

コゴミは、鋭い視線でイエイオンを見た。

「ワトソニアも、私の娘だ。大切なのは、どちらも同じだ。」

「信じられません。」

コゴミは、一歩、後ろへ下がった。

「娘をどうするかは、私が決める事だ。今ならとがめだてせん。フリージアを置いていけ！」

コゴミは下唇を噛んだ。

(イエイオン様には、分からないのだ！！)

「出来ません！」

コゴミは、軽く礼をすると、そのまま全速力で走り出した。

「コゴミ！たのむ！」

後ろから、イエイオンの悲痛な叫びが追いかけてくる。しかし、止まらない。

(俺には、守るべきものがあるんだ！)

気がつくと、いつの間にかミヤシロが並んで走っていた。

「ミサキは振り切りました。追ってはきません。さあ、帰りましょう。」

いつ、誰が見ても安心するミヤシロの最高の笑顔が、そこにはあった。

あやめが目覚めたとき、部屋には誰も居なかった。真っ白いシーツのかけられたベッドに寝かされており、シーツからは花の良い匂いがした。

(ここは・・・?)

ベッドからおりると、少し肌寒かった。足元に籐の籠が置いてあり、中に白いカーディガンが畳んであった。あやめは、カーディガンを手に取り、羽織ってみた。

「うわぁ・・・」

思わず声が出た。カーディガンもまた、花の良い香りがしていた。何の花だろう。

窓からは一面のチューリップ畑。雲ひとつない夜空の下、月明かりに照らされて静かに揺れている。

「目が覚めたか。」

音もなく、コゴミが部屋に入ってきた。

「さっきは、悪かったな。ちょっと急いでいたもんだから。」

コゴミは、部屋の隅にある一人掛けのソファに腰を下ろした。

「さて・・・お前はどこまで知ってるんだ？フリージア。」

あやめは不思議そうに、コゴミを見た。

(この人、何か勘違いしているんだ)

「私、フリージアじゃありません。あやめよ。瀬戸あやめ。」

どうにか、誤解が解けると良いんだけど。

「あやめ・・・か。ってことは、本当に何にも聞いてないんだな。」

ため息をついてソファを離れ、コゴミは部屋を出て行った。

(なんなんだろう?)

あやめは、逃げ出そうかと思ったけれど、もう一度、外の景色を見て諦めた。

(こんな場所、全然知らない。うちの近所にはこんなところない。・・・まるで、オランダの絵葉書みたい。どこに連れて来られちゃったんだろ)

どう考えても、自力で家に帰れるとは思えなかった。景色を見る限り、人里離れた山奥にでも連れてこられてしまったのだろう。

十分ほどすると、コゴミは大きなお盆を抱えて戻ってきた。

「少し話が長くなる。おなかも空いただろ？座って食べろよ。」

コゴミは顎で、さっきコゴミが座ったソファの向かい側にあるソファを示した。

「おなかなんか、空いてない。」

あやめはそう言ったが、コゴミが煎れるお茶の香りと、お盆に並んでいる美味しそうなサンドイッチを見たら、胃が動くのが分かった。

「ほら、あったかいうちに飲めよ。」

コゴミは、紅いハーブティを差し出す。促されるまま、あやめは向かいのソファに腰掛、カップを手に取った。

ハーブティの甘い香りが、あやめを包み込む。一口。また一口。熱いお茶が喉に気持ちいい。口の中に、甘く広がる花の香り。

「良い香り。」

思わず、口を滑らせた。

「そうだろ。何しろ俺が育てたハーブだからな。」

「え？あなたがハーブ育ててるの？」

あやめが見たところ、目の前の男はかなり若い。

(まだ大学生くらいじゃない。趣味なのかな？おじさん臭い趣味・・・)

いきなりやって来て攫われたことを除いて、容姿だけを見ると、アイドル並みにカッコイイ。でも、趣味がハーブ。

(まるで、盆栽育ててる爺さんね。)

あやめはこらえようと思っても、顔がにやけてしまう。

「なんだ？そんなにお茶がうまかったか？」

コゴミはちょっと嬉しそうに、あやめを見た。

「このサンドイッチのパンに入ってるハーブも俺が作ったもんだ。中のサラダもな。」

「パンも！？」

サンドイッチを齧ると、これもまたとてもよい香りがする。お皿に盛ってあったサンドイッチを、あやめは全部食べてしまった。

「すごい食欲だな。」

コゴミは、小さく声を出しておかしそうに笑った。

「やっぱり、ワトソニアとは違うな。」

「ワトソニア？」

また、花の名前。あやめは記憶を辿る。

確か、ワトソニアって、アヤメ科の植物。フリージアと似ているけれど、もう少しおとなしい感じの花だ。そういえば、フリージアもアヤメ科。アヤメ・・・あやめ。

「花の名前ばかりね。」

「ん？ああ、そりゃそうさ。この国は花の王国だからな。」

「あなたの名前は？」

また、花の名前なのかとあやめは期待したが、答えは違った。

「コゴミだ。残念だけど、俺の名前は花じゃねえよ。」

確かに、聞いた事ない名前だ。

「コゴミ食った事あるか？うまいぜ。」

花ではなかったが、やっぱり植物だった。

お茶を飲んだ後、コゴミはフリージアの生い立ちについて語った。あやめは、どうしてもそれが自分だとは思えなかったが、自分の境遇に似ていることは否めなかった。

あやめには、父が居ない。母親が女手一つで育ててきた。離婚したのか死別したのかすら、分からない。母に聞いても、上手く話をかわされて、今日まで来てしまった。親戚も一人もいない。

そして、母のハーブ園。ハーブ園が小さいにも関わらず、生計を立てていけるのには理由があった。母が育てるハーブは、他のどこものよりも立派に育っていた。味も良く、香りも良い。そして、ブレンドしたオリジナルハーブティは、独特な風味を持っていた。母はマスコミに取り上げられるのを極端に嫌っていたので、雑誌などに掲載される事はなかったが、口コミで人気が拡がり、今では日本全国、ひいては海外からも注文を受けるほど。あやめは毎日飲んでいたが、巷では幻のお茶と呼ばれるほどの希少価値のある商品となり高値がついたため、母の商売は成り立っていた。

あやめは、コゴミの話聞き、窓の外に広がるチューリップ畑や、コゴミが出してくれたハーブティを思うと、母がここからやって来たのではないか、という気がしてしまうのだった。コゴミのハーブティは、母の作るブレンドティと同じように、口の中に良い香りが後々まで広がる。

「あなたは、私の母に会った事があるの？」

あやめは、消え入りそうな声で聞いた。

「ああ、おばさんには会った事があるよ。まだ、4つの頃だから、ほとんど記憶に残ってないけどな。」

「じゃあ、その、ミサキって子とも？」

「幼馴染だ。ずっと仲良くやってきたよ。」

「そうなの・・・」

本当の話なのだとしたら・・・あやめは思った。ミサキという息子は、今までどんな気持ちで生きてきたのだろう。

ひょっとして、ものすごく怨まれているのではないか・・・ぞっと、背筋が凍る感じがした。

「まあ、過去の話はともかく・・・」

コゴミは立ち上がって、体を伸ばしながら言った。

「これからの話だ。でも、少し疲れたな。明日にしよう。今夜は、そこのベッドで寝ろ。」

あやめが何か言う暇もなく、コゴミはあくびをしながら、さっさと部屋を出て行った。

クーニャンが戻ったのは、夜明け前だった。たいした怪我もなく、一人で戻ってきた。

「後はつけられなかったでしょうね。」

ミヤシロがそっとドアを開け、迎え入れた。

「問題ないはずだよ。」

クーニャンは、部屋に入るとジャケットを脱ぎ捨て、体にぴったりとした長袖の黒いTシャツ一枚になった。百六十四センチの細身の体には、それが良く似合う。地味さゆえに、クーニャンのきりっとした美しさが際立つ。

「あの子は、連れてきたのかい？鍵もあるんだろうね？」

「鍵はまだ見つかっていません。フリージアは、コゴミが連れてきましたよ。今、眠っています。」

「そうかい・・・」

クーニャンは、少し疲れているようだった。ドアの近くにある長椅子に倒れるように座り込んだ。高い位置で結い上げた黒髪が少し、乱れている。そんな姿を見ると、いつもの男勝りな言動を忘れて、か弱い女に思えてしまう。

「なにか・・・ひどい目に会いましたか？」

ミヤシロは、クーニャンの横に腰かけてそっと肩を抱いた。

「それも、問題ないよ。あやうく閉じ込められて、尋問されそうになったけど、上手く逃げてきたよ。・・・お茶、あるかい？」

「私が煎れましょう。」

ミヤシロは立ち上がり、キッチンへ向かった。

「すまないね、兄さん。」

クーニャンは、椅子に深く埋もれる。

(とうとう、来たのか・・・)

コゴミから、フリージアを受け取るつもりで出かけたが、随分な目に遭った。王家の庭園に足を踏み入れた途端に庭番であるコゴミの父親に見つかった。彼は、息子が不穏な動きを見せていることを知っていて、どうにかして食い止めようとしている。

(何をしようとしているんだ！)

コゴミに良く似た、父親の切ない表情が眼に浮かぶ。心が痛い。

庭番の小屋に閉じ込められて、尋問された。尋問といっても、ひどいことをされたわけではない。口を割らずに黙っていたら、しばらくしてコゴミの父親は小屋を出て行った。

(クーニャン・・・お前も、辛いだろう・・・すまないな、あんな息子の事で)

クーニャンは、自分の心を見透かされていると思った。毎日、庭園でフリージアの手入ればかりしている男だが、子供のことはお見通しなのだ。せめて、この父親の半分でも、コゴミが自分のことを解ってくれていたら・・・と思わずにいられなかった。

三十分ほどしても、コゴミの父親は戻らなかった。クーニャンが小屋のドアを開けると、それはあっけなく開いた。

ミヤシロは、長椅子で眠ってしまったクーニャンに、そっと、ブランケットを掛けた。

「お疲れ様でした。クーニャン。」

優しい口調だったが、ミヤシロの顔に笑みは浮かんでは居なかった。

快晴だった。あやめは、窓から差し込む光の眩しさで、目を覚ました。

「起きたかい？ずいぶん、ネボスケなんだね、あんたは。」

聞きなれない女の声だった。慌てて体を起こすと、すらっとしたきれいな人がベッドの足の方に立っていた。

「クーニャンだよ。昨日、迎えに行くつもりだったんだけど、行けなかったんだ。すまないね。コゴミの説明じゃ、良くわからなかっただろ？」

抜けるように白い肌。その上に、ぽっかり紅い唇が魅力的に光っている。

「はじめまして、私は・・・」

「ああ、解ってるよ。フリージアだろ。」

クーニャンは面倒臭そうに言葉を遮った。

「いえ、瀬戸あやめです。あやめって呼んでください。」

「あやめ？」

「あの、昨日コゴミさんから色々お話伺いました。でも、どうしても私、フリージアだとは思えなくて・・・」

どうしてだろう、話す相手が女性だというだけでなんだか安心でき、素直に話す事が出来そうだった。

「そうかい。分かったよ。じゃあ、あやめ、とりあえず朝食にするよ。こっちに来な。」

そういうと、クーニャンは踵を返してさっさと歩き始めた。あやめはまた、白いカーディガンを羽織ってその後を追った。

キッチンに入ると、小さなテーブルの周りに、コゴミと、ミヤシロが座ってた。

「おはようございます・・・」

あやめは初めて見るミヤシロをちらっと見て言った。

「おはようございます。ミヤシロです。よろしく。」

ミヤシロは、また笑顔で応えた。その顔を見て、あやめは叫びそうになった。

(瞳が紅い！)

クーニャンに指し示されて、コゴミの横に腰を掛けたが、斜め前に座っているミヤシロの瞳が気になって仕方なかった。

(ありえない・・・やっぱり、変なところ来ちゃったんだ！)

「今日の朝食のパンも、俺の作ったハーブ入りだぜ。」

コゴミは朝から上機嫌で言う。

「いや、こいつ、昨日の夜サンドイッチが上手いって言って、全部平らげたんだよ。まあ、俺が作ったんだから当然だけどよ。」

「コゴミ、自慢は程ほどにしときな。」

クーニャンが、あやめの前に熱いハーブティを置いた。今朝は黄色いハーブティ。甘い香りのなかに、少しカモミールの匂いが混ざっている。

「ありがとう。」

あやめが微笑むと、3人は黙って食事を摂り始めた。塗装のない木のテーブルの上に、籐の籠が置いてあり、焼きたてのパンが並んでいる。あやめは小さな丸パンを一つ取り、口に含んだ。

「美味しい。」

また、声が出てしまった。

「な、そうだろ？」

コゴミはまた、調子よく言った。

「気を使わなくても、良いですよ。フリージア」

ミヤシロが小声で、しかしみんなの聞こえる声で言う。

「ああ、兄さん、この子『あやめ』って呼んで欲しいってさ。」

クーニャンがすかさず修正してくれた。

「そうだろ？あやめ。」

「はい。お願いします。」

「そうですか、ではあやめ。コゴミはすぐ調子に乗るので、ほめ言葉は程ほどにね。」

「何を！」

明るい食卓を囲んで、あやめはようやく、ほっとした。

(変なところに来ちゃったのは確かだけど、この人たち、悪い人ではないのかも・・・)

アリウムは、十五年ぶりに見る故郷を前にして、心が震えるのを感じた。とめどなく、涙がこぼれる。十五年前に流した涙とは正反対の涙だ。暗いトンネルの中を、息子に手を引かれながら歩いてきたというのも、未だに信じられない事であった。

「まあ・・・」

アリウムは、庭園にいっぱい植えられたフリージアを見て、息を呑んだ。

「フリージア・・・」

「母さんが居なくなった後、植えられたんだ。イキシア様のご希望という事だよ。」

「そうなのね。」

自らも息子と別れ別れになっていたアリウムには、イキシアの気持ちが痛いほど良く分かった。

「イキシア様は、お忘れになっては居なかったのね。」

また、涙。

「母さん、イエイオン様がお待ちになっている。さあ、行こう。」

「そ、そうね、ミサキ。」

アリウムは目を拭って歩き出した。

(あやめは、無事かしら・・・)

早く消息が知りたかった。腹を痛めた子供ではないが、十五年間、二人きりで『次の世界』で生き延びてきた。あやめは、今ではアリウムにとってはわが子同然、いや、それ以上だった。気が急いで、自然と早足になる。

広間に通されると、中央に座るイエイオンの横に、静かにイキシアが立っていた。

「アリウム！生きていたのですね・・・」

イキシアの目から、涙が一粒零れ落ちた。

「お前には・・・辛い思いを・・・」

こらえきれず、イキシアはその場から立ち去った。残ったイエイオンは荘厳に話し始めた。

「アリウム、久しぶりだな。」

「イエイオン様、再びお目にかかる日がこようとは、夢にも思っておりませんでした。」

アリウムは静かに、イエイオンの前に膝を着いた。

「苦勞したであろう。」

「滅相もございません。」

「さて・・・」

イエイオンは、ピクリとも動かずに言った。

「ミサキに伝えておいた事だが、決心はしてくれたのであろうな？」

「それについてですが・・・お断りさせていただきます。」

アリウムはきっぱりと言い放った。

「なに？」

イエイオンは目を見張る。

「フリージア様、いえ、あやめは、今では私の娘でございます。そして、全く違った世界で生きてきた娘です。今更、この国の王女になるようなことなど出来ません。」

アリウムは、家イオンに向かって頭を下げた。

「お願いでございます。あやめと私を、そっと置いてください。」

「ミサキはどうするのだ？」

イエイオンは静かに尋ねた。

「健気にもお前を送り出し、いつかお前を迎える事を夢見て育ってきたミサキは、どうするのだ？」

「私には、息子はおりません。」

アリウムは頭を上げた。

「ミサキに鍵を渡したその時に、この国に戻る事はないと覚悟しておりました。」

アリウムは、目に涙をため、齒を食いしばって答えた。

「アリウム・・・さすが、『次の世界』で生き延びただけあるな。気丈な女だ。しかしな、そうも言っておれんのだ。」

イエイオンは深いため息をついた。

「ワトソニア様は、臥せっておいでです。」

ミサキが後ろから声を掛けた。

「もう、起き上がることはないかもしれません。そして、国中で異変が発生しています。」

「これが、この国の全体像だ。」

テーブルの上に地図が広げられた。コゴミはその一点を指す。

「ここが、今、居る所だ。丁度真ん中辺りだな。」

国は南北に細長く、その形は開きかけのチューリップの蕾のようであった。

「そして、ここが王家の屋敷と庭園だ。」

指は、つぼみの先端の割れた部分を指していた。

「ここが崖になっている。寝てたから気付いてないだろうけど、この崖の下に扉が二つある。その片方が『次の世界』に通じている。」

「『次の世界』？」

「ああ、お前にとっては、こっちの方が異世界かもしれないけどな。」

地図は、生成りの粗い紙に、セピア色のインクを使って描かれていた。国の輪郭に沿うように、ぐるりと大きな道がある。北には王家の屋敷と庭園。南には広い砂漠があり、砂漠と森の境に観測所がある。東は一般の民家が立ち並び、西には湖と畑が広がっている。そして、あやめ達がいる中央部には、森林と植物研究所があることが、地図から読み取れた。

「問題はここだ。」

コゴミは、砂漠を指差した。

「1年前から拵がり始めた。以前は、観測所と砂漠の間に、広い草原があったが、今はもうない。」

「雨が、降らないのです。」

ミヤシロが口を挟んだ。

「湖の水位も、一メートル下がりました。底が見えるようになるのも、時間の問題です。観測所の計算によると、三ヶ月以内に国土の半分以上が砂漠に飲み込まれます。」

「三ヶ月で？」

あやめは、目を見張った。国土の正確な広さは分からないが、半分も砂漠になったら、大変な事になるということは、あやめにも理解できた。

「この干ばつは、ワトソニア様のご病気と深いかわりを持っていると言われています。」

ワトソニア・・・あやめは双子である、まだ見ぬ王女に思いを巡らせる。

「この国では、王よりも、その子供が大変重要な存在となっています。王の子供には植物を守る力が有るからです。代々、王が一人の息子、または娘しか持たなかったのは、権力争いというよりは、その能力を分散させないためです。まあ、この国で主権を争っても、たいして意味がありませんからね。」

「植物を守る能力？」

「はい。例えば、何週間も雨が降らないとき、王の子供が儀式を行うと雨が降ります。そして雨が降り続いて洪水の恐れがあるような時に実施すれば、雨がやみ、日が射します。これは、王の子供だけが持つ能力なのです。」

「偶然じゃないの？」

あやめは、思わず言ってしまった。

(まずかったかな・・・でも、いわゆる雨乞いってやつでしょ？原始的過ぎるよ。)

「偶然じゃないさ！」

クーニャンが真顔であやめに注意した。

「ワトソニアが儀式を行った途端、雨が降り出すのを私は何度も見たよ。」

「そうですね、クーニャンの言うとおりで。あやめも、見たら信じると思いますよ。」

ミヤシロはまた、にっこり笑って見せた。

(・・・いまいち、信じられない・・・)

「ただ・・・ワトソニアさまは、生まれた時から、能力が弱いのではないかとされています。通常であれば、一回の儀式で十分な量の雨や日照が得られますが、ワトソニア様の場合は二、三回とり行わないと大地が潤いません。」

「それって・・・」

「私たちも、つい先日知ったばかりですが、あなたという双子が生きていたからでしょうね。」

(なによそれ、私が居なきゃ良かったみたいな・・・)

あやめは少しムツとした。そんなあやめの気持ちは知らず、ミヤシロは続ける。

「代々、嫡子が生まれると、次の子供は処分されてきたそうです。それはきっと、力を一人の子供に集めるためだったのでしょうね。これは私の憶測ですが、処分されるはずのフリージアが生きていたため・・・」

「ミヤシロ、ちょっと言いすぎだぞ。」

コゴミが止めた。

「悪いな。あいつ、悪気はないんだ。色々、分析するのが好きなんだよ。」

「そうですね。少し言い方がきつかったかもしれません。申し訳ありませんでした。」

「いえ、構いません。」

少し、腹を立ててたが、あやめはミヤシロをまっすぐに見て言った。

「いい気持ちはしないけど、それが本当のことなんでしょ？でも、ワトソニアという人の力が100パーセントじゃない事と、砂漠化と何の関係あるの？やっぱり、私には関係ない話じゃないの？」

「ワトソニア様は、現在、原因不明のご病気で、1年近く臥せっておいでです。はじめの頃は、病を押して儀式を実行され、雨を降らせたりして下さっておりましたが、今はもう、立ち上がる事もできない状態です。」

「つまり、今はもう、儀式がやれないってことなんだよ。あんた以外は。」

クーニャンの言う意味は、あやめにも理解でき、同時に、なぜ今更、自分の消息が明るみに出され、ここに連れて来られることとなったのか分かった。

「じゃあ、私にその儀式をやらせてということなの？」

あやめが訊ねると、3人は少し暗い表情になった。

「多分、イエイオン様も、他の国民もみんなそう思っているだろうな・・・でも、俺達は、そうして欲しくないと思っている。」

コゴミは立ち上がり、窓の傍に立った。ミヤシロはチラリとコゴミを見た後、極めて冷静に言った。

「もし、本当に双子の力が分散されているのだとしたら、あなたが儀式を行うことで、全ての力があなたに移ってしまうのではないかと、私達は心配しています。」

「全部って？」

「ワトソニア様に残っている、わずかな力も全て。つまり、ワトソニア様がお亡くなりになるのではないかと。」
自分の存在が、双子をジワジワと死に追いつめている・・・ミヤシロはそう言っているのだ。あやめは信じられなかった。信じたくなかった。

「だから、儀式が行われる前にお前を捕まえたかった。いきなり連れて来たのは、本当に悪かったと思ってるよ。」

コゴミは、窓の外からあやめに視線を移して言った。

「頼むから、儀式は行わないと約束してくれ。そして、扉の鍵を俺にくれ。」

哀しい瞳で、コゴミはあやめを見つめた。胸が掴まれたように苦しい。苦しさと不安に耐えかねて、あやめは思わず叫んだ。

「知らないわよ！儀式だ鍵だって、そんなこと私、何も知らない！そのミサキって人が、鍵を持ってるんじゃないの？」

「鍵は、もう一つあるんですよ。」

ミヤシロは、もう笑っては居なかった。

「ミサキが持っていたのは、『次の世界』へ続く扉の鍵です。もう一つの扉の鍵は行方不明なのです。その扉は『命の世界』へ続く扉だと言われています。」

「ワトソニアの病気が治る薬かなんか、あるかもしれないと思ってるんだ。」

コゴミの、希望に満ちた瞳を見ても、あやめにはどうしてやることもできない。

「そんな事言われても、鍵なんて知らないもの。ママに聞いてもらった方が・・・」

「アリウムは、持っていないって言い張るんですよ。」

「アリウム？」

「あなたのお義母さんの、本当の名前ですよ。」

百合子という名前も、偽名であったのだと、あやめは改めて思い知らされた。

「ママに会ったの？」

「いや、あやめの部屋に行く直前に、ミサキと話しているのを聞いた。こっちに戻ってくるかどうかで、かなり揉めていたみたいだ。」

あやめがコゴミと対峙していた時、母はミサキと会っていたのだ。あやめは急に、母が恋しくなった。

(心配してるんだろうな・・・)

「まあ、ちょっと、鍵について思い当たる事がないか考えてみるよ。」

コゴミの一声で、クーニャンもミヤシロも席を立ち、それぞれ散っていった。

眠ろうと思っても、なかなか寝付かれるものではなかった。その後、クーニャンを残して、コゴミとミヤシロは外出してしまったようだった。あやめは部屋で退屈を持って余しつつ、今まで聞いた話を反芻し、鍵について考えていた。

あやめに眠気が訪れたのは、深夜に入ってからだった。体中に気持ち良い重たさが加わっていく。

その時だった。

「・・・あやめ・・・あやめ・・・」

かすれた小さな声が聞こえてきた。耳を澄ますと

「あやめ・・・外・・・外・・・」

開けはなった窓の向こうから、確かに聞こえてくる。そっとベッドから降りて、窓際へより、外を覗く。

「うわっ」

目の前に男の顔があった。

「やあ、遅くにごめんね。」

男は、あたりを窺うとそっと立ち上がり、窓の棧に肘をかけて軽く右手を挙げた。

「昼間は、なかなか近づけなくて。」

あやめは驚きを隠せず、一歩後じさったが、どうにか声を出せた。

「誰？」

「僕は、ミサキ。もしかして、もうコゴミ達から話を色々聞いてるのかな？」

ミサキ、という名前を聞いて、あやめは更に後ろに下がった。ミサキは爽やかに笑っているけれど、本当は母を奪った自分を憎んで居るのかも知れない。

「警戒しないで。どうやら、あんまり良い印象じゃないみたいだね。」

「何の用？」

そう言った直後に、あやめは気付いた。

「ママは？ママはどうしてるの？あなた知ってるでしょ？」

「母さんなら、こっちに来ているよ。でも、ここじゃ話が出来ない。僕と一緒に来てくれないか？」

ミサキは、絶えず周囲に気を配りながら言った。

「君のお父さんが会いたがってる。本当のお母さんもだ。」

突然、本当の両親と言われても、あやめはどうしたものが決断しかねた。そんなことより、ずっと母だと信じていた優しいママに会いたかった。

ためらっているあやめを見て、ミサキはトドメの一言を投げつけた。

「母さんも待ってるよ。」

両親に会った後、あやめは個室を与えられ、そこで休むように言われた。やはり、王家の屋敷というだけあって、部屋は立派なものだった。壁にはきれいな模様の青い壁紙が張られ、上品な猫足のソファと天蓋付きのベッドが置かれている。

「あやめ、色々びっくりしたでしょ？ママ、今日はここで寝るからね。」

母が、ソファにシーツを広げはじめた。

「ママ、私がそっちに寝るよ。ママはベッドに寝てよ。」

あやめはシーツを広げるのを手伝いながら言った。

「いいわよ。ここで十分よ。」

「いいから、いいから。」

明かりを消して、ソファに寝転んでも、あやめはなかなか眠れなかった。さっき会った、あの中年の、いかにも『王』という感じの男性が、自分の父親なのだろうか？横に居て泣いていた金髪の女の人が、本当の母親？

しかし、イエイオンの顔は、あやめにとても良く似ていたし、髪の色も同じだった。あやめのママは、こげ茶色の髪の毛だが、あやめの髪は黒い。でも、父親の瞳は、青かった。

金髪の母親とは、瞳の色以外はあまり共通点が見られなかった。金髪ゆえに、そう見えたのかもしれない。

『戻ってきてすぐで済まないが、明日にでも雨乞いの儀式を行ってほしい。』

『頼むから、儀式は行わないと約束してくれ。そして、扉の鍵を俺にくれ。』

父親の声と、コゴミの声が交互に頭に浮かんで消えていく。

「あやめ、起きてる？」

母がベッドから呼びかけてくる。

「うん。」

「あやめ、こっちに来ない？ね？そうしましょ。このベッド、ママ一人で寝るには広すぎるもの。」

母の突然の提案にあやめは少し驚いたが、素直にベッドに移動した。

「ママと一緒に寝るのなんて、何年ぶりかな。」

「そうねえ、おとし、箱根に旅行に行ったとき以来じゃないかしら？一緒に布団で寝るのは、小学生の時以来ねえ。」

母は懐かしそうに笑い、あやめの髪をそっと撫でた。

「あやめ、ごめんなさいね。」

「ママ・・・？」

「びっくりしたでしょう？ママね、もう、こっちに戻ってくる事はないと思ってたから・・・一生、あやめには話さないつもりだったのよ。」

暗闇の中で母がそっと涙を拭うのを、あやめは感じた。

「ママ、あのミサキって男の子、本当にママの子供なの？」

ミサキの髪は、ママと同じこげ茶色だった。目元なんか、そっくりだ。

「私は・・・ママの子供じゃないの？」

いったん涙が出てくると、止まらなかった。

「ごめんなさい、あやめ・・・全部、本当の事なのよ。・・・でもね、ママは、あやめの事本当の子供だと思って育ててきたのよ。」

「・・・」

女手一つで、知らない世界で、必死にあやめを育ててきた母を思った。生き別れた息子や、夫の事だって、思わない日はなかっただろう。自分だって、母と別れたら、毎日行方を捜し、一日だって忘れないに違いない。

(どんなに、辛かっただろう・・・)

「ママ・・・」

涙を必死に堪えて、あやめは笑った。

「ママが、本当のママじゃなくても、私のママは、ママだけだよ。」

「あやめ・・・」

ベッドの中で、あやめは数年ぶりに母に抱きしめられ戸惑った。

(あったかい・・・)

母に抱かれて眠っていた幼い日の記憶が蘇る。そう、いつだって母はあやめを可愛がってくれた。

「ママ、教えて欲しい事があるの。」

しばらくして、あやめは母から離れて言った。

「コゴミが、私がワトソニアの代わりに儀式を行ったら、ワトソニアが死んでしまうんじゃないかって言ったの。本当？」

母は、答えなかった。

「私とワトソニアは、どちらか一人しか生きられないってこと？生きちゃいけないってこと？」

思わず、声が高くなる。

「私は生きてちゃ行けなかったの？」

「あやめ！なんてこと言うの！」

「でも、死ぬべきだったんでしょ？」

また、涙が出てくる。

「確かに・・・そうだったのよ。あの時は。でも、私はあなたを生かした事を、後悔していないわ。辛い事もあったけど、あなたは私にたくさんの幸せをくれた。あなたは、私の大切な娘よ。生きてはいけないなんて！そんなことあるはずないわ！」

あやめにというよりも、アリウムがアリウム自身に言い聞かせているようだった。

「だけど・・・コゴミが言っていた事は、本当かもしれないわね。」

「じゃあ・・・」

「私も、まさかこんな事になるとは思っていなかったのよ。生まれたばかりのあなたを捨てるという事、息子の前で命を殺す事、その2つの罪の重さに耐えられなかったの。だけど、後悔なんて、一度もした事ないわ。本当よ。」

母から聞く、その言葉だけで十分だった。

「ママ、ありがとう。」

「あやめ？」

「私、ワトソニアに会ってみたいな。明日、会えるかな？」

とにかく、前に進んでみるしかない。

「そうね、きっと会えるわ。」

あやめは、ふっと体が重くなるのを感じた。隣に居る母のぬくもりに、とろけるように眠りに落ちた。

まるで、色違いの同じ人形のようにだった。ベッドに寝ているワトソニアは、金髪にブルーの瞳の可憐な美女だった。髪と瞳の色以外は、あやめと全く変わらない容姿であるのに、その上品さからなのか、まったく別人のように美しく見えた。

「フリージア？」

ワトソニアは、青白い顔で苦しそうに息をしながら、あやめを見て微笑んだ。

「昨晚、お母様から聞きました。もうちょっと、近くにお寄りになって。」

ミサキに背中を押されて、あやめはベッドのすぐ横にある小さな丸椅子に腰を下ろした。

「良かったわ・・・あなたが生きていてくれて・・・」

ワトソニアは、か細い手であやめの手を握った。

(冷たい・・・)

透き通るように白いワトソニアの手は、まるで死人のように冷たかった。

「聞いていると思うけれど、私はもう長くはないわ。」

「そんなことはないよ、ワトソニア。ちょっと病気が長引いているだけだよ。」

慌ててミサキが否定する。

「しっかり休んで、早く元気にならなくっちゃ。」

「ミサキ、ありがとう。」

ワトソニアは、あやめから手を離して布団の中に手を引っ込めた。

「でも、分かるの。私はもう駄目。フリージア、私の代わりに儀式を行って、この国を救って下さい。あなたには、この国全ての命がかかっているのです。」

「私、儀式なんて・・・」

「大丈夫。あなたには出来るわ・・・うっ」

ワトソニアは激しく咳き込んだ。

「ワトソニア！」

あやめを押しつけて、ミサキがワトソニアの背中をさすった。

「もう、休んだほうが良いよ。ちょっと無理しすぎたみたいだね。あやめ、行こう。」

「はい。」

ミサキに言われるまま、あやめは立ち上がり部屋を出ようとした。

「ミサキ・・・」

部屋を出る瞬間、あやめは小さな声を聞いた。振り返った一瞬、ベッドの上の悲しそうな瞳を見た。悲しいけれど、熱い瞳。

我知らず、顔が熱く、紅くなるのが分かった。ワトソニアは、恋をしている。瞳がそう言っている。

(ミサキのことが好きなんだ！)

ドアを閉めた後、ぼーっと立ち尽くしたあやめの顔を、ミサキはひょいと覗き込んだ。

「どうしたの？」

「え？あ、いや。」

人様の恋とはいえ、ほぼ自分と同じ姿の人間の、あの顔を見せられては参る。

「自分とそっくりな子の病気の姿は、見るのが辛かったかな？」

ミサキは、全然違う事を考えている。

「ところで、朝食までまだ時間があるから、庭でも見てみない？」

やる事もないので、あやめはそのまま、ミサキの後ろに着いていった。

庭園にはいくつかの小道があった。複雑に入り組んでいて、初めて入ったら迷子になりそうだった。背の高いフリージアの花が、そこかしこで咲き乱れている。

「ねえ、あやめ。」

屋敷を出て5分ほど経った時だった。

「相談があるんだけど。」

「？」

「ちょっと、座ろうか。」

ミサキは、道の脇にある小さな木製のベンチに腰を下ろした。

「ワトソニアを見て、どう思った？」

「どうって？」

病状？それとも、ミサキの事を好きだってことに気付いたかってこと？あやめは、ワトソニアの表情を思い出し、また顔が熱くなった。

「儀式を行ったら、彼女が死んでしまうかもしれないことは、コゴミから聞いたんだよね？」

「はい。」

「僕も、コゴミ同様、ワトソニアには生きて欲しいと思っている。」

ミサキは、きれいな瞳でまっすぐに前を見て言った。

「出来れば、協力して欲しい。」

「儀式をしないように、ってことですか？」

「違う。『命の世界』の話だよ。コゴミから何か聞いてる？」

「あっ。」

鍵のことを、すっかり忘れていた。

(ママに聞くの忘れてた・・・)

今更ながら後悔する。大事な事だったのに。

「実はね、僕は、鍵を手に入れたんだ。」

「えっ！」

「しっ」

ミスキは人差し指を口に当て、軽く微笑んだ。

「誰かに聞かれるとまずいからね。」

「どこにあったの？」

自然と会話がヒソヒソ声になる。

「やっぱり、母さんが隠してた。」

「ママが持ってたの？」

「いや、ここに置いて行っていたんだ。僕が気付かなかったんだ。」

そうやってミスキは、ちいさな木製の鍵を取り出した。一輪のフリージアの形をしている。茎に生えている葉っぱの出っ張りが、鍵穴の溝に合うように造られているようだった。かなり古い物らしく、所々黒く変色している。

「これが、『次の世界』に通じる扉の鍵。そして、これが……」

ミスキは、フリージアの右下の花びらを摘み横に引いた。ペチッと小さな音がして、花びら一枚とオシベ、メシベが鍵から外れた。

「これが、『命の世界』に通じる扉の鍵だったんだ。」

ミスキは『命の世界』の鍵をそっと元の鍵に戻した。

「母さんに聞くまで、分からなかったよ。」

ミスキは少し照れくさそうに言った。

「じゃあ、これでワトソニアは助かるかもしれないのね？」

「そうなんだ。それでね、一緒に『命の世界』へ行ってもらいたいんだ。」

「えっ？」

「『命の世界』の扉は、王の子供じゃないと開けられないんだって。」

「王の子供？私かワトソニアって事？」

「そう。」

「ドアを開ければいいの？」

「そうだね。そして、一緒に中に入ってもらいたい。もしかすると、君の力が必要になるかもしれないからね。」

見知らぬ扉を開けて、中に入る自分を、あやめは想像した。

「中には、何があるの？」

「母さんの話によると、“メラスフェルラ”という植物が生えている場所に通じているらしいんだ。その草を煎じて飲んだら、王の子供の病気が治る、という言い伝えがあるらしい。」

「言い伝え？なんで、ママだけそれを知ってるの？」

「うちの家系は代々、王家の産婆をやってるんだけど、産婆の秘伝書に書かれていることなんだよ。だから、一般には秘密なんだ。」

「ふうん・・・」

話を聞き終わって、あやめは改めてミサキを眺めた。

(ママに、似てる・・・)

それからワトソニアの苦しげに咳き込む姿を思い出し、胸が痛んだ。

「ということで、一緒に行ってくれるよね。」

優しい問いかけに、あやめは肯いた。

(あんなに苦しそうだったんだもん・・・治してあげなくっちゃ。)

誰にも、見つからなかった。

朝食を食べたら、こっそり抜け出して『命の扉』前に集合、とミサキは言った。与えられた部屋のクローゼットにあった服の中から、動きやすそうな服を選んだ。生成りのキャミソールに白いブラウス、藍染のぴったりとしたパンツ。所持品はもともと無いので、手ぶらで屋敷を抜け出した。

「あっちの方だ。」

とミサキに教えられた方角にひたすら進む。入り組んだ道だが、なんとなく歩きやすい。造りが母のハーブ園に似ている事に気がつく。

「あやめ・・・」

「！」

花の中から、急に母の顔が出た。

「ママ・・・どうして・・・」

「ミサキに聞いたわ。後の事はママがどうにかしておく。これ持っていきなさい。」

麻で出来た肩掛けカバンを、あやめにぐっと押し付けた。

「役に立つかわからないけど・・・。気をつけてね。」

返事も聞かずにアリウムは辺りを窺い、すばやく姿を消した。

(速い・・・ママじゃないみたい・・・)

カバンを抱きしめて、あやめは先を急いだ。

崖は、すぐに見つかった。転がり落ちないように注意しながら、あやめは斜面を滑り降りた。

話に聞いたとおり、崖の下には、2枚の扉らしきものが並んでいた。

(左の扉か・・・)

十五年前、ここで起こった出来事について考えてみる。

(ママも、もっと若かったんだらうな・・・ミサキも・・・)

小さなミサキを想像して、あやめはちょっと笑った。

「あやめ！」

ミサキが上から落ちてきた。

「お待たせ。あれ？」

あやめのカバンと服装に目を見張る。

「準備良いね。さ、行こう！」

ミサキは手際良く『命の扉』の鍵を取り出して、あやめに渡した。

「開けるのは君だよ。そこ、扉の中央のフリージアの紋章。」

岩の扉の中央に、一輪の花が描かれていた。

「そのすぐ下にある小さな穴だよ。」

針で開けたような小さな穴が縦に3つ開いている。オシベとメシベを上手く合わせて差し込むと、扉は横にずずっと開き、鍵はあやめの手に戻った。

中からは、紅い光が溢れている。

「行こう。」

鍵をしまうと、ミサキは洞窟の中に一步、足を踏み入れた。あやめがためらっていると、ミサキは手を差し出して言った。

「僕と一緒に、大丈夫。」

最高の笑顔だったが、洞窟の紅い光のせいで、それは不気味に映った。

「どうしたの？」

(怖い・・・)

今更になって、知らない場所へ行くのだという不安が、あやめを襲った。足が前に出せない。ミサキはあやめの手を取り、招きよせようとした。

「おいおい、そりゃ、怖いだろうよ。」

「そうですね。ミサキは気付いていないようですけれど、絵的にはかなり怖いですね。」

「まったく・・・ミサキはこれだから困るよ。」

「! ??? !」

空から声と一緒に、三つの影が降りてきた。

「コゴミ！ミヤシロ・・・クーニャンまで・・・！」

「ミサキ。俺達も行くぜ。ったく・・・結局、同じ事考えてたってわけか。俺達があやめを攫う必要は無かったってワケだ。」

コゴミは、ぴったりとした黒い服に身を包み、カーキ色のナップザックを肩からかけていた。

「準備はバッチリだぜ。」

「私もです。」

ミヤシロも大きなナップザックを背負っている。

「コゴミ、どうしてそれを・・・」

「悪いな。イエイオン様とお前が話をしてるのを、聞いちゃってさ。俺達に声もかけずに出発するのは、ちょっとひどくないか？ミサキ、ワトソニアを治したいのは、お前だけじゃねえ。俺達だって、一緒だ。」

「コゴミ・・・でも、この先、何があるか分からない。戻ってこれるかも分からないんだよ。」

(戻ってこれるか分からない！?)

あやめはぎょっとして、ミサキをじっと見た。

(聞いてないわよ！そんなこと！)

言葉にはならないが、目が物を言っている。

「あ、いや、多分戻ってこれるよ。うん。」

「なんだよ、ミサキ。だらしねえな。コイツに睨まれただけでそれか？」

「そういうわけじゃないけど・・・」

「とにかく、俺達も行く。人数は、多い方が何かと便利だ。それより・・・ミサキ、ワトソニアに挨拶はしてきたのか？」

コゴミは、目をそらし、ちょっと遠くを見て言った。

(あれ・・・?)

コゴミの顔から、さっきまでの勢いが消えていた。

「ワトソニアには、今回の話はしていないよ。安静にしてなくちゃいけないんだし、余計な心配はさせないほうがいいだろう？」

「・・・ったく。お前はほんつとに困った奴だな。」

コゴミは深く深く、ため息をついた。

「そうだと思って、ワトソニアには、さっき会ってきた。俺達は、あやめに儀式を覚えさせる手伝いのため、しばらく会いに行けないって言っついてやったよ。」

コゴミは、扉の奥を、じっと見つめた。

「さあ！出発するか！」

入口は、眩しいほどの明るさだったが、5メートルほど奥へ進むと、洞窟の中はかなり暗くなった。『次の世界』へのトンネル同様、ところどころにフリージアを象ったランプが赤く光っているだけである。

気味悪さを感じたあやめは、誰かに手を引いてもらいたいと感じたが、目の前のミサキを見て、ワトソニアの切ない顔を思い出し、ミサキと並んで歩くコゴミを見て、またワトソニアを思い出し、声をかけるタイミングを逃してしまった。

「僕で良かったら、どうぞ。」

突然、ミヤシロが後ろから右手を掴んだ。

「きゃっ！」

「失礼。そんなに驚くとは・・・」

慌てて手を離す。

「ん？どうした？」

コゴミが立ち止まって、振り返る。

「なんでもありません。さ、どんどん進みましょう。」

ミヤシロは、あやめに向かって軽くウインクして見せた。

「大丈夫ですか？」

「だ・・・大丈夫。大丈夫。」

「本当は、ミサキかコゴミが良いでしょうけれど、二人ともワケアリですからね。フリーなのは私くらいのもんです。」

「ワケアリ・・・」

「あなたも、なかなか勘が良いですね。」

くくっと、小さくミヤシロは笑った。

「ミサキもコゴミも、気付いては居ませんけれどね。」

「え？コゴミは気付いているんじゃ・・・」

「いいえ。自分が好意を持たれていることについては、全く気がついていませんね。」

(コゴミに好意！?)

「おしゃべりが過ぎるよ！」

あやめの腕に、クーニャンが腕を巻きつけてきて強く締めた。

「さ、行こう。」

あやめを、ミヤシロから引き離すように、クーニャンは足早に歩いていく。

(ははあ・・・クーニャンはコゴミか。)

あやめは後ろのミヤシロを軽く振り返った。ミヤシロ、またウインク。あやめはウインクが出来ないので、代わりにニカッと歯を見せて笑った。くくっと、また、ミヤシロの笑い声が聞こえた。

「コゴミには、言うんじゃないよ。」

クーニャンはそう言って、腕の力を緩めた。顔を背けて、ぼそっと呟く。

「それから・・・惚れる・・・」

「わけないわよ。」

あやめはクーニャンを見ずにさらっと言って笑った。

(なんだ、やっぱり、普通の女の子なんだ。)

あやめは、少し安心した。そんな二人を、見て、ミヤシロがお腹を抱えている。

「おい、遅いぞ！早く来い！」

10メートルほど向こうから、コゴミが叫んでいる。三人は慌てて、走り出した。

あっという間に辺りは暗くなり、一步も前へ進めない状態になってしまった。

紅いトンネルを抜けると、広い草原に出た。トンネルさえ抜ければ、メラスフェルラがすぐに見つかると思っていたコゴミは怒りを爆発させ、五人は黙々と先を急ぐ事になった。ただただ、草が生えているだけ。すぐに日も落ちた。

仕方なく、大きな木の横で焚火を焚き、休む事になった。

「思ったのと違うなあ。どこに生えてんだ？メラスフェルラは。」

コゴミは仰向けに寝たままで言った。

「困りましたねえ・・・この先のヒントになるようなこと、ミサキは知らないのですか？」

ミヤシロもため息交じりで聞く。

「ごめん。どこにあるとか、どう行くとか、そういうことは聞いてないんだ。まさか、こんなに広いところに出ると思っ

てなかったし。」

「仕方ねえなあ・・・あ、そうだ。あやめはなんか感じたりしねえの？ピピッと来るようなさ。」

話を振られてあやめは戸惑った。ピピッと来るどころか、

(絵葉書で見たアフリカの草原みたい・・・)

と観光客のように夕日に見とれてしまったりしていた。

「え・・・ないけど・・・」

「そうかあ。仕方ねえなあ。」

「そうですね。明日もたくさん歩く事になるでしょう。みなさん、今日は早めに眠りましょう。」

静かな夜が過ぎていった。

「アリウムが見つかりました！」

イエイオンの元に、アリウムが連れ出されて来た。

「アリウム！なんという事してくれたのだ！」

イエイオンは大声で怒鳴った。

「お前には、分からんのか、この国の惨状が！」

「あなた、そんなに頭ごなしに怒鳴らなくても。」

「うるさい！お前は黙っておれ！」

イキシアまで怒鳴りつけるほど、イエイオンは頭にきていた。

「すぐにでも儀式を執り行う予定であったのに！雨が降らないという事が、どれほどのことが、分からなかったのか！」

「申し訳ありません。」

アリウムは、極めて冷静に謝罪した。

「フリーズアはどこに行った？ミサキも一緒か？」

「……」

「コゴミやミヤシロも姿を消した。一緒に居るのか？」

「コゴミ？」

アリウムは怪訝そうな顔をした。

「うむ？それは知らんのか。・・とにかく、二人はどこだ！」

「『命の世界』に行きました。」

「なに！？」

その場に集まった者たちがみな、どよめいた。

「お前・・・やはり鍵を持っておったのだな？」

「いえ。鍵はミサキに持たせておりました。ミサキが、知らなかっただけでございます。」

「・・・細かい事は良い。とにかく、二人はそこへ向かったのだな。」

アリウムは、イエイオンをまっすぐに見て言った。

「はい。ミサキは、始めからそのつもりでございました。でも、あの扉は王の子供でなければ開けられません。」

「しかし、私は許可しておらん！行くなといったはずだ。」

「ですから、ミサキは、こっそり行ったのです。・・・コゴミも、同じ事を考えているようだと、ミサキがこぼしておりました。もしかすると一緒に居るのかもしれない。」

「ううむ・・・」

「とにかく、鍵もありませんし、追いかけることは出来ません。私たちに出来るのは、彼らを信じて待つことです。」

イエイオンは押し黙った。確かに、ここでアリウムに怒りをぶつけても、どうにもならない。

「あなた、待ちましょう。」

イキシアが、きれいな白い腕で、イエイオンの背中を抱いた。

「・・・分かった。待とう。・・・イキシア、今日はワトソニアはどんな容態だ？」

「フリージアが戻ってきた事が分かってほっとしたのか、随分落ち着いていますわ。今までのように、“儀式をしないと”と無理をして起き上がろうとすることもありませんし。」

「そうか・・・」

イエイオンは一步前へ踏み出し、胸を張って言った。

「いいか、みな良く聞け。フリージア達が居なくなった事は、ワトソニアには気付かれるな。ショックを与えてはいかん。他のものにも、至急申し伝えよ。」

「かしこまりました。」

一同は礼をし、それぞれ散っていった。

「アリウムも下がって良い。」

「はい。」

立ち去るアリウムに、イキシアはそっと近づいて声をかけた。

「あの人も、あれでワトソニアの事はとても心配しているのです。一国の王というのは、悲しいものですね・・・」

美味しそうな匂いがして、あやめは目が覚めた。

(なんだろう・・・コーンスープ?・・・お腹すいたなあ。)

体が重くてまだ起き上がれないけれど、うっすら目を開ける。

(ま、まぶしい!)

青い空が見えた。寝返りをうってうつ伏せになってから、腕を突いて半分起き上がる。

(そうだ・・・野宿したんだった。)

アリウムから渡されたカバンの中に入っていた茶色いブランケットが、体に絡まって上手く動けない。

「あやめ! 起きた?」

ミサキの爽やかな声が飛んで来た。顔を上げると、すでにみんな起きている。

「随分ゆっくり寝てたね。あっちで水が流れてたから、顔を洗ってくると良いよ。」

ミサキは楽しそうに笑った。

「水が流れてる?」

「うん、なんかね、湖とは違うんだ。用水路みたいに水が流れている。」

「川じゃないの?」

「カワ?」

そういえば、コゴミに見せてもらった地図には、川らしきものは載っていなかった。

(そうか、川を知らないのか・・・)

「川って言うのよ。そういうのを。」

ちょっと偉そうに言ってみた。

「そうか。『次の世界』にも、ああゆうのがあるんだね。・・・ま、とにかく、顔洗っておいでよ。」

あやめは、起きて川に向かう。

「ちょっと、あやめ。」

後ろからクーニャンが追いかけてきた。

「今日は、私が髪を編んでやるよ。」

「えっ?」

「そのバラバラな髪じゃ、動きづらいだろ? 今日もいっぱい歩くかもしれないしさ。」

確かに、クーニャンの言うとおり、胸まである長い髪は長旅には向かない。クーニャンは、手際よくあやめの髪を纏め上げる。

「あんたは、お子様だからこんな感じでいいね。」

川に顔を映してみると、頭のでっぺんに三つ編みで作った大きなお団子が載っていた。

「似合ってるよ。なかなかね。」

そういいながら、クーニャンは豪快に笑った。

「そうかなああ・・・」

改めて川に顔を映し、じっくり眺めてみる。可愛いといえなくはないけれど、なんだか、小学生みたいだ。

「いやいや。お似合いですよ！さすがさすが！あんたがお姫さんでしょ？ひと目で分かりましたよ〜。」

川の向こうから、丸顔の小さな男が飛び出してきた。

「きゃっ！」

クーニャンにしがみつくあやめ。

「誰だお前！」

クーニャンはすばやく、あやめを背中に回し、男と向かい合った。

「いやいやいや。怖い顔しないで。怪しいもんじゃありません。」

男は川を軽く飛び越えて、あやめの正面に立った。

「昨日、時間を間違えちゃってね、皆さんに会えなかったんですよ。あはは、夜中に声をかけようかと思ったんですけどね、余計怪しいかと思って。あはは。」

背の低い、ジャガイモみたいな男だった。悪い人には見えないけれど、まともな人とも思えなかった。

「ワタシ、レンといいます。よろしく。」

いきなり自己紹介されても、どうして良いか分からない。

「あやめ、行くよ。」

攻撃の意思がないようであることは分かったので、クーニャンは踵を返して川から遠ざかり始めた。あやめも慌てて後を追う。

「ちょっとちょっと、待ってください〜。」

後ろからレンがトコトコ追ってくる。

「ついて来てるよ。どうしよう？」

「いいから、無視して行くよ。」

早足でミサキ達のところに帰る。

「ちょっと！大変だよ！」

「そうなの！川で変な人が！」

息せきって報告する二人を見て、なぜか男三人は爆笑した。

「おまえ・・・なんだその頭！」

「す・・・すみません。あまりにもおかしくて・・・」

「でも、可愛いよ。・・・ははっ」

「にしても、まるで子供だな。」

コゴミが笑い泣きしながら言った。

「失礼ね！」

あやめが思い切り膨れて見せると、クーニャンまでもが笑った。

「クーニャンまで！そうじゃないでしょ！川で変な人に出て・・・」

あやめが必死に説明するが、誰も聞いていない。

「変な人とはひどいですな。ちゃんと、レンと呼んで頂かないと～。いやいや、みなさん楽しそうですねえ。」

いつのまにかレンが追いついて、当然のように輪に入ってた。

「なんだコイツ！」

笑いは一気に引いた。

「レンと申します。これからみなさんとご一緒させていただきます。よろしく～。」

「一緒？どういう事でしょうか？」

冷静さを取り戻したのか、ミヤシロが満面の笑みをたたえて言った。

「どうって、みなさん、メラスフェルラ採りに来たんでしょ？案内役はワタシと決まっていますから。」

「？」

「あれ？聞いてない？」

レンは不思議そうな顔をした。

「うーん・・・そうですか。忘れてしまいましたか。いやいや・・・しかし、前にいらしたのはえーと、二百三十四、いや、二百三十五年？随分と前でしたからねえ～。あはは。」

「二百三十五年前？あなたは、以前も私達のような者を、メラスフェルラの所に案内したという事ですか？」

「いえいえ。ワタシは初めてです～。ワタシの母は案内したそうです。何しろ、メラスフェルラ育てるの、ワタシの家の仕事ですからねえ。」

レンは手を揉みながら、ニコニコと五人を見回した。

「というわけで、案内させていただきます。さ、参りましょうか・・・ん・・・？」

レンは鼻をヒクヒク動かした。トコトコと焚火に寄り、鍋を覗き込む。

「みなさん、これから朝食ですか？では、ワタシもご一緒させていただきます。ささ、食べましょ食べましょ。」

レンは懐から小さなお碗を取り出して、勝手にスープを盛り、座り込んだ。

「おい！勝手に食うなよ！」

コゴミが走って行って鍋を取り上げる。

「ちょっとしかないんだからな！」

「どうしてですか？ちゃんと人数分作らなかつたんですか？」

「食べ物探すのも大変なんだよ！この辺、見たことない植物ばかりだし。」

「いやいや。そうでしたか！ちょっと待ってて下さい。ささ、皆さん座って座って。」

レンはお碗を置いて、笑顔を振りまくと、ふっと姿を消した。

「あれ？」

あたりを探すが、どこにも居ない。

五分ほどすると、レンはまた急に姿を現した。

「お待たせしました～。とりあえず、こんなもんでどうでしょ？」

レンは腕いっぱいにはオレンジのような果物とパンのような果実を抱えていた。

「はいはい。」

手際よく食べ物配ると、さっき座っていた位置に戻り、自分の小さなお碗を手を取った。

「ではでは、頂きましょう。」

全員、何も言い返せず、静かに朝食を摂りはじめた。

「それにしても・・・今回は随分大勢でいらっしゃいましたねえ。」

レンはオレンジのような果物の皮を剥きながら、ポツリと呟いた。

「いつもは一人でいらっしゃってましたけどねえ。お姫さんは、あなた一人でしょ？あ、お名前は？」

お姫さん、と言われるとなんだかすぐったい感じがしたが、あやめは素直に答えた。

「あやめ、です。」

「あやめ、ね。良い名前ですな。なんと呼んだらよろしい？」

「“あやめ”をお願いします。」

「そうですか、そうですか。ではワタシもレンと呼んでくださいね。あやめは幾つですか？」

「十五才です。」

「そうですか、そうですか。」

レンは何度も何度も頷き、次にクーニャンを見た。

「あんたもお姫さんですか？見た所、そうは思えないのですが・・・」

「そう見えなくて悪かったね。」

クーニャンは強くレンを睨みつけた。

「どうせ、私はお姫様じゃないよ。」

「そうですかあ。いえね、今回は双子のお姫さんかと思ってましたのでねえ・・・」

レンは首をかしげる。

「あの・・双子なんですよ。」

あやめが答える。

「病気で寝てるんです。」

「いやいや、ご病気でしたか。やっぱりねえ。」

また、レンは何度も頷いた。

「やっぱりって、どういうこと？」

ミサキが訊ねる。

「メラスフェルラの元気がないんですよ。」

レンが少し困った顔で言う。

「あれ？みなさん、それをご存じない？」

「それって、なに？」

「メラスフェルラは、そちらの世界の王の子供の状況を示すものなんです。例えば、男の子が生まれれば黄色い花、女の子ならば白い花が咲きます。双子だと、株別れして二つの株になります。亡くなれば枯れます。今は、二株ありますけど、片方は枯れかけてます。つまり、元気な株は、あやめの方ですね。」

五人は真剣に話を聞いた。

「メラスフェルラを持ち帰って、煎じて飲めば、ワトソニアの病気が治ると聞いているのだけど、それは、本当？」

ミサキが訊ねた。

「うーん。」

レンは頭を抱えた。

「参りましたねえ。今回はそれが目的ですか。」

「今回？」

「以前は、王の子供の肝試しみたいな感じだったんですね。王位を継ぐ前に、こちらの世界にやって来て、メラスフェルラを摘んで帰る。それにより、正式な王位継承者として認められ、王位を継ぐ。メラスフェルラを摘んで乾燥させて保存すれば、二、三十年は持ちます。万が一、病気になったときはそれを煎じて飲めば、早死にする事はありません。」

レンは続ける。

「しかし・・今、双子のお姫さんにメラスフェルラを与えても病気は治りませんよ。」

「なに！」

コゴミが腰を浮かせた。

「なんでだよ！」

「枯れかけたメラスフェルラに効力はありません。あやめの分のメラスフェルラは元気ですが、そっちを与えても効果はありません。」

「なんだよ！それじゃ、来た意味がねえじゃねえか！」

コゴミは頭をかきむしり、金髪の七三はぐちゃぐちゃに乱れた。

「っていうか、お前、メラスフェルラ育ててるって言ったよな？なんで枯らすんだよ！」

コゴミは、レンの小さな胸を掴んで、ぐらぐら揺すった。

「い・・・いや。枯れるのは、私では止められないのです～。」

「何か、方法はないのですか？」

後ろからコゴミを羽交い絞めにして止めながら、ミヤシロが聞いた。

「方法・・・婆さまに聞いてみたら、何か知って居るかも知れませんねえ。」

「婆さま？」

「はいはい。ここで一番長生きしている、私の曾祖母です～。」

レンは手を伸ばして、もう一度スープをお碗に盛った。

「いやいや～。これ、どなたが作られました？大変、美味です。あはは。」

レンの曾祖母は、想像以上にお婆さんだった。

「今年で、八百二十歳歳になるんですよ。耳はちょっと遠いから、みなさん大声で頼みますよ。」
大木の脇に、キノコのように寄せて作られた、小さな家の中に全員が入るのはとても無理だった。

「やっぱり、ここはあやめに。」

とレンが言うので、勢い込んでいたコゴミはブツブツ言いながら外で待機している。

「あー・・・レンかい。餅が焼けとるから、食うがええ。ほれ。」

レンの曾祖母は、家に入ってきたあやめには目もくれず、小さな家の中をゴソゴソ動き回り、金網の上の餅を小さな白いお皿の上に載せレンに手渡した。

「婆さま、今日は話があってきたんだよ！」

レンの大声は、外まで聞こえる。

「お姫さんかい？」

紹介を待つまでもなく、言い当てた。

「名前はなんだね？」

「あやめです。」

「ああ？」

「あ、や、め！」

怒鳴るように叫ぶとようやく通じた。

「あやめね、そうかいそうかい。」

レンの曾祖母は、あやめにも餅を差し出した。

「まあ、たーんとお食べ。」

ためらっていると、餅を口いっぱい頬張ったレンが、あやめの肘を突付いた。

「婆さまの餅は、最高に美味なですよ。ぜひぜひご賞味を！婆さま、今日の餅も美味美味！」

「そうかいそうかい。」

思い切って餅にかぶりついてみると、思ったより柔らかい。羽二重餅のような食感。口の中で溶けていく餅と、きな粉のような味の滑らかな粉砂糖が良く合っている。

「美味しい！」

思わず叫ぶと、レンの曾祖母は嬉しそうに目を細めた。

「ちっ。あいつらだけいい思いしやがって。」

外でコゴミが呟き、ミヤシロがなだめる。

一通りご馳走になったあと、レンはようやく本題を切り出した。

「婆さま、メラスフェルラについて教えてもらいたい事があるんだよ。」

「はいはい。」

「今回、あやめが来たのは、王様になるテストのためじゃないんだって。」

「私の双子が」

口にした途端、あやめは実感した。

(私の双子・・・そうだ、ワトソニアは、私の姉妹なんだ・・・)

助けてあげたい。その気持ちがいつそう強くなった。

「私の双子、病気なんです。助けてあげたいの。どうしたら、メラスフェルラが元気になりますか？」

レンの曾祖母は、シワシワの顔を更にシワシワにして、唸った。

「それは、難しいねえ。」

「婆さま、何か方法はないのかい？」

「方法は・・・ある。」

レンの曾祖母は立ち上がり、奥にある棚から小さな本を取り出して来た。

「メラスフェルラは、命の花だからね。本当は、枯れるものは、枯れるままだとしないといけないんだがね・・・色々事情があるんだろう？それに、ここでも変な事が起こってるみたいだしねえ・・・」

「変な事？婆さま、なんだいそれは？」

「お前はばかだねえ。最も、一年中あの山でメラスフェルラしかみてないんだ。仕方がないか。さて、と・・・」
パラパラと本を捲り、一枚の絵を指差した。

「ここさ。」

いくつかの植物が描かれている。文字も書かれているがあやめには読めなかった。レンが読み上げる。

1. 北の池の睡蓮の花びら。

ピンク色のきれいなものを一枚。

2. 東の畑の隅に生えているチンゲン菜。

月の光を浴びている葉を摘み取る。

3. 南東の畑の蕪の根の先端。

4. 西の畑のキャベツ。

タケノコ型の柔らかいものを選ぶ事。

5. 南の峠に生えているコゴミ。

夜明け前、朝露に濡れているものを。

6. メラスフェルラの最も近くにある

フリージアの花粉。

「随分、たくさんあるのね。」

あやめは、聞いただけでは覚えきれなかった。

「それを集めて、どうするんですか？」

「全部煎じて、メラスフェルラに与えるのさ。そうすれば、元気になる。最も、私が知る限り、実行した者は今までいない。本当に効くかは分からないけどね。・・・そうそう、これは、お前さんがやらないといけないよ、あやめ。」

「私が？」

「そうだよ。『花の世界』の王の子供がやらないといけないのさ。」

「『花の世界』？」

「なんだい、それも知らないのかい。ここでは、あんたらの世界の事を『花の世界』と言うんだよ。」

「そうですか・・・」

一抹の不安は残った。しかし、可能性はある。そのあやめの気持ちを読み取ったのか、レンが明るい声で叫んだ。

「やってみましょ！道案内はワタシに任せて下さい。ダイジョブ。上手くいきます。あはは。」

レンの明るい声を聞いて、あやめも少し前向きな気持ちになった。どうにかなるかもしれない。

「そうね！やりましょ！」

「その前に・・・婆さま、さっきの餅、もう一つもらって良いかな。」

「いいとも、たーんと食べていきな。」

「いやいや、美味美味。」

餅を食べ続けているレンを置いて、一足早くあやめは外に出た。

「話は聞こえたよ。」

ミサキが笑顔であやめを迎えた。

「ちょっと数は多いけど、たいした注文ではなかったね。すぐに集めて、やってみよう。」

「そうですね。早いに越した事はありません。」

ミヤシロも頷く。

「おい！レン！早く行くぞ！」

コゴミが怒鳴ると、レンが慌てて家から転がり出てきた。

「すみませんねえ。お待たせしちゃって。さあさあ、いしましょ。」

頭をぼりぼり搔きながら笑う。

「あやめ〜。」

家の中から、レンの曾祖母のか細い声が聞こえてきた。

「なんでしょう？」

あやめが家の中を覗くと、レンの曾祖母は紙袋をあやめに押し付けた。

「持っておゆき。なんかの役に立つだろう。」

「これ、なんですか？」

袋を開けようとするあやめの背中に、コゴミノ怒鳴り声が飛んできた。

「早く行くぞ！おいてくぞ！」

「い、今行く！・・・お婆さま、ありがとうございました。」

ペコリとお辞儀をして、紙袋をカバンに突っ込むと、あやめは急いで走った。

「コゴミったら、イライラしすぎだよ。」

クーニャンがあやめと並走しながら笑った。

「あいつ、餅を食べられなかったのが悔しいのさ。」

なーんだ、そんなことだったんだ。あやめは可笑しくなった。

(コゴミってば、可愛いところもあるんだ。)

「ばっかみたい。」

声に出して言ったら、益々可笑しくなった。何かが、突き抜けた感じがした。笑いが止まらない。

「どうしたの？あやめ？」

その様子を見て、心配そうにクーニャンが顔を覗き込む。

「なんか、楽しくって。」

あやめは笑った。

「こういう旅も悪くはないかもね。」

北の池は、レンの曾祖母の家から30分ほど歩いたところにあった。行ってみると、そこはドロドロの泥沼だった。

「何これ・・・」

見ているだけで、ゲンナリした。睡蓮らしき草は浮いているが、当然ながら花は咲いていない。

「いやいやいや～。驚きました～。こんな風になっているのは初めてですよ。」

レンがオロオロと池の周りを回る。

池は、大豆のような形をしていて、五メートル四方ほどの大きさ、それほど大きなものではなかった。

「いつもは、きれいに蓮の花が咲いてます。水も澄んでいて、底がみえるんですよ。どうしてこんなことに～。」

「どういう事かしら？」

あやめは、池の水を掬ってみた。

「うわわわ」

又メっとして、気持ち悪い感触。まるでヘドロみたい。

「でも、どうにかして花を咲かせないといけないね。」

ミサキがため息をついた。

「泥を攫って、きれいにするしかないのかな。」

「うげー。勘弁してくれよ。」

コゴミがその場に座り込む。

「でも、そうするしかないじゃないか。レン、なにか道具とかないのかな？」

「そうですね。調達してみましょ。ミサキ、運ぶの手伝ってもらえます？」

「うん。一緒に行くよ。」

「ではでは、みなさん。ちょっと待って下さい。」

レンはペコッとお辞儀をして、また消えた。

「レン！」

ミサキが叫ぶ。しばらく行動を共にして分かった事だが、丸っころくて小さい体であるにも関わらず、レンはとても素早かった。時々、早すぎて見えないほどだ。レンはなんでもないと言うのだが、普通では考えられない動きだった。

(ミサキやコゴミだってすごいのに・・・)

とあやめは思う。少なくともあやめの居た世界では、信じられないほど素早かった。

「ああ、行っちゃったのかな。」

ミサキが困った顔でため息をついた。

「さすがに、あのスピードにはついていけないよ。」

「だな。アイツ、足短いのにな。」

コゴミが笑う。笑った途端に、レンの声が出た。

「短いとはなんです。失礼ですね。」

「おっ・・・お帰り。早いな・・・」

怒った顔のレンが、何やら大きな道具を持って立っていた。

「近くに住む者たちから借りてきました。」

レンの手には何個かの大きなバケツとスコップ、背中には大きな箱のようなものを括り付けていた。

「まずは・・・これで泥を吸って、池をきれいにしましょ。それから、五キロほど向こうに、川が流れてますから、そこからきれいな水を汲んできて、池を満たしましょ。ちょっと大変ですが、やるしかありません。ええと・・・」

レンはざっと五人を眺めると、

「じゃあ、まずはミサキ、コゴミ、ミヤシロ、三人で水汲んできてもらいましょ。ワタシと女の子二人は、蓮の花を移動させる準備しましょ。」

と言ってさっさと道具を配り始めた。

「五キロかよ・・・」

渡されたバケツを持って、コゴミは立ち上がったが、ウンザリした顔をして見せた。

「片道10分・・・いや15分程度でしょうか。水を運びますからね。両手が塞がれているのは、ちょっと辛いですが。」

ミヤシロは両手にバケツをぶら下げた。直径五十センチはある、大型バケツだ。

(あれに水なんか入れたら、重くて持てないじゃ・・・しかも、あんなバケツでこの池の水？何往復するの～?)

あやめは密かに心配したが、思いの他三人は平気そうにしている。

「先に、泥を掻き出した方が良くないじゃないの？」

ミサキが心配そうに聞いた。

「一往復三十分もかからないよ。」

「いやいや。三十分あれば丁度よいです。さあさ、水汲みよろしく。その道をまっすぐ行けば川に着きますから。」

レンは南に向かって伸びる細い道を指差した。

「じゃあ、行こうか。」

「仕方ねえなあ。川まで競争だぞ！」

「遅れないで下さいね。」

三人はあっという間に見えなくなった。

「さあ、あやめ、クーニャン、私たちの作業も始めましょう。」

レンは、大きなスコップを二人に手渡した。

「ああ、そうそう、女性にはこれも。」

お腹の横についているポケットから紫色の手袋を取り出した。

「こういう作業は、手を傷めますからね。」

「ありがとう。」

あやめとクーニャンは、お礼を言って手袋を嵌めた。糸を編んで作られた物のようだが、ゴム手袋のような弾力がある。

「さて、この辺にしましょう。ちょっと待ってて下さい。」

池から五メートルほど離れた場所でそういうと、レンはスコップを取り上げ、目にも留まらぬ速さで穴を掘り始めた。早すぎて姿が見えない。何も無いのに、穴だけが広がっていく感じだ。あまりの光景に、あやめもクーニャンも目が離せず、また、動けない。

「手伝う隙もないね。」

クーニャンが苦笑した。

「ほんと・・・レンってすごいね。」

あやめも同感だった。十分ほどすると、直径1メートルほどの穴が出来上がった。レンは穴から這い上がってきて、満足そうに眺める。

「まあ、こんなもんでしょ。」

「これ、何の穴？」

「ここに水を張って、池の睡蓮を一時避難させるのです。さて、次は泥を捨てる準備ですね。」

「その箱を使うのね。」

「はい、あやめ、こちらを抑えていてください。」

あやめに、箱のふちを抑えさせ、レンは箱の中から長い長いホースを取り出した。

「さてと。ワタシはこれをもって、西の沼につないで来ますから、二人でここをををしっかり持っておいて下さいね。」

では、行きましょ。」

長い長いホースの途中にとりつけてある固い筒状の部品を、あやめとクーニャンが握るのを確認すると、レンはホースの端を掴んで姿を消した。レンが引っ張って居るのだろう。ホースの束がどんどん減っていく。

「レンって、変なやつだね。」

クーニャンが呆れて言った。

「食い意地張ってるかと思えば、変にすばしっこくて勤が良い。」

「そうね。それにしても、穴掘りすごかったね。」

「ほんと。びっくりだよ。」

五分ほどすると、山のように積まれていたホースが残り少なくなった。

「このペースで引っ張られたら、私たち二人では止められないかもしれないね。」

クーニャンが少し不安げに言う。

「綱引きみたいね。」

「綱引きか・・・『次の世界』にも綱引きがあるのか？」

「こっちにもあるの？」

「あるさ。年に一回お祭りでやるのさ。毎年、コゴミとミサキの一騎打ちになる。去年はコゴミが優勝したよ。」

クーニャンが得意げに言った。

「一騎打ち？一人でやるの？」

「当たり前じゃないか。正々堂々と、国一番の力持ちを決めるのさ。大人から子供まで全員参加さ！」

やっぱり、少し文化が違うのね、とあやめは思った。コゴミはともかく、ミサキが必死で綱を掴む姿は、ちょっと不思議な気がした。

(ん・・・？全員参加??)

あやめの脳裏に、一枚の絵が浮かんだ。

「それって、もしかして、ミヤシロも出るの？」

「兄さんも勿論出るさ。五年ほど前から、毎年上位三人はあの三人で決まりだよ。最も、兄さんは毎年三位だけだね。」

「えー、信じられない。」

「なんだい、失礼な子だね。兄さんはあれで結構タフなんだよ。」

「それはそうかもしれないけど・・・」

ミヤシロは、綱を引く時もクールに微笑んでいるのだろうか？

「あと2ヶ月もしたら、今年の祭りだよ。あやめも今年は見たら良いさ。」

ふと気がつくと、ホースの動きが止まっている。

「沼まで行けたのかな？」

「割と近くにあるのかもしれないね。」

ホースが全く動かない事を再確認してから、二人は手を離し、レンが戻ってくるのを待った。

ほどなく、レンは戻って来、ホースのもう一方の端を淀んだ池に差し入れた。

「ホースの準備は良いですね。さあ、泥を移しましょ。」

箱の中から、自転車のタイヤの空気入れのような装置を取り出し、あやめ達が握っていた筒の穴に繋いだ。

「さあ！やりますよ！」

レンがポンプを動かすと、ブゴブゴブゴと嫌な音がして泥が吸い上げられ始めた。

ブゴブゴブゴ、ブゴブゴブゴ。

止まることなく続く。

「嫌な音だなあ。」

バケツを抱えてミサキが帰って来た。

「おかえりなさい！」

あやめが駆け寄ると、ミサキは笑った。

「僕が一番乗りだね。これ、どこに置いたらいいかな？」

「そこの穴に入れて下さい。満タンになるまで、お願いしますよ。」

レンは手を休めずに声をかける。ブゴブゴ、ブゴブゴブゴ。

「あやめとクーニャンは、睡蓮を移動させ始めて下さい。ちょっと急いで。よろしく。」

気がつくやうに、泥は随分減っていた。水位が下がっていているのが分かる。二人は急いで、睡蓮の移動を開始した。

「じゃあ、僕はもう一回行って来るよ。」

ミサキが駆け出すと、入れ違いにコゴミとミヤシロが入ってきた。

「くっそー。やっぱり足ではミサキに合わないな。」

「仕方ありません。私達は、今まで一度だって、ミサキの前を走った事はありません。」

「そうだなあ・・・おっ？お前らも地味な作業してるなあ。」

泥の中から、丁寧に睡蓮を掻き出しては、即席の池に植えているあやめ達をみて、コゴミはため息をついた。バケツの水を、乱暴に池に入れると、

「じゃあ、行くか！」

と後ろも見ずに駆け出して行った。

「ではまた。」

ミヤシロは笑顔を残して後を追う。

ブゴブゴ、ブゴブゴブゴ。レンは汗一つかかずにポンプを動かし続ける。

「あやめ、クーニャン、疲れたらちょっとは休むんですよ〜。」

レンは余裕に満ちた笑顔で、二人に声をかけた。

「くっただけ。」

レンの曾祖母の計らいで、池の近くにある大きな倉庫が借りられた。野宿に慣れないあやめは、猛烈に嬉しかった。

積んであった藁を寝床にして転がりながら、コゴミは二の腕をさすった。

「腕、パンパンだ。」

「私もですよ。」

ミヤシロも心なしか、笑顔の力が弱い。

レンは、あっという間に泥を全て吸い上げた。池の中を掃除して、それから水を運ぶのも手伝った。作業の半分以上を、レンがやったと言っても過言ではない。その上、夕飯の支度まで一人でやった。

「みなさん、もうちょっと体を鍛えないといけませんねえ。あはは。」

レンだけが元気で、楽しそうに笑っている。思った以上に、睡蓮を移動させる作業も疲れ、あやめもクーニャンもひどい腰痛だった。腰が重たい。

「でも、無事作業が終わってよかったよ。レン、ありがとう。」

ミサキは焚火の前で両足を揉みほぐしながら言った。

「明日の朝、うまく花が咲いてくれるといいね。」

「大丈夫大丈夫。きっと咲きますよ。ほら、豆が炒れましたよ。熱いうちに食べましょ。」

レンは、嬉しそうに豆を手に取り、ホクホクした顔で摘む。

「美味美味。あやめ、ほら。」

「熱っ！」

受け取った豆を、思わず落としてしまった。慌てて拾い上げ、慎重に口に含む。香ばしくて甘い香りが口に広がる。

「美味しい〜。」

「そうそう。女の子は笑顔が一番。ほら、クーニャンも。」

「あ、ありがと。・・・あ、あつあつ・・・でも、確かに美味しいね。」

つられてクーニャンも微笑む。

「クーニャンの勢いを押さえ込むとは、レンもなかなかですね。」

ミヤシロが可笑しそうに笑った。

「ほんとだよ。クーニャンが“ありがと”なんていって素直に笑うのを見たのは何年ぶりだろうね。」

「初めてじゃねえ？なーんてな。」

ミサキの言葉を受けて、コゴミがふざけて言った。

「うるさいねえ！あんた達も黙って豆を食べたらどうだい！」

クーニャンは顔を赤らめてそっぽを向く。

「そうそう、みんなで食べれば三倍美味しいってもんですよ。ねえ？あやめ。」

話をふられ、あやめは慌てて豆を手に取り明るく言った。

「そうそう！みんなで、豆、食べようよ。」

「しょうがねえなあ。」

コゴミとミヤシロも、重たい体を起こして豆を摘んだ。

「うめえ！」

翌朝、池ではまだ、蓮の花は咲いていなかった。

「昨日の今日ですからね～。しばらく待たないと駄目かもしれませんね～。あはは」
レンは陽気に笑った。

「では、先にチンゲン菜でも採りに行きましょか。」

天気は、今日も最高に良かった。時折、気持ちの良い風が吹いてくる。人一倍歩くのが遅いあやめは、必死でみんなの後を追いかけてながら道を急いだ。

畑の持ち主は、あやめ達に涙混じりで話した。

「一年ほど前からです。チンゲン菜の収穫時期に、何者か畑を荒していきます。何日もかけて全滅させてしまうのです。もう、これしか残っていません。」

広大な畑の隅、一メートルほどのスペースに、寂しくチンゲン菜が並んでいた。小振りな品種であるため、余計に寂しく見えた。

「それでも、私達は畑を耕し、種を撒き続けてきましたが、そろそろ限界です。」

「ひどいことする奴がいるもんだね。誰だか分からないのかい？」

「それが・・・色々手は打って見たんですが、分からないのです。・・・しかし、花の世界のお姫様の命に関わるのであれば、どうぞ幾つでもお持ち下さい。」

畑の主は、続けた。

「また、種を蒔けば良いのですから。」

親切な申し出はうれしかったが、荒れ果てた畑を見ると、チンゲン菜を分けてもらうのが申し訳ないような気がした。

「なんだか、タダでもらうのが申し訳ないような感じだね。」

クーニャンが呟いた。

「おじさん、チンゲン菜の種は、まだたくさん残ってるのかい？」

「ええ、種だけはたくさんあるのですが・・・この惨状に嫌気がさして農夫がみなやめてしまいました。」

「そうかい。じゃあ、私たちが蒔いてやるよ。その代わりに、今生えてるチンゲン菜は、今夜1株頂くからね。」

「そんな・・・チンゲン菜一株でそれは申し訳ないです。」

「かまやしないよ。どうせ暇なんだ。」

「ありがとうございます・・・」

畑の主はむせび泣いた。

「さあ、道具と種を見せておくれよ。」

そういうとクーニャンは、まっすぐ農具置き場へと向かった。

「あ、あたたた・・・」

コゴミは畑の主の家の土間にへたり込んだ。

「畑仕事ってのは、ハーブ育てるのとは随分違うな。」

「全くです。クーニャン、あなたのお陰でひどい目に遭いましたよ。」

ミヤシロはクーニャンを睨みつけた。

「何言ってんだい。おじさん一人じゃ、あれだけの畑耕すのには相当かかちまうよ。少しは人助けもしないとね。」

「お前は、種蒔いただけだろうが！」

コゴミが嘔み付いたが、クーニャンは涼しい顔だ。

「とりあえず、今日中に全部終わって良かったよ。ね、レン。」

「そうそう、これで安心して、今夜チンゲン菜を頂けますから。あはは。」

レンは陽気に笑った。実際のところ、今日の畑仕事も半分以上はレンがやったのだった。汗一つかかずに手早く畑を耕し、種を撒き散らした。

「レンは、本当に疲れ知らずだね。」

クーニャンが感心した。

「あああ、明日は起き上がれねえかも知れないぞ。俺はちょっと寝る。

月が出たら起こしてくれ。」

コゴミは腰をさすりながら、家の主が準備してくれた寝室へ入っていった。レンはケロツとしたもので、

「ワタシはお茶にしましょかな。クーニャンもどうです？」

などと言う。家の主も笑顔で応え

「お茶請けがありませんが、美味しいお茶をおいれますよ。」

台所へ入ってお茶の準備を始めてくれる。

お茶を頂いた後、

「あやめ、ちょっと散歩でもしない？」

ミサキが窓の外を指差しながら誘って来た。窓の外には、きれいな夕焼けが見えた。

「今から？」

「今だからさ。」

ミサキは外へ向かう。慌てて追いかける。

耕したばかりの畑の脇道を二人は歩いた。

「疲れたでしょ？座ろうか。」

ミサキは、畑の側を通る川の土手に腰を下ろした。

「なんだか、不思議だなあ。」

改めて、あやめの顔をまじまじと見つめながら、ミサキは言った。

「やだ、そんなに見ないで・・・」

あやめはうつむく。

「ご、ごめん。見れば見るほど、ワトソニアに似てるんだけど、別人なんだよね。それが不思議で。」

金髪の少女の顔が浮かんだ。

「確かに、ワトソニアは上品な感じの子だったね。・・・でもなんか・・・自分の死に顔を見てるようで・・・」

あやめは二の腕を手で掴んだ。ワトソニアのことを思い出すと胸が痛み、そして少し、怖い。

「あやめ。」

ミサキはあやめの震える肩を抱いた。

「あやめは、あやめだよ。ワトソニアとは違うよ。僕、あの日からずっと、あやめのことを忘れた日はないよ。」

「ミサキ・・・」

「ワトソニアを見る度に、“フリージアも、こんな風に笑ってるのかな。”って思ってたよ。そして、フリージアはきっと健康で、明るい子だってね。だって、母さんが育てる女の子だもん。元気で明るいに決まってるからね！」

肩を抱く手に、温かい力を感じた。

「ミサキ、私を恨んでないの？」

聞きたかった事が、素直に言えた。

「恨む？どうして？」

「だって、私、結果的にミサキからママを奪ってしまったのと同じなもの。私さえ生まれなければ・・・」

「違うよ、あやめ。」

ミサキは肩から手を外し、今度は正面からあやめを見つめた。

「僕も母さんも、君の事が好きだと思ったから、あの時ああしたんだ。僕は後悔していない。君は、大切な人なんだよ。母さんだって、きっとそう思ってるよ。」

ミサキの瞳は、どこまでも優しい。

「だから、そんなこと、もう考えたら駄目だよ。分かったね。」

「うん。」

自然と、頷かされてしまう。

空の色がどんどん変わっていく。燃えるようなオレンジ色は薄くなり、紫色の夜が広がっていく。

「きれい・・・」

「あやめの暮らしてたところでも、こんな空が見えた？」

「見えたよ。」

そうは言っても、ゆっくり空を眺めることなんて、最近なかった。

「そうか。空っていいよね。僕はとても好きだな。・・・あーあ。」

ミサキは大きく伸びをして、ぱったり後ろに倒れ寝そべった。

「広いなあ。」

見上げると、どこまでもどこまでも空。

「空を見てると、時々、吸い込まれそうな気がするんだよね。あやめも、見てご覧よ。」

言われたとおり寝転んで空を見ていると、空がどんどん自分に迫ってくる感じがしてきた。「ミサキって、小さい頃からみんなと一緒になの？」

「コゴミとかのこと？うん、みんなずっと一緒だ。」

「ワトソニアも？」

「ああ。昔はよく、みんなでこうして空を見たなあ。」

ふっ、とミサキは笑った。

「ワトソニアって、小さい時からあの話し方なんだよ。コゴミに良く泣かされて『ミサキ、コゴミったらひどいんですの。』って。可愛かったなあ。」

(可愛い？ひょっとしてミサキも・・・？)

「それをクーニャンが『ワトソニア！甘ったれるんじゃないよ！』だもん。・・・みんな、全然変わらないなあ。」

小さいクーニャンが、腰に手を当ててワトソニアをしかる姿が目に見えた。

「クーニャンも、可愛かったのね。」

あやめの顔もほころんだ。

「いいなあ、みんな一緒に育ってきたんだ。」

「あやめは、そういう人いないの？」

「私は・・・」

里美の顔が浮かんだ。ミサキたちのように、生まれた時からの仲間ではないが、十歳の時に今の家に引っ越してからずっと、里美とはずっと一緒に居る。

(さっちゃん・・・急に居なくなって、心配してるだろうな。)

「一人いるかな。ミサキたちみたいにたくさんは居ないけど。」

また、もとの生活に戻れるのだろうか。あやめは不安になった。

「大丈夫、すぐに会えるよ。」

それを察知したのか、ミサキが明るい声で言った。

「しばらくは、僕達に付き合ってよ。僕達も、あやめと仲良くなりたいたんだ。」

寝転んだまま、ミサキはあやめを見ていた。その視線に気づき、あやめは少しドギマギした。

「あやめ・・・」

ミサキはそっと、あやめの手を握った。真剣な顔をしている。

(えええ!??)

心臓がバクバク鳴るのが分かった。男の子に手を握られたのは初めてだった。

(なに・・・?このシチュエーションって、告白?まだ、会って三日しかたってないし・・・まさかね。)

「あの、ミサキ・・・」

「しっ。」

ミサキは鋭い目で言った。素早い動きであやめの上につ伏せになり、耳元で囁いた。

「動かないで。」

(えええええ!??)

しかし、ミサキはあやめを見ては居なかった。

「何か居る。」

土手の向こう、畑の影で何かが動いているのを、あやめも感じた。

畑の主の家の一番近く、かろうじてチンゲン菜が残っている場所で、レンとクーニャンはチンゲン菜の出来栄を見ていた。

「やっぱり、新鮮な葉っぱの方が効果あるんじゃないかね〜。」

「どうだろうねえ。大きい葉っぱが良いんじゃないかい？」

「“摘み取る”って事は、株ごと抜くのではなく、葉っぱをもぎ取るかんじでしょうね。あはは。」

「まあ、その方が絵になるね。」

談笑していた二人は、同時に伏せた。地面に這いつくばった状態で、お互い目配せした。

「来ましたね〜・・・」

「そうだね。姿は見えないが・・・今生えてる分をやられたら、今日蒔いた種が成長するまで待たないといけなくなるよ。絶対、やらせないからね！」

「はいはい〜。そうですね。生け捕りにしましょ。」

二人の息はぴったり合っていた。目を合わせて頷きあうと、次の瞬間二人は、音もなく左右に散った。

姿は見えない。気配を頼りに、一步一步、間合いを詰めていく。

「キキッ！」

何者かは、両側から現れた敵に向かって、歯を見せた。右、左、右。逃げ場がない。夢中で走り出したが、あっという間にその背中をクーニャンに押さえつけられ、動けなくなった。

「やった！」

クーニャンは声を上げ、レンを見た。

「いやいや、意外とあっけなかったですね〜。まあ、この小ささじゃ、気付かなかったわけです。」

「キィキィ」

イタチのような生き物だった。大きさは子猫くらいしかなく、薄い茶色の艶のある毛がたっぷり生えている。

「こいつ一匹でこんなに荒らしたのかい？信じられないね。」

クーニャンは呆れた。呆れて遠くを見たときに、レンの向こうにいる何かと目が合った。

「ミサキ!？」

クーニャンは立ち上がり、声をかけようとしてハッとした。

「あ、あんたたち・・・」

「おやおや～。いやいや、そうだったんですか。ワタシは全く気付かず・・・こりゃ失礼。」

ミサキは二人の意味する事によろやく気がついた。慌ててあやめから離れる。

「いや、そういうわけじゃないんだ。今、畑に何かがあるのに気がついて・・・」

「言い訳なんかいいよ。」

「クーニャン、だから誤解だって。」

「どうだかねえ・・・ミサキももう二十歳だしね、色気づいてもおかしくない頃だよ。ねえ、レン。」

「はいはい～。いや～羨ましい限りですな。ところで、コイツはどうしましょか。」

ミサキの言い訳には全く耳を貸さず、レンとクーニャンは捕まえた動物の処遇について思いを巡らせた。

「キュウ～」

チンゲン菜泥棒は、潤んだ瞳でクーニャンを見つめる。

「参ったね・・・」

困った顔でクーニャンが見返す。あやめも土手から上がってきて、チンゲン菜泥棒と対面した。

「可愛い～。」

前足を掴んで、軽く持ち上げてみる。

「キュ～」

「わああ！可愛い～。お前、チンゲン菜好きなの？」

「キュキュッ！」

「とりあえず、家につれて帰りましょ。」

はしゃぐあやめを見て、レンはため息混じりに言った。

畑の主は、心優しい男だったので、チンゲン菜泥棒を殺すのは忍びないと申し出た。

「ただ、放してやってまた同じ事をされると・・・」

とりあえず紐で柱にくくりつけた状態で、水をやった。お腹がすいているのか、全部飲み干した後も物欲しそうにしていた。チンゲン菜を少しやると、喜んで食べた後、眠ってしまった。

「キュウちゃん」

眠っている背中を、あやめが撫でる。

「なんだよ、そのキューちゃんって。」

コゴミが寝転んだままで聞く。

「キュウキュウ啼くからキュウちゃん。」

「ばかだなあ。もっと格好良い呼び方ないのかよ。」

「カッコいい呼び方～？うーん、でも飼うわけじゃないし。」

「キュウりにしようぜ。その方がいいよ。」

「キュウリ？それの方が変よ。」

あやめとコゴミの会話を聞いて、ミヤシロが言った。

「飼いますか？」

「え？」

「あやめが気に入っているのなら、連れて行っても構いませんよ。」

「でも、コイツ、チンゲン菜食っちゃうんじゃない？」

コゴミが心配そうに言う。

「他のエサを与えておけば、大丈夫でしょう。」

それを聞いて、畑の主は喜んだ。

「是非、連れて行ってください。それが一番です！」

こうして、キュウリはあやめのペットになってしまった。

夕食後、月がきれいに出たのを確認して、あやめとクーニャンは外に出た。

「さあて、いよいよ今日の仕事だよ。」

「月の光を浴びているもの、だよな。」

あやめは、光をいっぱいに浴びている、チンゲン菜の若い芽を摘んだ。念のため、五枚摘み取り、母から渡されたカバンの中に入った、小さいビニール袋に入れた。

「しっかりしまっておくんだよ。」

クーニャンは、あやめがカバンに入れるまで、目を離さなかった。

作業が終わって家に戻ると、家の中は静まり返っていた。

「なんだい、もうみんな寝ちまったのかい。あやめ、私達もさっさと寝るよ。明日はまた、たくさん歩かないといけな
いからね。」

二人に用意された寝室に入り、並んで布団に入った。

「あやめ、あんたなかなかやるね。」

クーニャンは暗闇の中で、声をかけてきた。

「え？」

「ミサキの事だよ。正直、ちょっと驚いたよ。」

土手で、ミサキに手を握られた時の事を思い出した。顔が熱くなり、心臓が早くなる。正確には、抱きしめられたわけ
ではないけれど、ミサキの体がぴったり自分にくっついていていた時の事、熱い体温を思い出す。

「だけど、こりゃー悶着起きるかねえ・・・」

クーニャンが可笑しそうに言った。

「ミ、ミサキとは別に・・・さっきのも、キュウちゃんが居るのが分かって、ミサキが警戒したからああなっただ
けで・・・」

「いいよいいよ。そんな言い訳しなくてさ。はあ～。私もなんか良い恋がしたいねえ・・・」

クーニャンはため息をついた。

「恋してるんでしょ？」

「そうだねえ・・・してるつもりだったんだけど・・・」

(あれ？コゴミのこと好きなんじゃなかったっけ・・・?)

クーニャンは、色々考えているようだった。しばらくたって、クーニャンはぼそっとつぶやいた。

「なんだか、見えなくなってきたよ。」

「見えないって？」

「あー、もう、なんでもないよ。さ、寝よう。おやすみ、あやめ。」

クーニャンそうやって、あやめに背中を向けて眠り始めた。

柔らかい、クーニャンの寝息が聞こえ始めても、あやめはまだ眠れなかった。ミサキの瞳が、鮮明に思い出される。
(やだ・・・眠れない・・・!)

窓の外からは、フクロウの声が静かに聞こえてきている。

キュウリは、なんでも良く食べた。食べるものがなかったからチンゲン菜を食べていただけで、本当は甘いものが好きなのよ。捕まってまだ半日も経っていないが、あやめに良くなついていた。

「キュー」

あやめの膝にのり、畑の主が準備してくれた朝食をねだる。

「こら、キュウちゃん、そんなに食べたらブタになっちゃうぞ。」

あやめが言うと、不思議そうに首をかしげる。

「あやめ、ブタってなんだい？」

クーニャンが訊ねる。

「ブタって、こっちには居ないの？犬よりもちょっと大きい動物で、肌色で毛が薄くて、えーと・・・食べられるの。」

「食べる？」

「うん。お肉食べるの。トンカツとか美味しいんだよね〜。」

トンカツの味を思い出して、うっとりとしていたあやめは、クーニャンの驚いた顔に気付き、我に返った。

「どしたの？」

「あやめの世界では、生き物を食べるのですか？」

ミヤシロがそっと聞いた。

「牛とか豚とか食べるけど？」

「そうですか・・・こちらでは、生き物は戴きません。」

言われてみると、こっちに来てから肉類は食べていなかった。魚貝類もだ。

「ベジタリアン？」

「べじた・・・？」

「菜食主義ってこと？」

「そうですね。私たちは植物しか食べないのです。では、もしかしてあやめから見ると、キュウさんも食べ物の一つなのではないですか？」

ミヤシロは珍しく青ざめた顔で言った。

「食べるつもりで可愛がるとは、恐ろしいですね・・・」

「待って待って！きゅ、キュウちゃんは食べないわよ！」

慌てて否定する。

「そうですか。それなら少し安心しました。」

ミヤシロは少しだけ、微笑んだ。

「それより、コゴミはまだ起きられないようですね。」

「そうだね。僕、もう一度起こしてみるよ。」

ミサキが席を立ち、コゴミの様子を見に行った。

「困りましたねえ・・・これでは、次の場所へ向かえないです。」

ミヤシロが腕を組んで、首をかしげた。その仕草は、どことなく色っぽい。

(困ったなあ・・・起きられないのかなあ・・・)

あやめは、コゴミのいる部屋の方を向いた。

『持って行きな。なんかの役に立つだろう。』

レンの曾祖母の声が、急に聞こえた。

(そうだ、あの紙袋の中、まだ見てなかった。)

キュウちゃんを抱えて部屋に戻り、カバンの中から紙袋を取り出した。キュウリはしきりに、紙袋の匂いを嗅ぐ。

「こーら。」

キュウリを避けて紙袋の中を見ると、乾いた餅のようなものと、粉砂糖の入った包みが入っていた。

(コゴミが食べたがってたお餅だ。これなら、食べるかな・・・)

あやめはすぐに、レンに教えてもらってお餅を調理した。十五分ほど水につけ、それから金網で焼くと餅は柔らかく膨れた。一つ器に取り、粉砂糖をかける。そして一口。

「おいしーい！」

レンの曾祖母の家で食べたのと、寸分変わらない味が再現された。大皿に盛ってテーブルの上に並べ、コゴミの分だけ、小皿に取り分けた。

(そうだ・・・)

「クーニャン、コゴミに持って行ってよ。」

あやめはさりげなく言ったが、あっさり断られた。

「やだよ。私もまだこれは食べてないんだ。こっちで戴くよ。」

「でも・・・」

「いいよ私は。あやめが、持って行きな。それとも・・・気になるかい？」

クーニャンは意味ありげに、ミサキを横目で見た。

「な・・・だからそれは・・・」

「まあまあ、あやめ。いいじゃないですか。早くコゴミに持って行ってあげてください。」

ミヤシロが餅をつまみながら笑った。

「これ、本当に美味しいですね。それに・・・意外な効果があるようですよ。」

「意外な効果？」

「ええ。コゴミは、きっと起きてきます。」

ミヤシロは自信ありげに笑った。

「餅？そんなもんいらねえよ。」

コゴミは布団にへばりついたままで、あやめの方を見ようとしな

「体中、ガッタガタだぜ。あいつら、良く動けるな。」

「そんなこと言って～・・・。」

あやめは、コゴミの目の前に、餅を差し出した。

「一口だけでも、どう？」

「食べねえよ。」

コゴミはツンツンした態度を崩さない。

「じゃあ、食べずに出かけるの？」

「だから、動けねえって。」

コゴミの言い方に、あやめは腹が立ってきた。みんなが心配しているというのに、なんだろう、この態度は！

「ちょっと、コゴミ。いい加減にしてよ。」

急に語気を強めたあやめに、コゴミは少したじろいだ。

「ど、どうした？」

「なに一人でへばってグダグダ言ってるのよ。コゴミの好きなワトソニアが死にかけてるのよ。」

「お、おい、お前、なんでそのことを・・・」

「そのくらい見てりゃ分かるわよ。好きな女が死に掛けてるのに“体が動かない”ですって？笑っちゃうわよ。あんたなんか振られて当然だわ。」

「なにっ！」

「もういいわよ。コゴミはここで置いて行く。疲れが取れたら、さっさと帰ればいいわ。みんなにはそう言っとく。」

「ま、待てよ。」

「じゃあね。」

「おい！」

コゴミは慌てて起き上がり、あやめの手から皿を奪い取った。

「分かったよ。食うよ。食って出掛けりゃいいんだろ！」

ヤケクソ気味で餅を頬張る。

「う・・・美味しい！」

一つ、二つ・・・コゴミはあっという間に餅を平らげ、すくっと立ち上がった。

「すげえ！体の疲れが取れてる！」

「え？」

「痛みがふっとんだぜ。すごいな、レンの婆さまの餅は。」

“意外な効能”はこれか・・・。とりあえず、あやめはほっとした。

「いやー。取り放題だな！」

コゴミは上機嫌だった。辿り着いた南東の畑には、一面に蕪が生えていた。

「連日、肉体労働じゃやってられないよ。さ、あやめ、さっさと収穫しろよ。」

「う、うん・・・」

あやめが畑に近づくと、ミヤシロがそれを制した。

「待ってください。一応、持ち主にお断りしないと。」

「そうそう、そうですよ～。ワタシ、ちょっと聞いてきますから～。」

「私も行きましょう。」

ミヤシロとレンは、畑の向こうに見える小さな家に向かって歩いていった。

「一休みするか。」

コゴミの一声で、4人は畑の脇の土手に腰を下ろした。キュウリは嬉しそうに、あやめの足下をクルクル走り回っている。

「それにしても、ここの蕪は元気がいいね！」

ミサキは畑を眺め回して嬉しそうに言った。確かに、昨日のチンゲン菜畑と比べると、こちらの畑は青々と茂った葉がきれいに並び、元気のよさを感じさせる。

「でも・・・」

蕪の間を、何かがチョロチョロと動き回っていた。

「やたらと、ネズミが多いね。なんだろう？」

「えっ。ネズミ？」

あやめは慌ててキュウリを抱き上げた。ネズミ相手にケンカなどされたら堪らない。よく見ると、ミサキの言うとおり、蕪の間をネズミが走り抜けていくのが分かった。

「なんだか、気持ち悪いね。」

クーニャンがつぶやく。

「みなさん！」

畑の主の家の前で、ミヤシロが叫ぶのが聞こえた。ミヤシロは珍しく慌てた様子で4人の下に走ってきた。

「大変な事になりました。」

ミヤシロが真っ青な顔であやめを見た。

「気をしっかりして、聞いてください。」

「う、うん。」

なぜ、私を見ていうんだろう、あやめはちょっと変な感じがした。

「蕪ですが、最近、大量にネズミが発生した影響で、ほとんど齧られてしまっているそうです。」

「齧る？だって、畑にはあんなに蕪が・・・」

「ためしに、一つ抜いて見ましょう。」

ミヤシロは一番近くにある蕪を一つ抜いた。きれいな白い蕪は、その先端部分がきれいにかじり取られていた。

「この通りです。」

『南東の畑の蕪の根の先端』。必要な部位が、そっくり無くなっていた。

「全部、こうなってるの？」

「それは、抜いてみないと分かりません。」

「じゃあ、手分けして片っ端から抜いてみるって事？」

あやめは、昨日までの作業を思い出した。

(また、コゴミが怒っちゃうかなあ・・・)

そんな心配は無用だった。ミヤシロはさらっと、言った。

「そうですね。齧られていない蕪を見つけるまで、抜き続けるしか有りません。少々大変な作業になりますが、頑張ってください。」

「へ？」

「いやいや、女の子一人に任せるのはちょっと可哀想ですが、仕方ないですね～。あやめ、頑張って下さい。」
レンも、申し訳なさそうな顔をする。あやめは、良く意味が分からない。

「あれ？その顔は忘れてしまったんでしょうか？蕪は、あやめの手で掘り出さないといけないですよ。」

「あっ！」

そうだった。あやめは広い畑を見て、愕然とした。ここを、あやめ一人で。

(広iiiiiiii～・・・)

目に、ウルウルと涙が溜まってくるのが分かった。そんなあやめの肩を、ミサキがぽんと叩いた。

「頑張って。きっと、すぐに見つかるよ。」

「ミサキ・・・」

「さあ！あやめ、さっさと掘り当てて、次に行こうぜ！」

コゴミは威勢良く畑へ向かう。

「俺達も、一緒に居るからよ。」

「うん、うん。がんばる！」

あやめは、涙を堪えて畑に踏み込んだ。とにかく、やるしかない！

あやめが蕪を抜き始めるのを確認してから、ミヤシロは再びレンと共に家の中に入った。

「さて、私達も一仕事しましょうか。」

「はいはい。あやめが蕪を見つけるまでには、かなり時間がかかるでしょ。それまでに、どうかしましょ。」

レンは何度も頷いた。

「さて・・・ご主人、五キロほど川を下った所で、間違いないですね。」

「はい、間違いありません。行けばすぐに分かると思いますよ。」

ひよろ長い顔の主人は、か細い声で言った。

「しかし、本当にお願いしてしまってもよろしいのでしょうか？」

「問題ありませんよ。」

ミヤシロは蕪を抜いては肩を落とすあやめを、遠くに見ながら言った。

「あの分では、今日中に作業が終わらないかもしれません。その間に出来る限り遣ってみますよ。」

「ありがとうございます。」

男は頭を下げたあと、土間に置いていた大きな袋を、レンに渡した。

「これが種です。よろしくお願い致します。」

「はいはい～。任せてください～。・・・ミヤシロ、では行きましょうか。」

「ええ、早速向かいましょう。」

ミヤシロとレンは、家を出た。

「ここに四人は要りませんね・・・クーニャンだけ残して行きましょうか。」

ミヤシロが呟くと、レンが横から口を出した。

「ミサキを置いて行きましょ。」

「ミサキ？なぜですか？」

「ミヤシロはまだ知らないんですね。でも、ミサキを置いていきましょ。それが良いです。」

「？・・・まあ、とにかく急ぎましょう。では・・・クーニャン、コゴミ！行きますよ！」

呼ばれたコゴミは、大きな袋を抱えたレンを見て動きが止まった。

「おい・・・何をやる気だ？」

「五キロ先の荒地を、整備しに行くんですよ。そこの荒廃が原因で、こちらの畑の蕪が被害にあっているようですから。」

「うげっ。またかよ。」

「そう言わずに。」

ミヤシロはいつも通り笑顔だが、目は笑っていない。

「わ、分かったよ・・・」

コゴミが渋々頷くと、ミサキが言った。

「僕が行くよ。コゴミは、蕪を運んでいればいいよ。」

「おっ。いいの？」

「うん。もともと、コゴミにはこういう作業向いてないしね。」

ミサキはさっさと歩き出した。

「向いてないだって？何様のつもりさ。」

クーニャンがフン、と鼻を鳴らした。

「では、あやめの事は頼みましたよ。」

ミヤシロ達は川下を目指した。

抜く蕪、抜く蕪、全て先端が齧り取られていた。素手で抜くため、時間もかかるし手も痛む。蕪を抜き始めて、もう2時間近く経っていた。

「次で丁度100本目だな。」

コゴミは、ブラブラ歩き回ったり寝転んだりして、時々、あやめの抜いた蕪を束ねて運ぶ。

「ふああ。暇だな。おい、休憩するか？」

あやめは、自分はこの間に辛い思いをしているのに、のん気なコゴミに腹が立った。

(あんたは遊んでられて良いわね！)

思い切り睨んだ。

「おお！どうした？何怒ってんの？・・・疲れたか。お茶もらってくるよ。ほら、川で手洗って来いよ。な？」

あやめは、100本目の蕪を抜き、先端がないことを確認すると、立ち上がり川へ向かった。ずっとかがんでいたため、背中が痛む。

(やっぱり、ミサキが残ってくれたら良かったのに・・・)

と思う。彼なら、何か楽しい話の一つ、優しい言葉の一つも掛けてくれたに違いない。

今日は、手袋がなかったので、爪の中まで土が入り込んで真っ黒になっていた。洗っても洗っても、なかなか落ちない。皮膚もガサガサになっている。川の音を聞きながら、一人で手を洗っていると、なんだかとても寂しくなった。

「あやめ・・・」

コゴミが、後ろから声をかけてきた。応えないでいると、コゴミは土手を降りてきて、あやめの横に腰を下ろした。

「ほら、お茶飲めよ。」

熱いお茶の入ったカップを手渡される。

(あれ・・・？これ、コゴミのところで飲んだお茶みたいな香りがする。)

「分かったか？さっきブラブラしてて見つけたんだ。あの家の裏に、俺が育ててたハーブに似た植物がたくさん生えてる。疲れてる時には、これが一番だぜ。それから・・・これ、手に塗っとけ。」

コゴミはポケットから、3センチほどの、どんぐりを大きくしたような木の実を取り出した。上手く加工されており、ヘタの部分が、容器の蓋のように開け閉めできるようになっていた。中には、クリーム色の軟膏のようなものが入っている。

「これ、どうしたの？」

「これも・・・たまたま見つけたからな。ちょちょっと作ってみただけだよ。手に塗れば、そのガサガサになってるのも明日には治るさ。」

「ハンドクリーム作ったの！？すごい！」

あやめは早速、手の甲に塗ってみた。お茶と同じく、いい香りがする。

「いい匂い！ありがとう！」

「いや、たまたま、だからな。」

照れているのか、コゴミは、あやめの方を見ず、ガブガブとお茶を飲んだ。

(コゴミも優しいところあるじゃない～)

さっきまでの寂しさが嘘のようだった。

「さあ、もう一頑張りしよっか！」

「えっ！もうやるのかよ！？」

コゴミは、ウンザリした顔になった。

253本目の蕪を抜いたとき、ミヤシロ達が帰ってきた。何があったのか分からないが、全員泥まみれでグッタリしている。それに負けないくらいあやめも泥だらけで、ただ一人、コゴミだけがピカピカで元気だった。

コゴミは、蕪畑の主に風呂を借りて、ハーブの薬湯風呂をこしらえた。

「あー、生き返る。やっぱりハーブを扱わせたらコゴミが一番だね。」

クーニャンがさっぱりした顔で、風呂上りのアイスハーブティを飲む。

「だろ？俺だって遊んでたわけじゃないんだよ。チャーんと、色々集めておいたのさ。」

「いやいや、たいしたもんです。コゴミにこんな特技があったとは。あはは。」

レンもホカホカになった体で嬉しそうに笑った。

「まあな、ハーブの事なら任せてくれ。」

疲れていないせいか、コゴミはとても調子よく、上機嫌だ。

「コゴミを置いていったのは正解でしたね。」

ミヤシロは、まだ濡れている髪を櫛で直しながら微笑んだ。

「これで、明日の作業も大丈夫ですね。」

「明日？」

コゴミが、目を丸くした。

「そっち、まだ終わってないのか？」

「ええ。思ったよりも手こずってしまいました。どうにか、枯れ草は撤去できました。明日、耕して種を蒔けば完成です。」

「そうか。じゃあ、こっちも、明日中には蕪を掘り当てたいとこだな。」

「そうですね。そうして頂ければ効率良いですね。あやめ、大丈夫ですか？」

ミヤシロは、あやめの指先を見つめた。

「随分、痛んでしまったようですが。」

「う、ううん、大丈夫！」

荒れた手を見つめられるのが恥ずかしくて、あやめは手を後ろに隠した。

「お風呂に入ってきれいに洗ったし、コゴミがハンドクリーム作ってくれたから。」

不思議なことに、コゴミのクリームを塗ると、指先と皮膚の痛みが治まった。コゴミが言うとおりに、

(本当に、ハーブの天才だわ・・・)

とあやめは思った。

翌日も朝から、ひたすら蕪を収穫した。畑の主から、手袋も借りたので、昨日よりはずっと作業しやすかった。あやめの疲労を気遣って、30分ほど作業を続けると、コゴミが休憩も入れてくれる。

ハーブティ、ハーブブレッド、ハーブクッキー。

(なんていうか・・・お嫁さんみたいね・・・)

コゴミの甲斐甲斐しさに、あやめは半ば呆れた。乱暴な言葉遣いと行動は全く逆だ。

(変なやつ・・・クーニャンは、どこが好きなのかしらねえ・・・)

「どうした？これも美味いだろ？」

「うん。美味しい。」

「そうだ、ハンドクリームも作っておいたからな。昨日のだけじゃすぐ足りなくなるだろ？」

「わあ、嬉しい！ありがとう！」

あやめは素直に受け取った。コゴミのクリームは、本当に良く効く。

(あ、そうだ・・・)

あやめは、いったん受け取ったハンドクリームを、コゴミの手に返した。

「私だけもらってばかりで、なんか悪いな・・・クーニャンにあげてよ。」

「クーニャンに？なんでだよ。あいつの手は、そうそう荒れないぜ。」

(荒れてるかどうかなんて、どうでもいいのよ！)

「だいたい、昔作ってやったら“私の手が荒れてるとでも言うのかい！”とか怒鳴られたし。クーニャンには二度と作ってやらねえよ。」

(照れてるんだってば！)

あやめは、言い返したいところをぐっと堪えた。

「そ、そうなんだ・・・」

「だから、これはあやめが使いえ。」

「う・・・ん。ありがと。」

あやめは再びハンドクリームを受け取り、今度はありがたくポケットに入れた。

「キュキュッツ」

キュウリがポケットから頭を出した。

「ごめんごめん。びっくりしたね。」

キュウリをつまみ出し、コゴミの作ったハーブブレッドを一かけ持たせると、嬉しそうに食べた。

「キュウリにも、俺のパンの美味さがわかるようだな。よしよし。おい、コイツ、俺が見てやるよ。」

「ほんと？ちょっと、遊ばせてあげられる？」

「任せとけ。お前は、心おきなく、蕪を抜け。」

「キュー！」

キュウリは、あぐらをかいて座っているコゴミの足の上を、嬉しそうに動き回った。

黙々と作業をしていると、一日はあっという間に過ぎていく。冷たい風を感じて、頭を上げると、もう夕焼けが見えていた。

「今日もだめか。」

コゴミが諦めた顔をして言う。

「キュー」

キュウリは、コゴミの肩に乗って、くたっとしている。

「キュウリも、俺と遊ぶのに飽きちまったみたいだよ。」

蕪畑はとても広い。2日もかけたが、あやめはようやく畑の真ん中あたりにいる。

(もし、全部齧られてたら・・・)

あと2日抜き続けて全滅だったらと考えるだけで、全身の力が抜けてくる。

「それで、682本目だ。」

コゴミが励ますように言った。

「今度は大丈夫だ。」

あやめは蕪に手を掛けた。根元の土を手早く掻き出す。根の先端が大事なので、いきなり引き抜く事はしない。出来る限り掘り進め、最後に葉を掴んで引き抜く。実に、682回目。もう手馴れたものだ。

蕪の全体が見えてきた。そろそろ頃合だ。あやめは葉を掴んでゆっくりと引き抜く。

「おっ！」

「あっ！」

コゴミとあやめは、ほぼ同時に叫び声を上げた。

「あった！」

「やったな！・・・お、お前、それなくすなよ。早くしまえ、早く。」

「う、うん。」

脇に置いてあったカバンから急いでビニール袋を取り出し、蕪を収める。

「良かったあ～・・・なかったらどうしようかと思った。」

ほっとした途端、あやめの目から涙がこぼれた。

「キュウ～」

キュウリが心配して、座り込んでいるあやめの膝にすがった。

「ばか。泣くなよ。キュウリが心配してるぞ。」

コゴミは、キュウリをひょいと摘み上げてあやめの手に乗せた。

「キュウちゃん～・・・」

あやめは泣きながら、キュウリにそっとほお擦りした。

「ったく。仕方ねえなあ。」

コゴミはあやめの前にしゃがみこんで、あやめの頭を腕で抱いた。

(あったかい・・・)

人の体温を感じると、こんなにも安心してしまうのは、なぜだろう。疲れがどっと出て、急に眠くなる。

「お、おい・・・？・・・お・・・重い・・・」

「キュッ！」

キュウリは、あやめの手からコゴミの肩に飛び移り、そのまま頭に駆け上がった。

「おい！お前もかよ！・・・仕方ねえなあ！」

コゴミは眠ってしまったあやめを腕に抱きかかえたと立ち上がった。落ちているカバンを、足で器用に引っ掛けて手に持ち替える。

「落ちるんじゃねえぞ、キュウリ。」

「キュー！」

キュウリは嬉しそうに、コゴミの首の周りを回った。

冷たい夜風が吹いてきた。遥か遠くに、ミヤシロたちの影が見え始めた。

「あいつらも帰ってきたか。また、風呂でも沸かしてやるか。」

コゴミは急いで家に戻り、風呂の支度を始めた。

「あやめ、起きてください。」

夜明け前に、あやめはたたき起こされた。

「ん・・・？まだ、夜じゃない・・・」

窓の外は真っ暗だ。

「はいはい。でも、起きてください。あ、クーニャンを起こさないように気をつけて～。」

レンは小声で言った。

「クーニャンは、昨日の作業で疲れてますから、もうちょっと寝かせてあげましょ。」

「私だけ～？なにをするの？」

「とりあえず、着がえて外に来てください。」

あやめは、簡単に身支度を済ませると、レンの後を追った。コゴミの薬湯風呂のお陰か、体の疲れは不思議なほどなくなっている。

「さあ、これからひとつ走り、蓮の池までいきましょか。」

「えええ！？」

「いやいや、これから西の畑の方に向かいますが、池からかなり離れてしまうのでね。先に蓮の花を採って来た方が良いと思ったので。さあ、出発しましょ。今から行けば、昼前に戻れます。」

「昼前って・・・」

あやめが歩いたら、片道3時間はあるだろう。今まで歩いてきた道のりを思い出して、あやめは正直、

(無理・・・)

と思った。レンならば、たいした距離だとは感じないのだろう。しかし、あやめにとっては、かなりの距離だ。

「ささ、行きましょ。」

「ま、待って・・・」

「仕方ねえなあ・・・」

「??」

「俺が、抱えてってやるよ。」

暗闇から、突然コゴミが姿を現した。手には、何か草のようなものをたくさん握っている。

「おやおや、コゴミ、ずいぶん早いですね。」

「ああ、昨日、昼寝しすぎて目が覚めちゃった。ここの家の奥さんが、俺のハーブブレッドをえらく気に入ってくれたからさ、お礼代わりに焼いてやろうかと思って、ハーブを摘んでたところだ。」

「そうでしたか。確かに、コゴミのハーブブレッドは最高ですからねえ。あはは。」

「ちょっと、待ってろよ。ハーブ置いてくるから。あやめのトロさじゃ、昼前に帰ってこれないだろ。」

コゴミは、さっと家に入り、またすぐに出てきた。

「ほらよ。」

コゴミは、軽々とあやめを抱き上げた。

「きゃっ。」

「静かにしろよ！みんなが起きるだろうが。」

「あ・・・ごめん。」

胸が、どきどきする。父親を知らずに育ったあやめは、男の人にこんな風に、抱き上げられたのは初めてだった。顔が、とても近い。

「うーん・・・コレでもいけるけど・・・やっぱりおんぶするか。」

あやめの気持ちはお構いなしで、今度はさっさと腕からおろして、コゴミは背中を見せた。

「早くおぶされ。」

「は、はい。」

慌てて、おぶさる。これはこれで照れくさい。

「ではでは、出発しましょか。」

「おう。ちゃっちゃと行こうぜ。」

レンとコゴミは走り出した。

東の空から、少しずつ太陽が昇り始める。冷たい朝の空気を頬に感じながら、あやめは変わっていく空の色をぼうっと眺めていた。

往路は快適だったが、復路は辛かった。何が辛いかというと・・・

「お前、いい加減にしろよな！今度寝たら、落っこつすぞ！」

コゴミはプリプリ怒っていた。

「まあまあ、コゴミ、そんなに怒らなくても・・・あやめも悪気があったわけじゃなし。」

レンが笑ってとりなす。

あやめは、コゴミの背中であぐさり眠ってしまっていた。池に到着してコゴミにたたき起こされると、一面に蓮の花が咲き乱れているのが見えた。あやめは一気に目が覚め、喜んで、その中から一番きれいなピンク色の花びらを3枚選り出して摘み取った。無事、作業完了。

しかし、コゴミの不機嫌は治らなかった。

「寝てただけじゃなく、俺の服まで汚しやがって。」

コゴミの肩は、あやめの溢したヨダレで少し濡れている。

「だから、ごめんって・・・」

「ほんつとに仕方ねえ奴だなあ。」

そういいながら、コゴミは、おぶされ、と背中を向けた。

「ありがと・・・」

あやめは恐る恐るその背中に身を預ける。さっきよりも、更に緊張してしまう。

「行くぞ。」

レンとコゴミは再び走り始めた。

「ごめんね。」

背中で揺られながら、あやめはコゴミに話しかけた。

「・・・もういいよ。」

思いのほか優しい声で、コゴミは応える。

「どうせ・・・ミサキだったら、もっと優しくかったのに、って思ってたろ。お前も。」

「お前も？」

「・・・なんでもねえよ。」

ワトソニアのことを言っているのだと、あやめは気づいた。

「私、別にミサキのことはなんとも・・・」

「そうか？そうはみえねえけど？」

「・・・」

コゴミに指摘されると、胸が痛んだ。確かに、ミサキの方が優しくて、ミサキの方が大人で、ミサキの方が頼りがいがある、ミサキの方が爽やかで素敵だ。

(ミサキの方が・・・)

数え上げた後、ミサキ、ミサキとってしまう自分に気がつく。

(もしかして、私・・・?)

顔が熱くなる。

「まあ、いいけどさ。どうせ、俺には高嶺の花だ。」

「え？なに？」

(ワトソニアがミサキのこと好きだって、知ってるのかな・・・ミサキも・・・)

ワトソニアが好きなのかな、と思うと、少し嫌な気持ちがあった。

「俺の家は、代々、庭番なんだ。」

コゴミがゆっくり、話し始めた。

「え？マジシャンとかじゃないの？」

「なんだよそれ？」

「だって・・・」

はじめてあった時、指を鳴らしてあやめを動けなくし、眠らせたコゴミを思い出す。

「パチンってして私のこと眠らせたり・・・」

「ああ、あれはマジックじゃねえよ。薬草をつぶしたんだ。俺、そういうの器用でね。」

「薬草・・・あっ、もしかして、黄色いフリージアの花も!？」

急にあやめは、黄色いフリージアを思い出した。あの花が開いた時も、わずかに甘い香りがしたような気がする。

「ああ、あれも俺だよ。眠らせて連れ去ろうと思ったんだけど、失敗しちゃった。」

「そうだったんだ・・・」

やっぱり、コゴミって変な人だなあ、とあやめは改めて思った。

「屋敷の周りの庭を見ただろ？あれは全部、俺とオヤジと二人で作ってる。」

「二人で？」

「ああ、二人でだ。それから、王家のための薬草園も俺たちが管理している。ハーブ園もな。」

どうりで、ハーブに詳しいわけだ。

(じじ臭いと思ったけど・・・趣味じゃなかったのね。でも・・・)

「それと、どう関係あるの？」

「俺には、兄弟がいない。」

「？」

「だから、庭番をやめるわけにはいかないんだ。その・・・ワトソニアと結婚したら、王様になるわけだろ？さすがに、庭番なんかやってられないじゃないか。」

少し照れながら、しかしきっぱりとコゴミは言った。

「分かってるんだ。」

「なんか・・・そういうのってやだ。」

あやめは、ぼつん、と言った。

「仕方ねえよ。ミサキなら大丈夫だけど、お前は諦めな。」

コゴミは更に続けた。

「ミサキの家は、産婆の家系だ。でも、男のミサキは継げない。幸い、従姉妹がたくさんいるから、そのうち誰かがなるだろう。鍵の秘密も、もうばれたしな。あいつは、ワトソニアと・・・結婚するのに、なんの不都合もない。ワトソニアもその気だし。」

少し、言いにくそうだった。

(コゴミ・・・)

返す言葉が見つからない。

「ワトソニアは、小さい頃からミサキが大好きなんだ。分かってやってくれよ。」

「うん・・・？って、私、別にミサキを好きなわけじゃないわよ！」

「分かった分かった。ほら、もう見えてきたぜ。」

蕪畑が見えてきた。クーニャンらしき人の影が見える。

「帰ってきたよ！」

クーニャンが叫ぶ声が、遠くから聞こえてきた。

蕪畑の主の家で蕪のスープをご馳走になった後、もらった蕪を山ほど背負ってレンは元気に言った。

「さてさて、ようやく3つ集まりましたね。次は、西の畑ですが、ちょっと遠いので、今日はワタシの家に行きましょ。」

「レンの家ですか？」

ミヤシロが興味深げに言った。

「はい～。丁度、西の畑とこの、中間辺りになります。」

「もしかして、メラスフェルラも見られるのでしょうか？」

「はいはい。もちろんです。」

それぞれが、まだ見ぬメラスフェルラを想像しながら、レンの家に向かって歩き始めた。

「それにしても、朝起きたらあやめが居ないから、びっくりしちまったよ。」

クーニャンが言う。

「ごめんね。起こしちゃいけないと思ったから・・・」

「まあ、良いよ。兄さんが行き先を知っていたから、大騒ぎにはならなかったし。お陰で、朝はのんびりさせてもらったよ。あやめは、疲れたんじゃないかい？」

「ううん。コゴミが負ぶってってくれたから・・・」

言ってしまうてから、あやめは慌てて口をつぐんだ。

(ヤキモチ焼かれちゃうかな・・・しまったなあ)

しかし、クーニャンには動揺する気配が全くない。

「そうかい。良かったね。」

「クーニャン？」

「なんだい？」

「あの・・・私が歩くの遅いから・・・ってだけだから・・・」

「そんなこと、かまやしないよ。ほら、置いてかれるよ。行こう。」

クーニャンは足早に進んで、先頭を歩いているレンの横に並んだ。

(どうしたんだろう・・・)

あやめも少し小走りに走って行き、前を歩いていたミサキに追いついた。

「あやめ、走ると疲れちゃうよ。」

走ってきたあやめを振り返りながら、ミサキが爽やかに笑った。

「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だよ。みんな、待ってくれるから。」

「うん。ありがと。」

「疲れてない？大丈夫？」

「大丈夫！私より、レンやコゴミの方が疲れてるんじゃないかな。」

「ははは、大丈夫だよ。レンは疲れ知らずだし、コゴミは昨日も一昨日も、ゴロゴロしてたからね。」

「そっか。そうだったね！」

やっぱりミサキは優しい、とあやめは思った。

「今日も、良い天気だねえ。」

「風が、気持ちいいね。」

ミサキは、楽しそうに空を見上げる。青空に、ひつじ雲が浮かんでいる。

「のどかだなあ・・・」

ミサキと居ると、本当にゆったりとした温かい気持ちになる。突然、知らない世界に連れてこられ、出生の秘密を知り、とうとうこんな変な冒険のようなものにまで参加する事になってしまったが、それすら、たいしたことではないように思えてしまう。しかし、ミサキの横顔を見ながら、あやめは胸が苦しくなるのを感じた。

『諦めな』

コゴミの声が蘇る。そして、ワトソニアの切ない表情も。

(あんまり、ミサキに近づいちゃいけない・・・)

あやめは、気持ちを振り切るように、走り出した。

「あやめ！どうしたの？」

「私、ミヤシロに聞くことがあったの。」

ちょっと振り返って、思い出したように言った。笑顔が、引きつる。そのまま走って、前に行くミヤシロとコゴミに追いついた。

「聞きたいことは、なんですか？」

追いつくなり聞かれて、あやめは固まった。

「え？」

「聞こえてしまいました。私に聞きたいことがあるそうですね。」

「そうなのか？じゃあ、俺は失礼した方がいいのかな。」

コゴミは後ろを振り返り立ち止まった。ミサキを待つつもりらしい。

「さあ、どうぞ。何でも聞いてください。」

「えーっと・・・なんだっけ。忘れちゃった！」

「白々しいですねえ・・・」

ミヤシロがにやりと笑った。

(見透かされてる・・・?)

前を見ると、レンとクーニャンが楽しそうに話しながら歩いているのが見えた。最も、レンは山のように詰まれた蕪を背負っているため、足しか見えないが。

「あの二人、なかなか気が合うようですね。」

「レンとクーニャン？」

「はい。南の荒地を耕していた時も、大変楽しそうでした。」

ミヤシロは淡々と言う。

「兄としては、心配？」

あやめがふざけて言っても、ミヤシロはあくまでも冷静だった。

「そうですね。やはり、違う世界の方ですし・・・。」

「違う世界、か。・・・あっ、でもクーニャンはコゴミが・・・」

あやめが小声で言うと、ミヤシロは笑った。

「若い女の子の気持ちなんて、当てになるもんじゃありませんよ。」

「え？」

「あやめも、どうなるか分かりませんよ。」

「どういう意味？」

「まあ、良いのです。おや、随分きれいな山が見えてきましたね。」

ミヤシロは話をそらして、前方を指差した。確かに、とてもきれいな山が見える。赤や黄色、様々な色で覆われている。

「あんな山、初めて見ました。」

「私も。」

見とれてしまうほど、きれいな山だった。

「もうすぐ、ワタシの家に着きますよ～。」

レンが前から叫ぶ。

「あの山の麓に、ワタシの家があります。家に着いたら、蕪でも煮て食べましょ。あはは。」

しとすと降る雨を眺めながら、ワトソニアはそっと微笑んだ。

「お母様、フリージアの儀式が成功したのですね。」

枕元に座っているイキシアは一瞬ためらったが、微笑んで言った。

「ええ。だから、あなたは心配しないでゆっくり体を治してちょうだい。」

「これでもう、安心ですわね。」

本当に安心したのだろう。ワトソニアは深く息を吐き、もう一度微笑んだ。

「ミサキやコゴミも、安心したでしょうね。」

「え？」

「儀式のお手伝いをするからしばらく来れないって、コゴミが言ってましたわ。」

それで、ミサキ達が顔を出さなくなっても、何も言わなかったのだとイキシアは納得した。

「きっと、慣れない儀式で疲れたでしょうね。落ち着いたら、フリージアにもお会いしたいわ。」

「そうね。フリージアもそう思っていると思うわよ。お母様から、フリージアには伝えておくわね。」

「ええ、お母様。きっとよ。」

ワトソニアは、そっと目を閉じた。すぐに柔らかな寝息が聞こえてくる。

こんな、少しの会話でさえ彼女の体力を激しく奪ってしまう。イキシアは声を殺して泣いた。

「あとはお願ひね。」

侍女達に一声かけると、イキシアは部屋を出ていった。

「ワトソニアの様子は、どうであった？」

イエイオンは、戻ってきたイキシアに訊ねた。

「儀式が行われたと思っていますわ。」

「そうか。」

「コゴミが、出発する前にワトソニアに“儀式の手伝いをするから会えない”って言っていたそうですの。それであの子、みんなの姿が見えないのを不思議に思わなかったようですわ。でも・・・」

「そうだな。この先、隠し通せるかは分からんな・・・」

イエイオンは深くため息をつき、うなだれた。

「フリージアは、無事なのだろうか・・・」

イキシアも、自然と視線が下に落ちた。

「きっと・・・無事ですわ。」

「そうであって欲しいものだ。」

イエイオンは北を向いた窓の前に立ち、降りしきる雨に見とれた。

「良い雨だ。命の世界で、何か変化が起きているのであろうか？」

「あなた・・・」

イキシアはそっと、イエイオンの横に寄り添った。細いイキシアの肩を、イエイオンはそっと抱いた。

「あまり心配するな。きっと、大丈夫だ。」

レンの家は、こざっぱりとしていてなかなか良い造りだった。塗装をしていない木をそのまま使ったカントリー調の内装になっている。小さなキッチンの壁にはめ込まれた、藍色のタイルが印象的だ。窓から見える一面の花畑が、室内をさらに明るく見せている。

窓の脇に、小さな鈴がぶら下げてあった。レンの話によると、『花の世界』にある扉が開くと、この鈴が鳴るらしい。仕組みはいまいち飲み込めなかったが、レンはこの鈴が鳴るのを聞いて、トンネルの入口まで迎えに来たという。

「さあさあ、みなさん座ってください。お茶でも飲みましょ。」

レンは張り切ってお茶の支度を始める。

「手伝うよ。」

クーニャンは、戸棚からティーカップを取り出したり、お皿を出したり、テキパキと動いた。

「ここに、一人で住んでるのかい？」

「はいはい。昔は家族で住んでましたが、私が大人になったので、家族は婆さまのいる村に帰りました。代々、そういうキマリになってます。」

「キマリかい。」

「はいはい。お嫁さんをもらって、子供が大人になるまで、ここで暮らす事になります〜。」

二人の会話を聞いて、コゴミが口を挟んだ。

「嫁さんって、もらうアテあるのかよ？」

「いやいや〜・・・参りましたねえ。」

レンはポリポリと頭を掻いた。

「まだ決まってないんです〜。なにしろこんな山奥に引っ込んでますから。あはは。今、婆さまが必死で探してくれます。あはは。」

久しぶりに、一人になった。家族で住んでいた、というだけあって、レンの家は意外に広かった。2階には小さな部屋が並んでいて、それぞれ小さな机とベッドが置かれていた。階段を登って、一番右奥の部屋があやめ、その横がクーニャン、ミヤシロ、コゴミ、ミサキ、と続く。レンは下の部屋に寝ると言った。

あやめは、キュウリを抱きかかえてベッドに腰を下ろした。一人になると、遠くに来てしまった事を実感してしまう。ちょっと、怖い。

「キュウ〜。」

そんなあやめを気遣うように、キュウリはあやめの頬をペロペロと舐めた。

「やだ、くすぐったいよ！」

ひっくり返って笑うあやめに、じゃれ付くキュウリ。

「あはは。やめてやめて。こらっ。」

「キュー！」

小さくドアがノックされたが、あやめは気がつかなかった。もう一度、ノックの音。

「ん？」

何か音がしたような気がして、あやめは動きを止めた。

「なにやってんだよ……」

ドアが開いてコゴミが顔を出した。

(うわっ……)

慌てて体を起こして服の乱れを直す。

「能天気なやつだなあ。」

「なっ、なに？どうしたの？」

「あれ出せよ。」

「へっ？」

「まったく、“へっ？”じゃねえよ。ほら、採ってきたもの出せ。」

促されるままに、あやめはカバンの中から収穫物を取り出した。

蓮の花びら。チンゲン菜の葉っぱ。蕪(根っこつき)。

花とチンゲン菜は、少し萎れてしまっていた。

「あああ、なんかシワシワになってきちゃってる〜。」

慌ててシワを伸ばしてみるが、何の意味もない。

「待て待て、お前触るな。」

コゴミが取り上げた。

「どうせ後で煎じるんだ。俺が加工しておいてやるよ。」

「加工？」

「ハーブと同じ要領でやりゃ、問題ないだろ。」

「コゴミ、頭良い〜！」

「まあな〜」

この、偉そうな態度さえなければ……とあやめは思った。

「とにかく、俺さまに任せておけ！」

とうとう、俺さまになってしまった。

(コゴミって……ナルシスト……?)

褒めたことを少し後悔しながら、あやめは一応言っておいた。

「よろしくね。お任せするわ。」

「あのバカ、褒める必要なんてないよ。」

コゴミが立ち去ったすぐあと、あやめに呼ばれてやってきたクーニャンが悪態をついた。

「聞こえてたんだ。」

「ああ、隣の部屋だからね。いいんだよ、昔っからあなんだから。」

「コゴミのハーブに対する熱意と自信は、尋常では有りませんからね。」

続いて部屋に入ってきたミヤシロも頷いた。

「それにしても、面白いものを見つけましたね。」

三人は、あやめの部屋にかかっていた一枚の絵を見つめた。コゴミが出て行った後、あやめはこの絵に気がついて、クーニャンを呼んだ。クーニャンと話をしていたミヤシロも一緒にやってきた。

玉ねぎのような形をしたものが描かれている。どうやら、地図のようである。左肩からSの字を描くように川が流れている。

「私たちは今、ここにいるんじゃないかい？」

クーニャンが中央に描かれた山を指差す。

「そうですね。おそらくそうでしょう。この池は、」

ミヤシロは右肩に描かれた池を指した。

「きっと蓮の花の咲いていた池でしょう。」

あやめとクーニャンも、同意見だった。

「『命の世界』は、タマネギ形なのね。」

あやめが呟くと、ミヤシロが笑った。

「タマネギ・・・ですか。あやめは面白い事を言いますね。」

「えっ。そう見えない？」

「見えないねえ。」

クーニャンが言った。

「これは、球根だろ。まあ、タマネギも似た様なもんだけどさ。」

「球根かぁ。」

「そうですね。そしてこの球根は間違いなく、私たちの世界の球根なのでしょうね。」

「そうに違いないね。」

ミヤシロとクーニャンは、何かが分かっている。あやめは、自分だけ分からないのがもどかしかった。

「ねえ、どういうこと？」

「蓮の池のヘドロ化。荒らされたチンゲン菜畑、南の荒れ野の影響で齧られた蕪畑。こんなことが続くのは、おかしくありませんか？」

「確かに。」

「つまり、この世界で起きている異変の影響で、私たちの世界もおかしくなっている。」

「関係あるの？」

「ありますよ。」

ミヤシロは上着の内ポケットから、きれいに折りたたまれた紙を取り出した。『花の世界』の地図だった。

「私たちの世界は、このように花の形をしています。そのため、こちらの世界では『花の世界』と呼ばれているのだと思っていました。でも、それだけではなかったのですね。『命の世界』は『花の世界』の、本当の球根なのでしょう。球根が腐れば、花は死にます。つまり、『命の世界』の異変は私たちの世界を壊してしまうのです。」

そこまで話して、ミヤシロはハッとした。では、『次の世界』はどうなるのだろうか？

「あやめ、『次の世界』はどんな形をしているのですか？」

「形？えーと・・・うーん・・・」

形、といわれてあやめは戸惑った。彼らの言う『次の世界』には、明確な形がないことに気がつく。

(日本だったら、弓状？でも世界っていったら、地球全部よね。球・・・かしら？ああ、でも宇宙は？宇宙は数に入るのかしら・・・？)

しばらく考えてみたが、答えが見つからない。仕方なく、こう答えた。

「『次の世界』は、とても広いから、形は分からないわ。」

「そうですか・・・では、なにか異常なことは起こっていませんでしたか？」

異常なこと。今までの流れからすると、異常気象のことだろう。あやめは、地球上で起こっている異常気象について考えた。しかし、地球で起こっていることの大部分は、人間が起こしたことだ。『命の世界』や『花の世界』で起こっているような、原因不明の自然災害とは、質が違うように感じた。

「異常気象は起こってるけど・・・」

「やはり、そうなのですね。」

「でも、全部、人間が起こしたことだから、違うと思う。」

「どういう事ですか？」

あやめは説明した。『次の世界』の異常気象と、その原因について。ミヤシロたちが石油とか電気とか、そういった文明を知らなかったことと、あやめが自然破壊などについて詳細な知識を持たなかったために、説明はあいまいで時間がかかったが、どうにか理解してもらえたようだった。

「信じられませんね。」

聞き終わってミヤシロはつぶやいた。

「あやめの言う、“便利なもの”がなくても、私たちは不自由なく暮らしていますが。」

「そうだね。便利の意味を、履き違えてるんじゃないかい？」

二人は首をかしげた。

「しかし、それらについて、あやめに質問しても仕方ありませんね。あやめが生まれるずっと前から、少しずつ『次の世界』は今のよう形になっていったのでしょうか。」

聡明なミヤシロは、質問を打ち切った。

「とりあえず、『次の世界』への影響を考えるのはやめましょう。まずは、こちらの2つの世界を元に戻す事です。

私は、レンにこの話をしてみます。その後、ミサキとコゴミにも伝えましょう。」

ミヤシロは二つの地図を持って、足早に部屋を出て行った。

「『次の世界』ってのは、思ってたような世界とは違うようだね。」

翌朝、クーニャンはあやめの髪を結びながら言った。

「思ってたって？」

「ずっと、あの世みたいな所かと思ってたよ。だって、今の世界の次だろう？」

ある意味、“次”なのかもしれないと、あやめは思った。あやめが見る限り、『花の世界』と『命の世界』は、少し前の『次の世界』と似ている部分が多かった。あくまでも、あやめが見た限りの話だが。

「だけど、あやめの話聞いた限りじゃ、ろくな世界じゃないようだね。あんたはともかく、アリウムお婆さんは相当大変だっただろうね。・・・ああ、頭動かさないでくれよ。」

「ご、ごめん。」

あやめは、うつむきかけていた頭を慌てて起こし、まっすぐ前を向いた。

「あやめ、もう『次の世界』には行かないで、ずっとこっちにいなよ。」

クーニャンの突然の提案に、あやめは驚いた。

「えっ？だって、向こうの世界に帰って・・・」

「はじめはそう思ってたよ。けどさ、私は結構、あんたのこと好きだよ。」

クーニャンは優しく笑った。

「はじめは、イエイオン様やミサキは、あやめとアリウムおばさんに会うことばかり考えていて、ワトソニアのことを考えていない、ワトソニアを見捨てるつもりなんだって思ったよ。私だけじゃなく、コゴミや兄さんもね。・・・でも、違った。ミサキはちゃんと、ワトソニアのことも考えていた。あやめは・・・正直、何がなんだか分からないまま着いてきちまったんじゃないかい？でも、あやめと一緒に居て、頑張ってる蕪を掘ってる姿なんかを見るにつけ、思うんだよ。結構、良い奴なんじゃないかってね。」

あやめは、何も言えなかった。

「今は、あやめもワトソニアも大切だと思ってるよ。あやめの存在が、ワトソニアを殺そうとしているとは思ってないよ。出来れば、あやめとも、本当に仲良くなりたいたいよ。」

クーニャンは、少し恥ずかしそうにうつむいた。

「あんたは、ワトソニアほどお嬢さんじゃないしね。」

「お嬢さん・・・？」

「さあ！出来たよ。」

クーニャンは伸びをして立ち上がった。鏡の中には、いつもどおりのお団子頭にされたあやめが映っている。

「ちょっとしゃべりすぎたね。・・・そうだ、コゴミのハンドクリームはまだ持ってるかい？そう、それだよ。足に塗っておきな。疲れにくくなるから。」

立ち去り際に、クーニャンは頭から珊瑚のような玉のついたかんざしを一つ抜いた。

「あげるよ。」

あやめの、頭のとっぺんに置かれた団子にそっと挿す。

「えっ、良いの？」

「良いんだよ。私はもう一本持ってるからね。」

クーニャンはあやめの顔を見ずに部屋のドアに手を掛け、出て行った。

「キューウ？」

部屋の隅で静かにしていたキュウリが、あやめに駆け寄る。あやめは、言われたとおり、ハンドクリームを足に擦り込む。

(私も、もっと仲良くなりたいたいよ・・・)

言えなかった言葉が、胸の中でくすぶっている。

覚悟して向かった西の畑では、なんの異変も起きていなかった。

「なんともないみたいだね。」

ミサキはキャベツの葉を裏返したり、根を調べたりしてから、嬉しそうに言った。

「ではでは、さっそく収穫です～。あはは。」

レンも嬉しそうだ。

「じゃあ、あやめ、収穫だね。ええと・・・葉っぱが柔らかいものを取ればいいんだっけ？」

「それから、タケノコ型のもですよ～。間違えないようにして下さいね。あはは。」

畑で作業していた農夫に聞いた所、今年のキャベツは大豊作らしい。1つといわず、いくらでも持っていけ、との事であった。

「では、さっそく・・・」

あやめは腕まくりをして畑に入った。蕪のように、根を掘り出す必要がないし、抜き続ける必要も無い。

(楽勝、楽勝！・・・タケノコ型のやつよね・・・タケノコ型・・・タケノコ・・・)

一つ一つ、形を確認して行く。あやめは、しばらく畑の中を動き回った。

「あやめ、どうしたの？」

ミサキが横にやってきた。

「・・・ない。」

「え？」

「タケノコ型のキャベツなんて、ないよ～。」

「ええ!？」

ミサキは慌てて、隣の畑で作業している農夫の所へ走って行った。なにやら話をしている。再び、あやめの元に戻った
ミサキは、少し残念そうな顔をしていた。

「今年は、タケノコ型のキャベツはあまり生えてないらしいよ。」

「今年ということは、例年ならばあるという事ですか？」

ミヤシロたちが異変に気付きやってきた。ミサキの代わりにレンが答える。

「はい～。ここでは、キャベツはタケノコ型と決まっています。時々、丸いものが出回りますが、滅多にありません。
一体、どうしたのでしょうか？」

「日照不足だって。こればかりは、僕達もどうしてあげようもないね。」

ミサキが言うと、みんな顔いた。ミヤシロが冷静に言う。

「ともかく、タケノコ型のものを探すしかありませんね。」

みんなは、見渡す限り続いている広大なキャベツ畑を見回した。

「この中からかよ！」

コゴミが頭を抱えて叫んだ。

「手分けして探すしかないね。」

クーニャンもため息をついた。

タケノコ型キャベツを探し始めて、1時間ほど経った。キャベツを探すだけなので、たいした作業ではないが、腰がかがめて歩き回るため、背中から腰にかけての部分と、太ももがひどく張る。連日の農作業(?)の疲れもあるようだ。

(痛いなあ・・・)

あやめは、腰に手を当てて思い切り伸びをしながら思った。足元で、キュウリが呑気にキャベツの葉を齧っているのが見える。

「キュウちゃんは良いわねえ。私は、疲れちゃったわよ。」

ぐるっと周囲を見たが、人の姿は見えない。みんな、かがんで作業しているのだろう。仕方なくあやめは、再びキャベツ探しを始めた。

黙々と作業していると、頭がボーっとしてくる。ボーっとしながらも、色んな事がとりとめもなく頭に浮かんでくる。

(こんな、野菜ばかり集めて、本当に花が生き返るのかしら?・・・ワトソニアも元気になるのかな・・・ああ、私、本当に家に帰れるのかな。さっちゃん元気かな・・・そうだ、最近クーニャンがコゴミに冷たいけど、どうしてかな。好きなんじゃないのかな?でも、レンとも仲良いし・・・でもでも、あんなジャガイモみたいな人を好きになるってことはないよね・・・そうだ、キュウちゃんはキャベツ好きなのかな。さっきからかじってるもんねえ・・・ああ、腰が痛いなあ)

あやめは、腰を軽く叩いた。でも、そんな程度のことでは、当然ながら腰の痛みは引かなかった。

「おいおい、まるでバアサンだな。」

「!」

いつの間にやって来たのか、コゴミが横にしゃがんでいた。

「どうしたの?キャベツは?」

「疲れちゃったから、ちょっとサボり。他の奴のところに行くとうるさく言われるだろうからさ。」

「わ、私だって注意するわよ。」

「勘弁してくれよ。」

コゴミは首を伸ばして辺りをちらっと見回して、こっそり笑った。

「大丈夫、大丈夫。まだ、みんな気付いてないから。」

「・・・そういう問題じゃないでしょ。」

「いいんだよ。そうだ・・・」

コゴミはポケットから、クルミを取り出した。クルミはきれいに二つに割れて、中にはクリーム状のものが入っていた。

「お前は一番弱そうだからな。ほらよ。」

コゴミは突然、あやめの背中のシャツを捲ると、あやめの腰にクリームを塗りたくった。

「きゃあ！」

「じっとしてろよ。今、塗っとけばそんなにひどいことにはならねえよ。」

「なに？なにしてるの？」

「ハーブで作ったクリームだ。前にあげたのより、痛みに効く。毎日こんな作業してたら、体が参っちゃうだろ？」

クリームを塗られると、腰がすうっと冷たくなるように感じだ。少し、張りも取れるような気がする。

腰にクリームを塗り終わると、コゴミはクルミをあやめの手に乗せた。

「残りは後で、腿に塗っておきな。・・さて、と。俺もキャベツ探しに戻るかな。」

「え？もう？」

「ミサキに見つかったら、怒られるからなあ〜。」

コゴミは軽くウインクした。

(コゴミ・・・クリームのために来てくれたんだ・・・)

あやめはようやく気がついた。

「ありがとう。コゴミ。」

「何がだよ？じゃあ、また後でな。」

コゴミはちょっと照れくさそうにあやめを見ると、音も立てずに立ち去った。

(優しいな。)

あやめは、手のひらの上にあるクルミを見た。

(こんなの、いつ作ったんだろ。)

クーニャンがコゴミを好きになるのも、なんだか分かるような気がした。

「タケノコ型、あったよー！」

遠くから、ミサキの声がした。畑のあちこちから、歓声ともため息とも取れる声があがった。

「あやめ！こっちだよ！さあ、収穫しよう！」

ミサキがあやめに向かって、手を振る。

「いやいや、良かったです〜。ほかのキャベツも幾つか頂いていきましょか。家に帰って、美味しいポトフにでもしましょ。」

レンはウキウキとした声で言った。

少し距離があったので、レンの家に着いたときには日が暮れて、辺りは真っ暗になっていた。

「すぐに夕飯にしますから。」

レンはそう言って、休む暇もなく夕飯の仕度に取り掛かった。

夕飯の後、コゴミが湧かしてくれた風呂に入りさっぱりしたあやめは、嬉しそうにキャベツを齧るキュウリを横目に見ながら、ベッドでグッタリしていた。

(あと2つかぁ・・・)

自分が、実は異世界のお姫様で、双子と国を救うための冒険に出るなんて、ちょっと素敵・・・なんて思ったりもしたが、連日の農作業で“素敵な冒険”も泥まみれ。思惑が外れてしまった。所詮、自分がヒロインになれると思ったのが間違いだったのだ。

(蕪を掘り当てるとか、キャベツを収穫するお姫様なんて、お話にもなんないわよ・・・だいたい・・・王子様は売り切れ中だし・・・)

ミサキの笑顔が浮かんだ。なんだかやりきれなくなって、寝返りを打つ。

「キュウ～」

いつの間にか、キュウリはキャベツを食べ終えてあやめの顔を覗き込んでいた。

「キュウちゃん！いっぱい食べたの？よかったねえ。」

拾われてきた時は汚い姿だったキュウリだったが、毎日体を拭いてもらい食事も与えられて、今では見違えるほど良い毛艶になり、とても可愛らしい。

「キュ！」

キュウリはあやめの目の前で、クルクル回転して見せた。

「わぁ、キュウちゃん、ダンスも上手ねえ。」

あやめに答えるかのように、キュウリはあやめの頬に頬摺りした。

「あやめの調子はどうですか？」

ミヤシロは、クーニャンに静かに訊ねた。

「ちょっと、疲れているみたいだね。部屋で寝ているみたいだよ。」

「そうですね。見ず知らずの私達と旅に出た上、連日動き回っていますから。」

ミヤシロは少し、ため息をついた。

「次は、南の峠でしたね？」

「そうです〜。」

ミヤシロとクーニャンの前に、お茶を出しながらレンが言った。

「夜明け前に収穫しないといけませんから、明日は無理でしょね。」

「南の峠は、遠いのでしょうか？」

「そうですね。あやめのあるく速度を考えると、丸一日かかりますね。峠の近くで野宿することになります。あの辺りには誰も住んでないんです。」

「そうですか。それはきついですね。明日は一日、ここで休みを取りましょうか。」

ミヤシロはにっこり笑った。

「そうだね、兄さん。私としても、そうしてもらいたいよ。さすがに、ちょっと疲れたね。」

クーニャンが肩を押さえて首をひねった。

「クーニャン、肩凝りですか？」

レンが尋ねる。

「ちょっとね。」

「ではでは、ワタシがちょっと揉んであげましょ。こう見えて、マッサージは得意なんです。あはは。」

「いいよ。そんなに凝ってるわけじゃないから・・・」

クーニャンの答えには耳を貸さず、レンは後ろに回って肩を揉み始めた。

「結構、凝ってますねえ。あはは。」

「いって言うのに・・・でも、上手いね。気持ちいいよ。」

クーニャンは嬉しそうに言った。

「それは良いですね。では、私はミサキとちょっと話してきますので・・・」

ミヤシロはそっと席を立った。

レンは、優しくクーニャンの肩を揉み続けた。

「ほんとに気持ちいいねえ・・・レン、どこで覚えたんだい？」

クーニャンが、優しい声で聞く。

「小さい頃、よく父親の肩を揉んでまして。独学です～。あはは。」

「そうかい・・・ところで、聞きたいことがあったんだ。」

「なんですか？」

「昔は、私たちの世界からこっちに、王の子供が来てたって言ってたね？どうして、来なくなったか、知ってるのかい？」

「・・・」

レンの手が、一瞬止まった。その後、何事もなかったように肩を揉み続けるレンの手の力が、ほんの少し強くなっているのをクーニャンは感じた。

「だって、不自然じゃないか。何百年も訪れる者がいなかったという割りに、私たちがこっちに来た時には、レンがすぐ迎えに来ただろう？それだけ、明確な役割があるのになんで行き来しなくなったんだい？」

クーニャンの問いに、レンは答えなかった。

「どうして、答えないんだい？」

「いやいや、ワタシは何も聞いてないので・・・」

レンは笑って誤魔化した。

「本当かい？何か、知ってるんだろう？」

レンは、クーニャンの肩から手を離し、クーニャンの横の椅子に腰を下ろした。

「そうですね。黙っているつもりでしたが・・・お話ししましょう。あなたには、知っててもらいたい。」

「それは、みんなに聞かせても良いのかい？」

「・・・いえ。まだ、クーニャンだけで。」

レンは、静かに語り始めた。

『命の世界』に、王の子供がやってきた。真っ黒な髪を肩まで伸ばし、瞳はブルー。すらっとした好青年だ。トンネルをくぐりぬけてすぐに、青く広がる空を嬉しそうに眺めた。

「ここが、命の世界か。」

花の世界と同じように、ここにも大きな空と、青々と茂る草原がある。

「気持ち良い所だな。さあ、メラスフェルラを探しに行こうか。」

王子は、一人の伴を連れていた。金髪碧眼で長身のハンサムだが、いたって物静かな男だった。

「話に聞く、案内の者はまだ来ていないようですね。」

伴の男は辺りを見回した。

「あまり動き回って、すれ違いになってもいけません。しばらく待ちましょう。・・・あの木の陰で、お休みください。」

二人は近くにあった大きな木の根に腰をかけて、一息ついた。

しばらく、待つ。

すると、トンネルの入口の方から、小さな声が聞こえてきた。

「あら、まだ着いてらっしゃらないのかしら？・・・それとも、もうどこかへ？」

見ると、茶色い髪の背の低い女の子がトンネルを一生懸命覗き込んでいる。

「あの子供が、案内人だろうか？」

子供に見えるほど背は低かったが子供ではなく、彼女が『命の世界』での案内人であった。

王子は立ち上がり、彼女を見た。彼女も、彼を見た。

それで、決まりだった。二人はひと目で恋に落ちた。

メラスフェルラは元気に育っていたので、王子の目的はすぐに達成された。王子はメラスフェルラを持って『花の世界』に帰ったが、彼女が忘れられず、周囲の反対を押し切って『命の世界』へ戻り彼女と結婚した。『花の世界』の王は激怒し、“命の扉”の封鎖を命じた。

「今後一切、『命の世界』との行き来を禁ずる。『命の世界』について口にするのも許さん。」

そして、対になる扉“次の世界への扉”も同時に封鎖された。

「じつは・・・」

レンは、最後に、言いにくそうに言った。

「王子さんが好きになって結婚した相手というのが・・・ワタシの母さまなんです。」

「えっ！」

さすがに、クーニャンも驚いた。

「だって、254年前って・・・」

「はい～。私たちは大体700歳くらいまで生きます。母さまが父さまに出会ったのが丁度192歳の時です。クーニャンたちの感覚で言うと18、19くらいですかねえ。」

「じゃあ、あんたは・・・『花の世界』の王家の親戚になるのかい？」

「そういうことになりますねえ。あはは。」

「あはは、じゃないよ・・・」

「ですから、まだみなさんにはヒミツに・・・ね？」

レンはクーニャンを見つめた。顔はいつも通りの笑顔だが、目は威圧的だった。

「う、うん。分かったよ。」

視線に負けてクーニャンは頷く。

「ところで・・・レンはいったい、何歳なんだい？」

「それはヒミツです。あはは。」

レンは楽しそうに笑って立ち上がり、テーブル上のカップを手にして台所へ向かった。カップを洗っているのか、水の音がする。

「ヒミツ・・・か。」

クーニャンはそっと呟いた。

「そうだ、とっておきのワインがあるんですよ。一緒にどうでしょ？」

レンの明るい声が響き、あっという間にテーブルにグラスが並べられる。

「さあさあ、今夜はのんびり行きましょ！」

グラスの音に、ミヤシロやコゴミも集まってきた。夜は、まだ長い。

一日、ゆっくり休むように言われたものの、あやめは特にやることもなく部屋の窓から外をぼうっと眺めていた。唯一の遊び相手のキュウリは、さっきキャベツを齧ってからは死んだように眠り続けている。

(つまんないなあ・・・)

クーニャンは二日酔いとかで、今日は髪も結ってもらえなかった。ミヤシロやコゴミも、時々青ざめた顔をして部屋から出て来て水を飲むが、あやめに構う余裕はなさそうだった。

(だいたい、二日酔いって何よ。)

あやめは考える。

(クーニャンは十七歳でしょ、ミヤシロは確か十九って言ってた。未成年のくせに・・・あっ、こっちの世界では、未成年とか関係ないのかな？・・・ひょっとして結婚とかも早いのかなあ・・・そういえば、他の人のお母さんより、私のママって若いよね・・・)

ノックの音がした。

(誰か来た！)

あやめは急いでドアを開ける。

「やあ。いい天気だから、ちょっと外に出てみない？」

爽やかな笑顔、ミサキが立っていた。

「やっぱり、出てきて正解だったね。」

あやめの歩調に合わせて、ゆっくりと歩きながらミサキが空を見上げた。昨夜、ミサキも相当飲んだらしいが、二日酔いの気配は全くない。

「今日も気持ちいい天気だね。」

「うん。やっぱり、家の中より外の方が良い気持ち。」

ちょっと立ち止まって、あやめは思い切り息を吸い込んだ。

「ふうー。」

「ははは。可愛いなあ、あやめは。」

「えっ・・・そ、そんなこと・・・」

ミサキは、照れくさい事でも平気で言う。あやめの方が照れてしまって、頭が真っ白になり、何を言ったらいいのか分からなくなる。顔が、熱くなる。

「この山の上に、メラスフェルラがあるんだね。」

辺り一面に広がる花畑は、レンの家から山の頂上まで続く。家から一〇〇メートルほどは平坦だが、その先は急斜面に変わる。

「レンは、どうやって頂上まで登ってるんだろうね。」

ミサキとあやめは、山の上のほうを眺める。どこまでも、どこまでも花。

「道みたいなものは、見当たらないね。」

しばらく辺りを歩き回った後、ミサキは諦めたように言った。それから、花畑の中にぽつんと見える大きな岩を指差した。

「あそこまで行ってみようか。そしたら、ちょっと休憩しよう。」

「うん。」

岩の上は少し平らになっていて、人が4、5人座れる位のスペースがあった。あやめはミサキに手伝ってもらってその上に上がり、足を投げ出して座った。

「きれいだねえ〜。」

思わず、ため息が漏れる。花畑というよりも、花の海。花の洪水。どんな映像で見るよりも、どんな写真で見るよりも美しい景色が広がっていた。

「ねえ、北海道の花畑も、こんな感じに見えるのかな？テレビでしか見たことないけど。」

思わず、口に出る。

「ホッカイドウ？」

「あ・・・ごめん。」

「どうして謝るの？」

うつむいてしまったあやめの顔を、ミサキは笑顔で見つめた。横からの視線を感じて、あやめはまた赤面した。

「ホッカイドウって、あやめの住んでる所にあるの？僕はちょっとしか居なかったから、どこにあるのか分からなかったな。」

「私の住んでるところとは違うの。ずっと遠くなのよ。」

あやめの住んでいるのは、神奈川県の間静な住宅街だった。北海道に行くには、電車に乗って、飛行機に乗って、長い旅をしなければならない。でも、それをどうやってミサキに伝えたら良いだろう。花の世界には、電車も飛行機も存在しないのだ。そして、歩いていけない場所もない。

「島って・・・わかんないよね？」

「シマ？縞なら知ってるよ。」

「えっ。ほんと？海ないよね？でも分かるの？」

「ウミ？？濃のこと？怪我した時の？」

どうやら分かっていないようだと思っただけであやめは思った。細かい説明は省く事にした。

「えーとね・・・北海道は、ここでいう『次の世界』の中にある場所なんだけど、私が住んでいたところからはとても遠い所なの。歩いては行けないくらい遠い所なの。」

「歩いていけない？どうして？」

「あの、ほら・・・池は分かるよね。池がものすごく大きくなったようなものを“海”って言うんだけど、海を渡らないと行けないのよ。」

「ボートに乗ればいいんじゃない？」

ボートなんて例えで良いのだろうか、とあやめは一瞬迷った。

(でもまあ、似た様なものか・・・な？)

説明しきれないことは先日のミヤシロとの話で分かっていたので、あやめはボートでよい事にした。

「そうなの。たくさん歩いて、ボートに乗って、また歩いていくのよ。何ヶ月もかかると思うわ・・・多分ね。」

「へえ～、『次の世界』って、随分大きいんだね。この間行った時は、小さな家がぎっしり並んでてびっくりしたんだけど。花畑もあるんだね。どんなところだろう、行ってみたいなあ。」

「じゃあ、この旅が終わったら、一緒に北海道行く？」

「ホッカイドウかぁ・・・」

ミサキは腕を伸ばして、岩の上に体を倒した。

(一緒に行く！？すごいこと言ってしまった。)

あやめは今更ながら自分の言ったことに驚き、また赤面。

「何ヶ月もかけて、花畑見に行くって言うのも、良いね。」

ミサキは気持ちよさそうに空を見ている。

「ミサキ・・・」

「ん？」

「あのね、花の世界に帰ったら、ミサキは・・・」

ワトソニアと結婚するのかと、言いかけてあやめは口をつぐんだ。

(いけない。これは聞いたらダメだ。)

「帰ったらなに？」

「ううん。ごめん、なんでもないの。」

ミサキは体を起こしてあやめを見ている。

「どうしたの？・・・ああ！」

ミサキは何か思いついたようだった。

「母さんのこと？心配しないで。この旅が終わったら、母さんとあやめが次の世界に戻れるようにするよ。イエイオン様やイキシア様は反対されるだろうけど、僕が説得してみせるよ。」

そんなことじゃないのに。

「あやめも、早く元の生活に戻りたいよね。僕から見たら未知の世界だけど、あやめにとっては次の世界が・・・あれ？あやめ！どうしたの？」

あやめは岩を飛び降りて走り出した。

(ミサキのバカ！)

胸が苦しい。ミサキは、あやめが『次の世界』に帰っていくことについて、なんとも思っていないのだと、あやめは感じた。

(ワトソニアさえ元気になれば、私なんて居なくてもいいんだ・・・)

花をかき分けて無我夢中で走った。

「おい！」

ミサキではない声でした。

「おい！落ち着けよ！」

肩を捕まれ、その勢いで後ろに尻餅を着いてしまった。

「いてて・・・」

「コゴミ？」

「ったく・・・なんて顔してんだよ。」

指摘されてはじめて、涙で顔がぐちゃぐちゃになっている事に気がつく。

「だって・・・」

涙が止まらないあやめを前に、コゴミは大きくため息をついた。

「だから言っただろう。」

「別に・・・そんなんじゃ・・・」

「じゃあ、何で泣いてんだよ。」

「コ、コゴミは何でここに居るのよ。」

「俺は・・・」

コゴミはシャツの襟を広げて見せた。中から、キュウリが小さい顔を出した。

「キュウ！」

「キュウちゃん！」

キュウリはコゴミの胸から、ひらりとあやめの肩に飛び移った。

「キュキュ！」

嬉しそうにクルクル回る。

「コイツが部屋でキューキュー鳴いてうるさいから、お前を探しに来たんだよ。」

「そうだったの・・・」

「あんまり、泣くな。キュウリも心配するぞ。」

コゴミは優しく、あやめの頭を撫でた。

「うん、うん。ごめんね、コゴミ。ごめんね、キュウちゃん。」

「そのひどい顔が元に戻るまで一緒に居てやるから、もう、泣くなよ。」

コゴミの言葉に、あやめは更に泣けてしまった。うんうん、と頷きながら涙を拭い顔を上げると、いつの間にか空いっぱい大きな雲が広がっているのが見えた。雲の間にぽっかりと開いた隙間から夕方の光がこぼれている。

天使の梯子。いつか写真で見たことがある。雲間から、今にも天使が降りてきそうな美しい光。心洗われる光景を目の当たりにして、あやめは涙を忘れた。

(天使っていつでも、知らないんだろうな。)

コゴミに声をかけるのを諦めて、あやめは口をつぐんだまま空を見つめ続けた。

朝から、コゴミは最高に機嫌が良かった。

「さあ、行くぞ！南の峠へ！」

珍しく、レンと共に先頭に立って歩き出した。

「彼は、ハーブがとても好きですが、その次に好きなのが“コゴミ”なんですよ。」

ミヤシロがそっと、あやめに囁いた。

「煮付けにして食べるのが最高、といつも言っています。」

「山菜の煮付け・・・やっぱり、おじいさんみたいね。」

「おじいさんですか。それは面白い・・・しかし、コゴミには言えませんね。」

「うん。内緒だね。」

あやめは、ミヤシロと声を出して笑った。

「なんだ？そこ、何を笑ってんだよ！早く行くぞ！」

コゴミが振り返って、二人を急かす。

「レンの話では、南の峠には質の良い山菜がたくさん生えているそうですよ。今夜は、コゴミの山菜料理が楽しみです
ね。・・・もっとも、何も異変がなければですが。」

「山菜料理！？コゴミは料理も得意なの？」

「ハーブと、山菜に限ってですけどね。」

ミヤシロは気持ちよさそうに笑った。

「まだお会いできないの？」

ワトソニアはイキシアをじっと見つめた。

「以前は、毎日会いに来てくれていたのに・・・コゴミも、もう6日も姿を見せません。」

「ワトソニア、みんなまだ忙しいのです。」

イキシアはワトソニアの髪をそっと撫でた。

「雨は、降っているじゃありませんか。儀式は終わったのでしょうか？」

静かな雨が、何日も降り続けている。渴き切っていた大地は、少しずつ潤いを取り戻していつている。

「こんな雨、私には降らせることが出来ませんでしたわ。」

窓の外に目をやり、ワトソニアは小さく呟いた。

「やはり、フリージアの方が、王女にふさわしいという事でしょうか。」

「ワトソニア、そんな事はありませんよ。」

「本当は・・・捨てられるべきだったのは私ではないかと・・・」

「何を言うの！」

「みんな、そう思っているのではなくて？フリージアが居るから、だからみんな私のことは忘れてしまったのでは・・・」

」

どんなに辛い時でも、流した事のない涙をワトソニアは見せた。

「ワトソニア、そんな事はない。」

イエイオンが部屋の入口に来ていた。

「みんなお前を気遣っているのだ。安静にして、早く良くなって欲しいと願っているのはみな同じだ。」

「お父様、本当でしょうか？」

「嘘を言ってどうする。それに、」

イエイオンはベッドのすぐ横に来て跪き、ワトソニアの手を取った。

「お前は、私の大事な娘だ。それは、フリージアが現れても変わらない。変わるわけがないだろう。」

「お父様、ではお教えてください。」

「なんだ？」

「フリージア達は、『命の世界』に行ったのではありませんか？」

イエイオンの手から、力が抜けた。

「何を言うのだ？」

「行ったのですね。」

ワトソニアは、イエイオンの手を強く握り締めた。

「そんなことはない。大体、何のために行くのだ？」

「この世界を救うため、私の命を救うため。違いますか？」

「お前、何を言っているのだ？そ、そうか。毎日寝ていて退屈だから、そんな事を考えたんだな。」

イエイオンは手を離そうとしたが、ワトソニアは力を入れて離さなかった。病人とは思えない程の、強い力だった。

「いいえ。」

ワトソニアは側で使えていた若い娘を見た。その娘は視線に気付き、イエイオンの前に進み出た。

「申し訳ございません。問い詰められて、お話してしまいました・・・」

娘は、ひれ伏さんばかりに謝る。

イエイオンは、放心したように立ち上がった。しばらく無言で立ち尽くしていたが、娘を見つめて静かに言った。

「もうよい。お前をとがめはせん。いずれ・・・分かる事であった。」

南の峠は思ったよりも遠く、辿り着いた時には日が暮れて真っ暗になってしまっていた。

「あー、今日も随分歩いたね。すっかりくたびれちゃったよ。」

クーニャンは足を揉みながら首を回した。

「夜明け前に摘めば良いんだろ？これからゆっくりして、一眠りしたら出発だな。夕飯はどうする？」

コゴミは積み上げた木に火を点けながら、レンを見た。

「はいはい〜。ちゃんと準備してきてますよ〜。」

背負ってきた大きなリュックサックの中から、次から次へと色んなものを取り出した。お鍋、お皿、カップ、パン、キャベツ……。

「お前、これ全部背負ってきたの？」

「はいはい。カバンが小さかったので、これだけです。」

「これだけ持ってくれば十分だよ。まったく、レンの体力には負けるねえ。」

クーニャンが呆れた声を出した。

「たいしたことありません〜。あれ、あやめは？」

レンは、クルクルと頭を動かして、あやめを探した。あやめは少し離れたところにある木の根に腰を下ろして、じっとしていた。

「どうしたの？」

ミサキがあやめの横に腰を下ろしながら尋ねた。

「気分でも悪い？」

「ちょっと、疲れただけ……」

あやめは返事をするのがやっとだった。体中重くてだるい。

「なんか、顔も赤いですね。」

ミヤシロも様子を見に来た。

「どれどれ。」

あやめの額を、ミサキは手で触って体温を確認する。

「これは……熱があるかもしれないね。」

「熱ですか。」

ミヤシロも額を確認する。

「有りそうですね。」

ミヤシロは毛布を広げ、急いで寝床をこしらえた。ミサキがあやめを抱きかかえてそこにそっと寝かせる。

「ごめんなさい・・・」

か細い声であやめは謝った。朝から、体中だるかった。昨夜、ミサキのことを考えてうまく眠れなかったせいかもしれない。

「どうして謝るの？今夜はゆっくり休んで。」

ミサキは優しい笑顔で言った。

「僕達、もうちょっと気をつけて旅をするべきだったね。ごめんね。」

「スープが出来ましたよ。あやめ、スープを少し食べられますか？食べましょ、ね？」

レンが声をかけてきたが、あやめには返事をする力が残っていなかった。クーニャンがスープを持ってきて、あやめの口にそっと流し込んだ。

「ちょっとだけでも、食べるんだね。でないと、本当に体が参っちゃうよ。・・・今、コゴミが薬草を探しに行ってるからね。」

クーニャンの口調も、いつになく優しい。

(ちゃんと寝ておけば、こんなことにならなかったかも・・・)

自分に腹が立つ。スープの温かさが、弱ったあやめの心を更に弱らせる。

「クーニャン・・・ごめんね。」

「何言ってるんだい。」

目が涙で滲んで、クーニャンの顔が良く見えなくなる。

「さあ、スープはもう良いね。コゴミ、薬は出来たかい？」

「おう。」

クーニャンとコゴミが入れ替わる。

「まったくお前は、世話が焼けるなあ。・・・ほら、ちょっと苦いけど、これを飲め。疲れが取れるし、熱も下がるだろう。」

コゴミが、あやめの口の中にすりつぶした苦い草を入れてきた。

「ごほっ。」

あまりの苦さにむせかえす。

「これも飲め。ぐっ、と一気に。」

ミントのような香りのする、すっきりしたお茶で無理やり流し込んだ。

「よし。あとはゆっくり寝ろ。」

嬉しかった。

「コゴミって、何でも出来ちゃうんだね。」

「まあな。だから安心しろ。あやめの世話くらい簡単なもんだ。」

「偉そうねえ・・・」

口の悪いコゴミでさえ、気を使ってきている・・・そう思ったら堪えていた涙がポロポロとこぼれ落ちてしまった。

「お、おい、どうした！」

慌てるコゴミ。

「コゴミ！何を言ったんですか！」

いつもは物静かなミヤシロがコゴミのシャツの襟を後ろから掴んだ。

「え？俺？何も言ってないぞ。」

「静かに寝かせてあげないといけませんよ！」

「だから、俺は薬草をあげただけで・・・」

「なんか言ったに決まってるねえ。」

クーニャンは腕組みをして大きく頷いた。

「さてよ、俺、何も言ってねえよ。な？あやめ。」

コゴミは慌て、困ったような目であやめを見た。

(可愛い・・・)

重たくなっていた気持ちが、ふっと軽くなった。

「知らない。」

「えっ？」

「やはり、コゴミが何か言ったんですね。さ、コゴミはもう引っ込んでください。」

「ま、さてよ、おい！あやめ！」

ミヤシロはコゴミの襟を掴んだまま、ずるずると引きずって行った。

「ゆっくり眠ってね。」

ミサキがそっと声をかけた。

(そういえば、昨日もコゴミの前で泣いてしまったんだっただけ・・・)

昨日見た空を思い出す。ミサキと見た青い空。コゴミと見た天使の梯子。

「キュウ～」

キュウリが心配そうに、あやめの顔を覗き込んでいた。

(休ちゃん、心配しないで。私は大丈夫だよ。)

あやめは少し微笑んだ。それを見て安心したのか、キュウリはあやめの側でキャベツの芯をせっせと齧り始めた

。

あやめが眠ったのを確認して、レンは小声で話し始めた。

「明日の朝ですが、どうしましょ。」

「結構、熱が高いようでした。明日の朝もどんな調子かわかりませんね。」

ミヤシロが慎重に言った。

「とはいえ、野宿を何日も続けるのも負担になるでしょう。多少無理してでもコゴミを収穫し、レンの家につれて帰って休ませた方が良くと思います。」

「でも、自分じゃ歩けないだろう。」

クーニャンが言った。

「ここまで来るのに、丸一日かかったんだよ。あやめを背負っていくのはかなりきついよ。」

「確かに、少々厳しいですね。しかし、交代で背負ってどうにか・・・」

「そうだね。早くゆっくり寝かせてあげたいからね。」

ミサキも頷いた。

「よし、じゃあ、朝までにコゴミは俺が探しておくぜ。山菜探しは俺の得意分野だからな。さあ、俺たちも早めに寝ておこう。」

コゴミは張り切って言った。

最後にミヤシロが独り言のように、呟いた。

「しかし、こうして寝ているあやめを見ると、ワトソニアを思い出してしまいますね。」

夜明けまでたっぷり時間があっても関わらず、コゴミはまだ、“コゴミ”を見つけられずにいた。

「ちくしょう・・・ちっとも生えてないじゃないか。」

『あちこちに生えてますから～、探すまでもないと思います～。あはは。』

レンの軽い笑い声を思い出し、コゴミはとても気分が悪くなった。

「あいつ、適当なこと言いやがって・・・」

山全体は広いが、峠はそれほど広くはない。二十メートル四方ほどの空間を、コゴミは右に左に動き回る。しかも、しゃがみこんで。

「いくら山菜が好きだからっていったってよお。」

立ち上がって腰を伸ばす。十メートルほど向こうに、消えかけた焚火を囲んで眠る五人の姿がうっすらと見える。

「いいよなあ、あいつらは・・・」

早く見つけないと、夜が明けてしまう。コゴミはすぐに作業に戻った。

青ざめたあやめの顔が浮かぶ。

(ワトソニア、少しは良くなってるのかな。)

あやめは、良く笑い、良く泣き、良く食べる。ワトソニアとは、正反対だ。

(昔は、あいつも良く笑ってたけどなあ・・・)

しかしコゴミは、ベッドの中から見せるワトソニアのか細い笑顔しか思い出せなかった。

(元気にしてやらなくっちゃな・・・)

コゴミは、目を皿のようにして、草を掻き分け進んだ。

東の空が、少しずつ明るくなって来ていた。コゴミは峠を隅から隅まで調べたが、生えているのはワラビやゼンマイばかりで、コゴミは見つからなかった。

(参ったな・・・)

とぼとぼと焚火の側に戻り、消えかけた焚火に薪を足した。まだ、誰も起きては居ない。

「こいつも・・・気持ち良さそうに寝てるな・・・」

コゴミは、眠っているあやめの顔を覗き込んだ。

(そういえば・・・キュウリはどこ行った?)

あやめの顔の横で眠っていたキュウリの姿が見えなかった。

「キュウリ！」

かすれた小声でコゴミは呼んだ。

「キュウ」

すぐ近くで声がした。あやめの頭上五十センチほどの場所で、キュウリが首をかしげてコゴミを見ていた。手に、何か掴んでいる。

「お前、気が早いな。もう朝ごはんか・・・おおっ！」

コゴミは思わず大声を出した。慌ててキュウリを押さえつける。

「食うなよ！」

キュウリが手にしていたのは、探していた“コゴミ”だった。

(こんなところにあったか・・・)

峠中探し回っていた自分が、可笑しくなる。空はどんどん明るくなっていく。東の空から、うっすらとオレンジ色の光が射し始めた。

「おい。あやめ、起きろ。コゴミを収穫するぞ。」

コゴミはキュウリをしっかりと捕まえたまま、あやめの肩をそっと叩いた。

南の峠からレンの家に運び込まれたあやめが、目を覚ましたのは3日後の朝だった。

「あれ・・・？」

コゴミにたたき起こされ、頭上に生えていた“コゴミ”を収穫した後の記憶が、全くなかった。天井や壁を見てようやく、レンの家に居る事に気がつく。

(私・・・どうしてここに居るんだろ。)

ゆっくり体を起こしてみると、節々が痛い。お腹が、キュウと鳴る。

(お腹すいたなあ・・・)

あやめはベッドから降り、ドアへ向かった。ドアノブに手を掛けたところで、ちょっとためらった。なんだか、キマリが悪い。

「ちょっと様子を見てくるよ。」

廊下からクーニャンの声が聞こえた。あやめは慌てて、ベッドに飛び込む。

「あやめ・・・」

クーニャンは静かにドアを開け、あやめの顔を覗き込んだ。目が合う。

「あやめ！起きたのかい！」

柄にもなく、クーニャンは優しい顔をして、涙ぐんだ。

「もう・・・このままワトソニアみたいになっちまうかと思ったよ・・・」

「クーニャン、私・・・」

「いいからいいから、まだゆっくりしてな。細かい事は気にしない事だよ。お腹空いてないかい？」

「すごく。ペコペコ。」

「そうだろう。もう3日も食べてないんだ。」

「3日!？」

「ああ、その辺の話は後でするよ。とにかく、何か食べるもの持ってくるよ。」

クーニャンは足早に部屋を出て行った。

「レン！あやめが起きたよ！」

外から、みんなの歓声が聞こえてきた。

「具合はどう？」

レン、ミヤシロ、コゴミとキュウリ、次々とあやめの顔を覗きに来た。

「ありがと。もう大丈夫。」

改めてみんなの優しさを噛みしめつつ、涙をこらえてあやめは笑った。その日一日安静にしてベッドに横たわっていたあやめは、残る一人の訪問を首を長くして待っていた。

しかし、来ない。

(ワトソニアは、毎日こうやって待ってたのかな・・・)

命の世界に来てしまってから、何日経つだろう。指折り数えてみんなの訪問を待つワトソニアが見えるようだった。

ミサキがやってきたのは、夕方の涼しい風が吹き始めた頃だった。

「調子はどう？」

「色々、迷惑かけてごめんなさい。もうすっかり良くなったみたい。退屈してたところ。」

あやめの血色の良い頬をみて、ミサキもにっこり笑った。

「そうみたいだね。良かったよ。これ・・・」

ミサキは、大きな花束を取り出した。赤、黄、ピンク・・・全部、フリージアだ。

「わあ！どうしたの！」

「あやめが退屈してるだろうと思って。この部屋、殺風景だからね。」

「ありがとう！私、花なんてもらうの初めて。」

大喜びで花を眺めるあやめを見て、ミサキは笑った。

「やっぱり、双子なんだね。」

「え？」

「ワトソニアも、花を持っていくととても喜ぶんだよね。花を見て笑ってる姿なんて、そっくりだよ。」

はしゃいでいた気持ちが、一気に冷めた。

(ワトソニア・・・)

しばらくたって、クーニャンが夕飯だと呼びに来た。いつもの楽しい食卓で、今後について話が出た。あやめの体調を気遣って、メラスフェルラ収穫のため山を登るのはまだ早い、とみんなは言ったが、あやめは明日出発したいと言
い張った。

「だって、ワトソニアは待ってるんだよ。私なら、大丈夫。」

あやめは言った。

明け方から、深い霧がかかり辺りは真っ白に見えた。レンを先頭に、1列になって細い山道を登っていく。自然と、口数も少なくなり、黙々と足を進めていくこととなった。

メラスフェルラは、可憐な小さな花をたくさん着け、しっとり葉を濡らしていた。レンのいっていた通り、株が二つに分かれている。東側のメラスフェルラは元気に花を咲かせているが、西側のものは枯れ木のような状態になっていて、僅かに残っている葉も黄色く変色してしまっていた。

「さあさあ、これが、メラスフェルラに一番近いフリージアですね〜。」

レンは、しばらくメラスフェルラの周りの花の中をウロウロとしていたが、その中から黄色いフリージアを手にとった。

「あやめ、さあ、最後の採集です。“メラスフェルラに最も近い所に生えている、フリージアの花粉”でしたね。」
歩み寄ったあやめに、レンがそっとフリージアの花の茎を握らせた。コゴミはメラスフェルラの脇で、持ってきた携帯用ポットなどでお湯を沸かし始めた。

「じゃあ、採ります。」

あやめは、黄色い花をそっと摘み取った。そのまま、花粉が落ちないようにコゴミの元に急ぐ。

「はい。」

「おう！花粉・・・花粉だよな。よし、ここに入れな。」

コゴミの指差す鍋には、色々な物が入っていた。蓮の花びら、チンゲン菜、蕪の根、キャベツの葉、コゴミ。それらがグラグラと煮立っていた。

あやめは、鍋の上で、そっとフリージアの花を振った。パラパラと花粉が鍋の中に吸い込まれていく。その途端、茶色く濁っていた鍋の中が澄んだ黄色に変わった。

「すげえ。なんか、ほんとに何か起こりそうだな。」

コゴミが驚いて鍋を覗き込む。鍋からは、甘いフリージアの香りが立ち上る。

「不思議ですね。花粉を入ただけで、こんなに変わるものでしょうか。」

ミヤシロも興味深げに鍋を覗き込んだ。

「しかし、これで出来上がりそうですね。あやめ、早速メラスフェルラに与えてみましょう。」

「うん。」

コゴミが、小さなマグカップに液体を注ぎ渡してくれた。

(ワトソニアが、元気になりますように！)

あやめはしゃがんで、西側のメラスフェルラの根元に、勢い良くマグカップの中身をぶちまけた。

ビシャッ。

「おい！もっと、そっとやれよ！有り難味ないだろ、それじゃ。」

コゴミが注意したが、すでにマグカップの中は空っぽだった。

「仕方ねえなあ・・・おおっ!？」

「これは・・・」

メラスフェルラを見ていたみんなの顔が驚きが変わった。一瞬、歓声が上がったが、その後は声一つ立てずに、メラスフェルラを見つめている。あやめが視線を、コゴミからメラスフェルラに戻すと、さっきまでしおれていた葉がゆっくりと起き上がっていくのが見えた。

まるで、早送りの映像を見ているようだった。葉が大きく育ち、茎が伸び、あっという間に花芽をつけた。そして、白い小さな花が、一つ一つ、静かに咲き始めた。死にかけていた西側のメラスフェルラは、すっかり活力を取り戻し、東側のものと寸分たがわぬ姿になった。

「メラスフェルラも、双子だったんだな・・・」

コゴミが呟く。そう思うくらい、二つの株は似ていた。

「いやいや～。これでやっと元通りです。あはは。」

レンが嬉しそうに笑い、あやめを促した。

「さあ、この西側のメラスフェルラを、。」

レンは改めて、あやめを促した。あやめは立ち上がり、そっとメラスフェルラの花に触れた。咲いたばかりの花びらは、とても柔らかい。

「今度は、茎ごと採ったほうがいいな。その方が、あとで加工しやすい。」

コゴミが注意した。

「分かった。」

あやめは、花がたくさんついている茎を3本選び、根元からゆっくりと丁寧にもぎ取った。

「良かった。これで、ワトソニアは助かるね。」

ミサキが嬉しそうにあやめを見つめた。あやめは軽く微笑んだが、心から喜ぶ気持ちにはなれなかった。

「さてさて。いったんワタシの家に戻って、一休みしましょか。今夜も、ワタシの家に泊まってくださいね。飛び切りのご馳走を、作りますからね～。」

レンが得意そうに腕を叩いて見せた。

「そうだね、私も手伝うよ。」

クーニャンが言った。

「今夜は、収穫祝いだよ。また、いっぱい飲もうか！」

「いいねえ！賛成！！」

コゴミも嬉しそうに叫んだ。

またしても飲みすぎたせいで、出発は午後になってしまった。早足で道を急いだが、レンの曾祖母の家に辿り着いたのは、日が暮れた後だった。レンの曾祖母への挨拶もそこそこに、簡単な夕食を摂り、以前借りた倉庫に寝床をこしらえる。

(みんなでこんな風に並んで寝るのも、もう最後なんだ・・・)

そう思うと、あやめは気が沈んだ。すぐ横にいるクーニャンも、いつもなら何か話しかけてくるのに、妙に静かにしている。

「クーニャン・・・」

あやめが声をかけると、クーニャンはハッとしたようにあやめを見た。

「ど、どうしたんだい？」

その驚きように、あやめがびっくりする。

「どうって、どうしたの？クーニャン？」

クーニャンは、なんだか切ない顔をして、あやめを見つめた。

「どうって・・・どうしていいか分からないんだよ。」

「え？」

「ちょっと、夜風に当たってくるよ。あやめは、先に寝てな。」

そういうとクーニャンは、さっさと倉庫を出て行った。

「しばらくしたら、戻ってきますよ。」

クーニャンの向こう側で寝そべっていたミヤシロが、あやめの方を振り返りながら言った。

「心配する事はありません。少し、感傷的になっているだけです。」

「そうなの？」

「・・・あやめは、重ったよりも鈍いですね。」

「は？」

「まあ、そのうち分かるでしょう。クーニャンは、パワフルな女性ですからね。このままでは終わりませんよ。」

ミヤシロはクックとしのび笑いを漏らした。

(なんなの?)

はっきり話をしないミヤシロに、あやめは少し苛立ちを覚えた。しかし、ミヤシロはクーニャンの兄である。あやめの分からないクーニャンの心模様も、ミヤシロは察知しているのかもしれない。

あやめは、しばらくクーニャンに思いを馳せていたが、次第にそれは、ワトソニアや、ミサキのことに移って行った。

『ワトソニアは、小さい頃からミサキが大好きなんだ。分かってやってくれよ。』

コゴミに言われた言葉が、心に残っている。そして、ワトソニアのせつない視線。

(戻ったら、ワトソニアは元気になって・・・ミサキと結婚するんだろうな。)

あやめは体育すわりをしたままで膝に肘をつき、手のひらを頬に当てながらぼうっと考えた。

(ミサキだって、ワトソニアを大事に思ってる。)

ミサキに限らず、コゴミも、ミヤシロも、クーニャンも、みんなワトソニアを愛していることを、あやめは実感していた。クーニャンが、どんなに仲良くなりたいて言ってくれても、コゴミとミヤシロがどんなに親しく話してくれても、ミサキがどんなに優しくしてくれても、ワトソニアにはきっと適わないのだろう。

(早く・・・帰りたいな。)

熱を出した後、ミサキからワトソニアに似ていると指摘されてから、あやめはただただ、早く帰りたかった。住み慣れた世界へ。その一心で、病み上がりの体を動かしてメラスフェルラを採取し、レンの曾祖母の家まで歩いてきた。

(ママ・・・)

優しい母親の顔が浮かんだ。それは決して、イキシアの顔ではない。

(ママと一緒に、帰りたいよ。)

寂しさだけが募る。命の世界にも、花の世界にも、自分の居場所は無いように思える。所詮自分は、ワトソニアの代用品なのだと、思い知らされる気がして辛かった。

うじうじと考えていると、コゴミが話しかけてきた。。

「あやめ、さっきからぼーっとしてるけど、どうした？気分でも悪いか？疲れたか？」

「別に・・・」

頬に当てた手を、なるべく自然に動かして、目じりからこぼれそうになる涙をこっそり拭う。

「そうか？まあ、なんでもないならいいけどさ。」

コゴミは、あやめの足元で丸くなって寝ているキュウリに目を落とした。

「気持ち良さそうに寝てるな。コイツ。」

耳を澄ますと、キュウリがスピスピと息をする音が聞こえてくる。

「さて、俺も寝るか。明日こそ早起きしないとな。」

コゴミはぐっと腕を伸ばした。

「そうだよ。今日みたいに、二日酔いで起きられないなんて、かっこ悪すぎだよ。」

あやめが意地悪く言うと、コゴミは頭をかいた。

「参ったな・・・レンやミサキみたいに、酒に強くないんだよ俺は。あいつらは幾らのんでもケロッとしてるもんな。

そうだ、あやめは飲めないのか？」

「私？」

「ああ、そうか、あやめの世界では二十歳まで飲めないって言ってたっけ？こっちは関係ないからなあ。あやめもこの機会に試してみたらよかったのに。」

「結構です～。」

あやめは口を尖らせて、迷惑そうに言った。

「ちえっ。ノリの悪いやつだなあ。ま、いっか。さあ、寝るぞ！」

「うん。」

あやめは、コゴミに向かって微笑んだ。コゴミはいつも、元気をくれる。さっきまで孤独だった沈み込んでいく気持ちが、少し軽くなったように感じた。話を聞いてこっそり笑っているミヤシロとミサキの気配も温かく、心地良かった。例えそれが、今だけのものだと分かっている。

「クーニャンはまだ戻らないけど、そろそろ寝ようぜ。灯り、少し落とすぞ。」

コゴミはそうやってランプの火を弱めた。

みんなが寝静まった後も、レンは曾祖母と長い間話しこんでいた。

「全ては・・・お前次第じゃな。」

一通り、レンの話が終わった後、レンの曾祖母はため息混じりに言った。

「寿命の違いは、心得ておるのだろうか？」

「もちろん。母さんと同じ運命になることは、分かっています。」

レンは、まっすぐ曾祖母の瞳を見つめて言った。

「そうかい・・・」

レンの曾祖母は、悲しげにレンを見つめ、それから視線をそらした。

「覚悟が出来ているのなら、止めはしないよ。・・・それもまた、良いだろう。」

命の世界で送る最後の日は、雲ひとつ無い晴天だった。寝坊することもなく、全員、夜明けとともに目を覚ました。いつも通り、レンが準備してくれた美味しい朝食を食べ、コゴミが煎れたハーブティを飲んだ。楽しいおしゃべりも、いつも通りだった。

倉庫を片付けた後、レンの曾祖母に挨拶に行った。

「お前たちのお陰で、この世界の問題も、いくらか解決されたようだね。ありがとうね。」

レンの曾祖母は、餅を紙袋に詰めながら礼を言った。

「気をつけて、おかえり。」

レンの曾祖母は、そうやってあやめの頭を撫でた。そして紙袋をあやめに握らせた。

「お婆さま、ありがとう。この間いただいたお餅も、とても役に立ちました。」

「そうかい、そうかい。そうしてもらえたら嬉しいよ。さあ、お行き。お前さんの双子にも、よろしく。」

レンの曾祖母は笑顔であやめを見送った。

「あやめ、また餅もらったのか？」

紙袋を目ざとく見つけて、コゴミが尋ねる。

「もう！コゴミは食いしん坊なんだから！」

あやめが紙袋を背中に隠すと、コゴミは困ったように笑った。

「だってよ、あれ、本当に美味かったんだぞ。」

「そうですね。とても美味しく戴きました。時間があるならば、作り方を教わって行きたいくらいです。」

ミヤシロが褒めると、レンは嬉しそうに言った。

「そうそう、婆さまの餅は最高なんです～。次に、遊びにいらしたときにでも、作り方覚えていってくださいね。あはは。」

「次、ですか・・・」

ミヤシロは少し曇った表情になったが、すぐに笑顔を取り戻した。

「そうですね。是非また、こちらに遊びに来たいものですね。」

「そうだね。レンにも、婆さまにも会いたいからね。」

ミサキがそういうと、みんな黙って頷いた。そんな話を聞いていると、昨夜まで、家に帰りたくて仕方なかったあやめも、なんだか別れが悲しくなってきた。

(もう、会えなくなっちゃうのかな・・・)

あやめは、髪に挿してあるクーニャンのくれたかんざしにそっと触れてみた。冷たい玉の感触があやめを落ち着かせる。いつからか、かんざしに触れるのが癖になっていた。かんざしの存在を確認すると、クーニャンがいつも近くにいるののだと感じる。あやめも、クーニャンに何か、自分の気持ちを伝えられるようなものをあげたかった。しかし、何も持たずにこの世界に来たあやめには、何一つあげるものが無かった。

懐かしい樹が見えてきた。

「あれ！最初に野宿した所じゃない？」

あやめは、隣にいるクーニャンに声をかけた。

「そうだね。向こうに見える崖の下が、トンネルだろう。」

あやめは喜んでいたが、クーニャンは目に見えて暗かった。

「どうしたの？」

あやめは、クーニャンの顔を覗き込む。クーニャンはこちらに来てから、様子がおかしい。こちらに来て何も、あやめがクーニャンと知り合ってから、そんなに日は経っていないのだが、それでも異変には気付いた。

「クーニャン、ここんとこちょっと、変だよ。どうしたの？」

「あやめ・・・」

「何か、心配事でもあるの？」

「私・・・」

クーニャンは、あやめの視線をそっと外し、遠くを見た。

「私、ここに残ろうかと思ってるんだよ。」

「えっ！」

突然の告白に、あやめは言葉を失った。

「ど、ど、どうして？」

言葉が上手く出てこない。

「ここに残って、レンと暮らそうかと思ってる。」

驚きで、声も出ない。でも、良く考えてみれば、ちょっと前からクーニャンは、コゴミに興味を示していないようだった。

『若い女の子の気持ちなんて、当てになるもんじゃありませんよ。』

ミヤシロの言葉が蘇る。

(ミヤシロ、気付いていたんだ・・・)

やはり、兄は兄なのだと、あやめは思った。それとも、自分が幼いから気付けなかったのだろうか。

「レンが、好きなの？」

「ああ、好きになっちゃったよ。」

クーニャンは恥ずかしそうにうつむいた。

「小さいときから、コゴミのことしか見てなかったのに、なんでだろうねえ。最初は、あんなジャガイモみたいな男、好きになるなんて思わなかったよ。」

クーニャンはあやめに向かって、笑って見せた。

「ジャガイモ・・・か。そうだね、私もびっくりだよ。」

あやめも笑った。

「だけど、ここに残って平気なの？」

「平気さ。」

「ミヤシロには？」

「全部、話してある。」

「そっか・・・」

ミヤシロは、不安ではないのだろうか、とあやめは思った。寂しくないのだろうか。

「兄さんは、あの通りだからね、ちょっとの事では驚かないよ。“分かりました。たまには里帰りしてくださいね。母さんが寂しがると思いますから。” だってさ。」

「冷たいわねえ。」

「全くだよ。」

あやめとクーニャンは顔を見合わせて笑った。

「何日もかかったけど、昨晚やっとレンを説き伏せたよ。なんでも、私が先に死ぬのが嫌だったらしくてね。こっちの人間は平均六百歳生きるらしいから。ざっと十倍だね、私たちの。」

「十倍！？じゃあ、レンって・・・」

「多分、200歳以上だろうね。とんだ爺さんだよ。あはは。」

「やだ、今の笑い方ってレンみたい。」

「えっ。それは私もやだね。参ったね。」

あやめとクーニャンは、また、顔を見合わせて笑った。それから、クーニャンは真剣な顔になって言った。

「私はここに残るけど・・・あやめは、ずっと友達でいてくれるよね？」

勝気なクーニャンの瞳が、今日は少し潤んでいる。

「短い間だったけど、ほんとに楽しかったよ。あやめに、次の世界に帰るなって言うておいて私がここに残るってのは、ムシのいい話だけど、怒らないでくれよ。」

「うん、怒ったりなんか、しないよ。」

あやめも、つられて目が潤む。なんだか、言いたい事はもっとあるような気がするけれど、言葉にならない。

「あやめ・・・」

クーニャンの瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。

「クーニャン！」

涙は、いったん出るとなかなか止まらなかった。二人は抱き合っ、泣きたいだけ泣いた。

「あやめ、クーニャン、どうしたの？」

ミサキが慌てて駆けつける。

「ケンカでもした？」

「ほっといてくれよ！」

クーニャンがミサキを追い払う。

「どうしたって？」

「さあ？ほっといてくれって。」

コゴミとミサキは、顔を見合わせて首をかしげた。

「放っておいて、大丈夫ですよ。」

ミヤシロが笑いながら言った。

「なんだよ、お前なんで何か知ってるのか？」

「そんな事はありませんが、あの二人は大丈夫ですよ。さあ、私たちはあの樹の下で、最後のお茶にしましょう。ね？レン、そうしましょう？」

「はいはい。そうしましょ！婆さまの餅を焼いて、食べましょ。」

そういうとレンは、一足先に樹の下へ走っていった。

あやめとクーニャンは、10分ほどすると泣き止んだ。赤くなった顔を小川で洗い、クーニャンは最後だといって、あやめの髪を結った。

「さあさあ、私の案内はここまでです。」

トンネルの入口で、レンは明るく言った。

「もう一人のお姫さんが、元気になりますように！ワタシはこれからも、メラスフェルラを守って生きます。あやめの健康も、見守ってますからね。」

「はい。レン、色々ありがと。」

あやめは、レンの手を強く握った。

「ありがとう。」

「ありがとうございました。」

ミサキ、ミヤシロも、レンの手を握った。

「ありがとな。レン。」

コゴミは、レンの肩に腕を回して、笑った。それから、クーニャンを見た。

「ほら、お前もなんか言えよ。」

「そうだね。」

クーニャンは、優しい笑顔で言った。

「みんな、今までありがとう。私は、この世界に残るよ。」

「えっ！」

コゴミとミサキは驚愕の声を上げた。

「レンと一緒にすることにしたんだ。」

「おい、レン、ほんとかよ？」

「はいはい。申し訳ない。本当です〜。」

レンは、ポリポリと頭を掻いた。

「おい！ミヤシロ！なんとか言えよ。ほら、あやめも！」

コゴミは慌てて、ミヤシロを見た。

「クーニャンが、そうしたいと言ってますので。レンはとても良い人ですし、クーニャンは幸せになれるでしょう。」

「お前、それが兄の言う台詞か！？この世界には2度と来られないかも知れないんだぞ。」

「重々、承知の上です。」

ミヤシロは笑顔を崩さなかった。

「クーニャン、お嫁さんになるんだね。」

早くも状況に順応したミサキが、クーニャンの前で言った。

「おめでとう、クーニャン。花嫁姿が見られないのが残念だよ。」

「ありがとう、ミサキ。」

「向こうに帰ったら、僕たちが時々こっちに遊びに来れるよう、イエイオン様をお願いしてみるよ。時間はかかるかもしれないけど、待ってて。」

ミサキはクーニャンに向かって、笑顔で頷いて見せた。

「そうだね。楽しみに、待ってるよ。」

やり取りを見ていたコゴミはため息をついた。

「仕方ねえなあ・・・俺もお願いしてやるよ。」

「私もする！」

あやめも叫んだ。

「クーニャンと、これきり会えないなんて、嫌だもん。私、頑張るね。」

「あやめ・・・ありがとう。」

再びあふれそうになる涙を必死に堪えながら、あやめとクーニャンは見詰め合った。

「そろそろ、行きましょうか。」

ミヤシロが、そっとあやめの肩に手を乗せた。そのままあやめの肩を抱き、後ろを向かせる。

「クーニャン、体にだけは、気をつけてくださいね。レン、クーニャンをよろしく頼みますよ。」

ミヤシロはクーニャンとレンに背中を向けたままで呟いた。返事を聞く間もなく、ミヤシロは、そのままトンネルに向かった。

「さあ、あやめ、行きましょう。私たちには、まだやる事があるのですから。」

早足で歩いていくミヤシロの瞳に、キラリと光るものがあるのを、あやめは見た。

6人が、4人になった。ただそれだけの事なのに、妙に寂しく感じた。トンネルが暗くて長かったせいかもしれない。4人は、無言で歩き続けた。あまりにも暗い場所では、あやめを気遣ってミサキやコゴミが手を引いてくれたが、先頭に行くミヤシロが、3人を振り返ることは一度もなかった。

(ミヤシロも、本当は辛いんだろうな・・・)

あやめはそう思って、余計に胸が苦しくなった。今でも、イエイオンやイキシアを両親だと感じる事はなかったが、それでも

(クーニャンのこと、お父様にお願いしてみよう。)

と思った。

ミヤシロが、急に立ち止まった。

「どうやら、着いたようですね。」

見ると、ミヤシロの前には大きな岩があり、行き止まりとなっている。

「そうだね、ここだね。」

ミサキは岩に手を触れ、何か探し始めた。しばらくすると、

「ここだ。あったよ。」

といてあやめを手招きした。あやめがミサキの横に行くと、ミサキは命の扉の鍵をあやめに手渡した。

「暗いから、鍵を落としたりしないように気をつけて。ここだよ。」

あやめの手を取って、鍵穴の近くに持っていく。

「出来るよね？」

「うん。」

あやめは、穴にそっと鍵を挿し込んだ。またしても、音もなく岩が開き、外から明るい日差しが差し込んできた。眩しさに目が眩んで、外が良く見えない。

「やっと帰ってきたな。」

コゴミが眩くより早く、外から歓声が上がった。

「帰ってきたぞ！」

「早く、イエイオン様にお知らせしろ！」

光に目が慣れてきて、外が見えるようになると、目の前には7人の男達が並んでいるのが分かった。王家の大臣たちだった。どうやら、1人は知らせを持って屋敷に走ったらしい。

「フリーズ様、御帰りなさいませ。」

男たちは、あやめの前に跪いた。

「えーと・・・、ど、どうしよう。」

あやめはコゴミ、ミサキ、、ミヤシロの顔を交互に見た。何をどうしたら良いのか分からない。

「どうしましょうねえ。とりあえず、早くワトソニアにメラスフェルナを飲ませないと。」

ミヤシロが可笑しそうに笑いながら、あやめに囁いた。

「そうだね。うん。えーと、では・・・」

あやめは大きく深呼吸して、7人の大臣たちに言った。

「ワトソニアに薬を・・・ワトソニアの所に行きたいので・・・ええと・・・。」

緊張したあやめの覚束ない台詞に、コゴミとミヤシロが噴出すのが聞こえた。

「ちょっと・・・！」

小声であやめが怒る。

「だって、お前、それくらいの事もちゃんと言えないのかよ。」

コゴミは必死で笑いを堪え、苦しそうにしている。そうこうしているうちに、崖の上から声がかかった。

「イエイオン様がいらっしゃるぞ！」

7人の大臣達は、慌てて崖を登った。

「俺たちも行くか。」

コゴミは、素早くあやめを抱きかかえると、ひらりと飛び上がって崖を越えた。ミサキとミヤシロもそれに続く。

フリージアの花畑の中で、跪いてイエイオンを待つ大臣たちが見えた。屋敷の方から、イエイオンとイキシアが息を切らして走ってくる。

「フリージア！無事で良かった！」

駆けつけたイエイオンは、あやめを強く抱きしめた。突然の事に、あやめは驚いた。

「良かった・・・」

深く息を吐き、呟くイエイオンの胸に抱かれながら、あやめは

(これが、お父さん・・・なのかな)

と感じた。ふと見ると、イエイオンにすがりつくようにして、イキシアも泣いている。

「フリージア・・・！今度は本当にあなたを失うのではないかと・・・」

「イキシア、無事であったのだ、もう良いのだ。」

イエイオンは、あやめを放し、イキシアの肩を抱いた。

「フリージア、私たちだけではない。アリウムも大変心配しておった。」

「ママも・・・」

辺りを見回すと、5メートルほど先にアリウムの姿があった。アリウムは、あやめを見て強く頷き、感涙に咽んだ。

(ママ・・・)

あやめはアリウムの元に走ろうとしたが、それをイエイオンに止められた。

「待て、フリージア。まだ話はあるのだ。」

イエイオンは後ろを振り返った。フリージアの花に囲まれた小道から、一人の少女が飛び出してきた。

それは、ワトソニアだった。

「ワトソニア！」

あやめもミサキもコゴミもミヤシロも、みんな叫んだ。コゴミはすぐにワトソニアに駆け寄った。

「おまえ、何してるんだよ！寝てなくちゃダメじゃないか！」

「コゴミ、色々ご心配おかけしてごめんなさい。」

ワトソニアは澄んだ声で話した。2週間ほど前のか細い声とは全く違う。頬はふっくらとピンク色に染まり、ワトソニアは花のように美しい。

「私、すっかり良くなりましたの。」

嬉しそうに微笑む。

「本当に、良くなったのですか？」

ミヤシロは信じられないといった面持ちで尋ねた。

「ええ、すっかりですよ。私だけではありません、大地も潤いました。きっと、みなさまのお陰ですわ。」

「そうか、それは良かったよ！」

ミサキは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑った。

あやめは、今まで自分を囲んでいた3人が、ワトソニアの周りで笑うのを見て動けなかった。

(あれが、あるべき姿なんだ……)

「フリージア。」

イエイオンは続けた。

「この世界に残ってはいくれぬか？私もイキシアも、お前とともに暮らしたいと思っている。どうしてというなら、アリウムと暮らしても構わん。もう、お前と離れ離れにはなりたくないのだよ。」

「帰ります。」

あやめはすぐに言った。

「私、帰りたい。」

「どうしてもか？」

イエイオンはさびしげに聞いた。

「どうしてもです。ママがここに残りたいのなら、それでも構いません。」

ママなしで暮らす事なんて、あやめには考えられなかったが、勢いで言ってしまった。

(ママは、きっと一緒に居てくれる。)

そんな気持ちがあった。

案の定、アリウムはイエイオンの前に進み出ていった。

「あやめと私を、次の世界へお帰してください。」

イエイオンは悲痛な面持ちでうなずいた。

あやめの旅は、終わった。旅の始まりも突然だったが、終わりもあっけなかった。ミサキに送られて、あやめは母と二人で『次の世界』へ帰って来た。『次の世界への扉』は、あやめの住んでいる町にある神社の、小さな滝の裏の洞窟につながっていた。

滝の裏で、ミサキと別れた。

「また、遊びに来てね。必ず、迎えに来るから。」

ミサキは言った。

「ミサキも、幸せにね。」

あやめは、ミサキの目をまっすぐに見て言った。

「ワトソニアと、仲良くね。」

「え？」

「結婚するんでしょ？みんなそう言ってる。」

「そう決まってるわけじゃないんだけど・・・」

ミサキは少し照れたように笑った。否定はしない。

「あら、ミサキはワトソニアと結婚するの？」

アリウムは驚いて目を丸くした。

(やっぱり、結婚するんだ。)

あやめは確信した。何度も何度も言い聞かせて、割り切ってきたつもりだったけれど、まだ未練たらたら自分が情けなかった。

「ママ、もう行こう。」

あやめは、先にたって歩き出した。

「あ、そうだ。」

2メートルほど進んでから、あやめは振り返った。

「クーニャンのこと、よろしくね。絶対だよ。」

「僕に、任せておいてよ。」

ミサキは爽やかに笑って、大きく手を振った。

家を出たのは、8月8日。テニス部の合宿を2日後に控えていた。あやめが戻ってきたのは8月28日。合宿どころか、夏休みまで終わろうとしている。

コゴミが散らかしたあやめの机は、母がきれいに片付けてくれていた。以前と、何も変わらない日常が始まる。可愛がっていたキュウリも、『花の世界』においてきた。あやめとそっくりで、やさしいワトソニアになら懐いてくれるだろう。

あやめは、ベッドに腰を下ろして、伸びをした。

(ゼーんぶ、おしまいだ。)

そのままゆっくり、ベッドに倒れこむ。気持ちよい、嗅ぎなれた自分の布団の匂いがする。頭に違和感を感じ、手をやると、クーニャンのくれたかんざしが手に当たった。抜き取って眺めてみる。

「クーニャン・・・」

クーニャンの濡れた瞳が脳裏に浮かんだ。

(また、会いたい・・・)

ふと、あやめは、自分がした事が間違っていたのではないかと、不安になった。自分のために、愛する息子を置いて『次の世界』にやってきたママ。それに耐えたミサキ。それでもあやめに親切にしてくれた。コゴミだって、ワトソニアを助けるためにあやめを殺すという方法だってあったのに、そうしなかった。ミヤシロはいつも、温かく冷静に見守ってくれていたし、クーニャンはあんなに短い間だったのに、本当の友達になってくれた。

かけがえのない、仲間たち。

(それなのに・・・私は・・・逃げてきたんだ。)

自分は、ミサキとワトソニアが仲良くしているのを見るのが辛いばかりに、逃げてきたのだ。旅の後半は、逃亡するための旅だった。一日も早く、ミサキから離れるための。あやめは、初めて、自分の恋のために泣いた。失った仲間たちのために泣いた。そして、母への申し訳なさで、泣いた。

(私はまた、ママとミサキを離れ離れにさせてしまった・・・)

あやめはその夜泣き明かした。明け方になってから、少し眠った。

始業式は、いつも眠たくなる。校長先生や学年主任の話を聞いて、新しい教科書が配られる。たったそれだけのことなのに、妙に疲れた気分になる。

「あやめ、見てて冷や冷やしたよー。」

学校からの帰り道で、里美が言う。

「ずーっと寝てたでしょ？頭が、ガクガクいってたよ。」

「あ、分かっちゃった？」

あやめは、しまった、という顔をして見せた。何しろ、29日から31日の3日間で、宿題を全てこなさなければならなかったのだ。テニス部の練習は、引き続きお休みさせてもらってしまったが、それまでの旅の疲れで体はグッタリしていた。そのため宿題をしている途中で、うたた寝してしまうことも多かった。結局、昨晚寝ないでラストスパートをかけることになってしまった。

「ねえ、夏休み何してたの？なんか病気だって聞いたけど、もう大丈夫なの？」

こちらの世界では、私は急性盲腸炎で入院しその後も大事を取って休んでいた、という事にしてある。

「もう平気！本当にごめんね、心配かけて。」

里美は、本当に心配してくれていたのだろう、と思うと、あやめは胸が痛んだ。

「そうか、もう平気ならよかった。あ、そうだ・・・」

里美は悪戯っぽい笑顔を見せた。

「もう聞いた？桂先輩の事。」

桂先輩は、テニス部の先輩だ。カッコイイので女子にはとても人気がある。

「先輩がどうしたの？」

「3組の畠山さんと付き合ってるんだって！夏の合宿で畠山さんが告白して・・・」

里美は二人の恋の話が続けたが、あやめの頭には入らなかった。

(付き合ってる・・・か。)

ミサキの事を、ふっと思い出した。ミサキとワトソニアは、上手くいってるのだろうか？

「羨ましい～。私にも、誰かカッコイイ人現れないかなあ～。ね？あやめはどんな人がタイプ？」

「私？うーん・・・私は、当分いいかな。」

だって私は、失恋したばかりなんだから。

「なにそれ～。そんな事言っているとすぐに、お婆さんになっちゃうよ～。」

「ひどーい。」

笑っていると、里美が通りの向こうをじっと見た。

「あんなところに外人さんがいるよ。超カッコイイ～。モデルかな？」

「モデル？」

「ほら、あそこ。」

里美は、こそっと指を指した。その先に、背の高い金髪の男が居る。

「顔も小さいね～。だけど・・・なにあれ？肩になんか乗っけてない？」

里美の言うとおり、男は肩に小さな動物を乗せている。

「コゴミ・・・？」

あやめは目を疑った。あれは、コゴミ？

「キュウ！」

間違いない、キュウリの声だ。あやめを見つけて飛び跳ねるキュウリ。

「おう！あやめ！」

当然ながら、コゴミは気付いた。

「あやめ、知り合い？」

里美が驚く。

「いや・・・知り合いって言うか・・・」

「“あやめ”って言ったよね？」

「う、うん・・・」

口ごもっている間に、コゴミは通りを渡ってあやめの前に来た。

「随分探したぞ。ほんとに世話の焼けるやつだな。お前は。」

「コゴミ、どうしたの？」

「こいつ見るよ。」

コゴミはキュウリをあやめの手に載せた。

「あれ？」

あやめの手の中で、キュウリは嬉しそうに鳴いたが、キュウリの姿は様変わりしていた。

「どうしたの？キュウちゃん、どうしてこんなに瘠せてボロボロになっちゃったの？」

見ているだけで、悲しくなるほど、キュウリは小さくなっていた。

「たった3日でこれだけ。ほんっとやっつけられないよな。あやめが帰ってから、飲まず食わずで鳴き続けた結果がこれだ。参ったよ。」

「そうだったの・・・」

「お陰で、ワトソニアまでオロオロしちゃってよ、あいつも随分やつれたぞ。ほら、キュウリ、もう食べられるだろ？」

「キュウ！」

ボロボロになってしまったキュウリは、あやめを見て安心したらしく、コゴミの差し出したパンを素直に受け取って齧り始めた。

「ははは・・・やっぱり、あやめに会いたかったんだな、キュウリは。」

コゴミは、キュウリの頭を優しく撫でた。

(キュウちゃん・・・ワトソニアには懐かなかったんだ・・・ワトソニアは、私の代わりにはならなかったんだね。私の代わり・・・?)

あやめは、ハッとした。

(私も、ワトソニアも、お互いの代わりにはならない・・・?)

わだかまっていたものが、ぽろんと心から剥がれ落ちたような感じがした。あやめはあやめ、ワトソニアはワトソニアなのだ。ワトソニアの代わりに、旅をしたわけではない。ワトソニアの代わりにみんなと親しくなったわけでもなかった。

「コゴミ・・・私、やっと分かったよ。大事な事、分かってなかった。」

あやめは、キュウリを抱きしめながら言った。

「ん？なにが分かったって？・・・あ！それより！」

コゴミはいつものように、ひょいとあやめを抱えあげた。これには里美が驚いた。

「ちょ、ちょっと。あやめ？」

「さっちゃん・・・ええと、これは・・・。コゴミ！下ろしてよ！」

「うるせえなあ。時間が無いんだ。行くぞ！」

里美に挨拶する時間も与えず、コゴミはさっさと走り出した。

「クーニャンの結婚式？もう？」

「おう、なんでも、すぐにやりたいんだとよ。ミサキとワトソニアも、来月には結婚するってさ。」

「早いなあ・・・でも、『命の世界』に行けるようになったんだね。よかった。」

「イエイオン様が許してくれたんだ。お前にも、時々会いに行ったらいいって言われたぞ。」

「ほんと？」

「仕方ねえから、ちょくちょく来てやるよ。俺さまのハーブティも、飲みたいだろ？」

「えー、べつに〜。」

「素直じゃねえなあ、ったく。」

コゴミに抱えられながら、あやめは考えた。

里美の言うとおりに、私はまだ若いけれどあつという間にお婆さんになってしまうのかもしれない。それまでに、恋ってどのくらいできるのだろうか？出来る事ならば、素敵な、幸せな恋がしてみたい。

『若い女の子の気持ちなんて、当てになるもんじゃありませんよ。』

ミヤシロの言葉が、また脳裏をよぎった。

「お祝いだからな、今日もいっぱい飲むぞ！」

コゴミが嬉しそうに叫んだ。

「うん！お祝いだね！」

あやめの声も、弾んできた。

(おめでとう、レン！おめでとう、クーニャン！)

今は、ミサキとワトソニアのことも心から祝福できるような気がする。

「私、ワトソニアとも、仲良くなりたいな。」

「おお！ワトソニアもそう言ってたぜ。仲良くしろよ。」

「うん！」

あやめとコゴミは、弾むようにトンネルを駆け抜けていく。

あとがき

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。

電子書籍に不慣れだった為、PDFにしたときのページの出来栄えが大変酷いことに、今更気がつきました。
大変申し訳ありません。
時間があれば、また修正したいと思います。

数年前に、とにかくなのか「物書きになろう」と模索していたときに書いた小説です。
修正すべき箇所も多くあるようにも思いましたが、そのままの記述でだしてみました。書いたときの勢いだけは、残っているかもしれません。

著者としては、当時、登場人物にはなるべく綺麗な言葉で話してもらいたい！というこだわりがありました。その結果、ファンタジーにしては台詞がやや堅いような気がします。

拙い小説ではありますが、もしご感想など戴ければ嬉しく思います。
ありがとうございました。